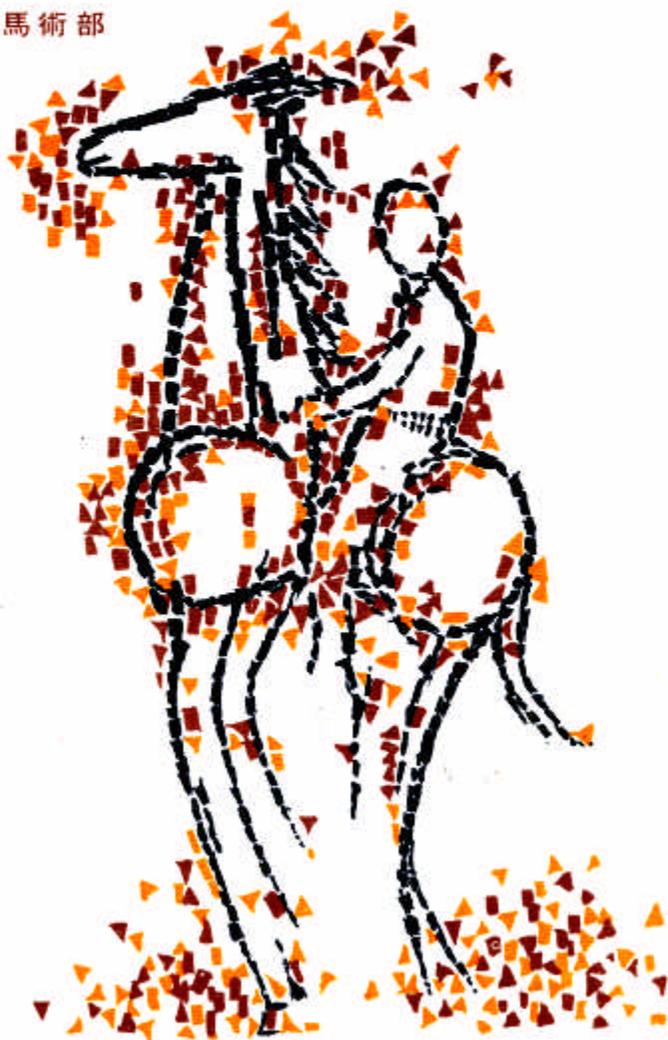


いななき

創立42周年記念号

7

青山学院大馬術部



若
駒

若駒の黒き群れの 雪蹴りて

牧馬にあり

今し 巷に帰りゆく

軽々と 足躍らせて

光り満つ 明日に向かいて

ひたすらに

春をば待たん



目 次



巻頭言	3
部長挨拶	4
監督挨拶	5
主将挨拶	5
馬術部はこうして歩んできたのです	7
創立期	8
井上恒春	山本盤彦 内藤長一	
黄金期	8
古谷信治	緒方一夫 内田友正	
内熱期	16
伊藤直明	東條広実 河島 一 脇坂達雄	
動乱期	21
青木 昇	羽坂勇司 阿部雄三 池谷三郎	
復興期	29
柿原政吉		
再編成期	31
植松英二	沈 酒 浜 堀内陽一 森 健	
添花期	36
平木茂子	福原美里 東 雄三 藤根 威	
大島孝子	内藤喜嗣 渡辺 充 佐藤一貫	
充実期	41
石割洋子	平中三彦 岩崎 修 金子璋男	
高倉 彰	五十嵐豊子 水島道子 岡田友美子	
児玉京子		
太平期	56
伊藤正昭	石田謙三 岸 祐子 高井由紀子	
小沢詔子		
二部記	62
秋元国松	金山 屯	
高等部記	65
岩崎 修	真木康弘	
特別寄稿	祝四十二周年に寄せて	69
遊佐幸平	城戸俊三 井上喜久子 岡部長忠	
現役	74
上野圭一郎	松本佑子 高橋和子 稲難武臣	
那波広和	山田恵道 川島称吉	
現況報告	78
対公式戦短評	80
昨日・今日・明日 (座談会)	85
誌上技術指導 (平木茂子)	87
編集後記	89
馬匹紹介	102



巻頭言

緑鞍会会長 青木真次



私は自然を愛します

それには素朴な生命が溢れているからです

私は若い人達の情熱を愛します

それには汗の臭がするからです

私は生きものを愛します

それには心の通うものがあるからです

私はスピードとリズムを愛します

それには躍動があるからです

私がいつの間にか初老の域に入ってしまったのいつまでもスポーツが好きで、あの愛らしい眼をしたテッカイ馬が忘れられないわけを自分に問いただしてみたら、こんな答が自然に出てきました。

今ではもう昔物語になりかけましたが、終戦のすぐあと、青山の運動場の片隅で馬を飼いはじめたが、飼料の購入に事欠く始末。近所の豆腐屋、そば屋に朝晩通って蛋白質や澱粉質がいくらか残っている「捨て湯」をもらって来ては少しでも馬にヒモジイ思いをさせたくないと励んだ人達の情熱がわが馬術部の歴史を中断させずに来たのです。

やがて五十年にも及ばうとするこの歴史のすべては私以上にスポーツの精神を尊び、可愛い眼のテッカイ馬をいつくしみ、人の和を愛した人達によって綴られたものにほかなりません。そめ人達の名が何べ-ジにもわたって記せられているのが緑鞍会名簿なのです。

これある限りどんなに時が移り世が代っても次々にひかえる若い人達の情熱がわが馬術部の歴史を書きつづけて行く事でしょう。

再び故国に帰りさて (昭和四年卒)

偶 感

部 長 土 田 三 千 雄

ただに大学といわず、高校でも中学でも、その運動部のあり方というものが必ずしも一様ではない。ここで一番問題になるのは、選手制度である。対外的な試合に勝つために少数の選手を養成することを究極の目標とする運動部というものがある。その部では、その選ばれたまたは選ばれるべき選手のために他のあらゆるものが奉仕する。大学の野球部やラグビー部には多かれ少かれこの色彩が強い。かつて僕のいた大学のポート部もそうであった。一方又、同好者相集つて、互に技をみがき個人的な技術の向上とか鍛錬を目標とする運動部がある。

いわばクラブ式な個人尊重の部である。自動車部とか山岳部等は当然この部類であろう。しかしそのように二つに分けたといつても、一方が他方の色彩を全く兼ねないというものではない。多かれ少かれ両方の目標が共有すると思う。そしてその力ネアイが実はむずかしい問題だと思つ。僕は馬術部はどちらかといえば後者に属するものと思つし、それで上いと思つている。立派な少数のために部の活動をしばる必要もないと同時に、馬術という一つの技術の鍛錬目標を度外視して馬術部はないから、その二つを適当に組み合わせて部を運営することが必要だと思

う。そしてそれをうまく運営することこそ学生自身の問題であつて、部員はその為に一致協力して運営を誤らぬよう努力してもらいたいと思つている。

部の色彩がその何れであるとも、大学の運動部というものがあるが学生の心身鍛錬の場として、また人格的な切磋琢磨の場として極めて重要な学生生活の場であることはいうまでもない。

そのことは運動部ばかりではなくあらゆる部活動についてい得ることだ。何の部にも入らぬ学生というものは学生生活の大切な部門を自ら閉すことになる。部の生活から得たものがどれほど大きかつたかは、それを経験したものだけが知っていることのようにである。

学院の馬術部は昭和二十五年、大学の馬術部として再建されて以来十五年たつた。その間大勢の部員が卒業して立派な社会人となり、その先輩達め結果？をみていると僕は心が暖まる。運動部の生活は一生、その人達の生活を潤す泉となつていようと思はれる。

何の役にも立たないが僕はデクの棒でもよい部デクの棒になつたと思つている。

監督挨拶

村野吉昌

馬術部創立四十二周年。良きにつけ悪きにつけ、この伝統の一ページの中に参加していると云うことに私は、誇りを感じます。不肖ながら監督と云う職にあり、四十余年の時を迎える事は、感無量の内に自分のいたらなさを深く反省するものであります。

私が入部した当時は、沈さん、植松さん、始め諸先輩ときびしい中にも楽しさのある、部生活を送り伝統の永さを数えるより皆創始者の心意気で過した時代でした。

馬も当時は関東の名馬？とうたわれた青峯一頭で、ウエスト校舎へ当時そう呼んだ。うらのポロ小屋でしたが、これから、この部を大きく成長させる基礎を造るのだと云う意気のほとばしっている時代でした。まさつもありました。その中で今でも一番心に残るのは、三部優勝戦の時の事です。

初めての大きな試合でしたが、不思議に落ち着いて乗る事が出来たと思っております。最後の三段を飛び越した時は、反動で三十センチもおおられ、その時の痛さは、優勝の喜びと同時に今でも忘れられませぬ。あれからもう十年の余り経っています。藤根君、東君、大島君などに合つたたびに、同じ事を何ん回も何ん回もしゃべりあい、その度び事に同じ事を笑い合つのも、苦業を共にした者同志の共通の話題であります。

馬術部の四十二周年を心から祝すと共に、今後ますます部の充実と発展を祈願するものであります。

主将挨拶

本目 普

青山学院大学が創立してから今年で九十周年を迎える事に成りました。我々体育会馬術部も部活動を始めてから今年で四十二周年を迎える事が出来大変喜ばしい事です。月並みの言葉と成りますが一口に四十二年間と言いましても初代の先輩方と我々現役との年令の差は親子以上の差があり、いかに長い間当馬術部が続いているかが想像されます。部員全員も四十二周年という事を開きおよびまして今さらながらにいかにも馬術部が青山学院大学体育会に於いて長い伝統を誇るにたりる部の一つであるかを新たに認識し身のひきしまる思いがしております。長い伝統という事が大変我々現役部員の心の支えと成って毎日早朝の練習、合宿、試合又部以外の生活に於いても無形の力を發揮してくれれます。当馬術部が創立し活動し始めてから幾多の星霜を経た事と思いますが、今その長期間に於ける発展の跡を顧み今後に備えるため等に長い間御苦労なされた諸先輩方の感想をこの一冊の「いななき」に纏の公にする事の出来るのは御同慶の至りであり欣快に堪えないところでもあります。この四十二年間馬術部の発展のために力注いで下さいました先輩諸兄弟の皆様方に部員代表致しまして感謝の意を表すると共に今後の馬術部に絶大なる御支援を懇願し私の挨拶を終りたいと思えます。

祝 青山学院大学体育会馬術部
創立42周年記念

パレス乗馬倶楽部

東京都千代田区皇居内
TEL (231) 5788-9

紳士用
◎ ボロシャツ
◎ セーター
◎ 靴 下

銀座メリヤス株式会社

取締役社長 内藤長一

東京都中央区銀座6-2
TEL (571) 0010・0618

馬術部は

こころ

歩んでまわりたいのよ

創 立 期

大正十一年〜大正十二年

学院馬術部こと、初めの歴史的事情はハッキリしない。しか

し運動部的活動が明らかに動きはじめたのは、今から四十二年

前である。この翌年に関東大震災がおきている。部員数は十二

三名位、どんな先輩諸兄がおられたのだろうか。現在の緑鞍

会名簿に残された名前の少いのは淋しい。この部はやがて古谷

信治氏に引き継がれ黄金期と導かれて行く。

四 十 一 年 前 の 馬 術 部

井 上 恒 春

今から四十年以上も前のことですから
現役の部員の皆様は、まだこの地球上に
存在していない頃の話です。従って私自
身の記憶も覚つがなく、話が誤って前後
するかもしれません。

私達が馬術部（或は乗馬倶楽部と称し
ていたかもしれませぬ。）としてなんと
かまとまつた行動をとるようになったの

は、確か私が卒業する二年前の頃で大正
十一年頃だったと記憶しております。翌
年には関東大震災が起つて校舎も甚大な
被害を受けたばかりでなく、部員の連中
も多かれ少かれ被害を受けましたので震
災後は当分の間馬どころではなかつたの
です。震災後の授業はバラック建の粗末
な校舎で講議をうけておりましたが、板

張りの廊下を長靴をはいた部員がさつそ
うとかつぽほしていた光景を不思議にうつ
すらと記憶しておりますので、其の年の
終り頃には結構活躍していたのではない
かと想像されます。

その頃最も印象に残っている仲間は、
私より二年下め森政雄で一度違いたいと
思い乍らどうしても音信がとれず残念に
思つております。恐らく当時の方は覚えて
おられるでしょうが、森君は非常に熱
心に一同の世話をしてくれました。皆の
為に馬場の世話、部員間の連絡、外部と
の折衝など殆ど独りで幹事役を引き受け
馬術部の発展に最も貢献された方だと思
います。

部員の数は約十二、三名位で、中学部
が六、七名位だったように記憶します。
中学部のメンバーでは内用友正君が最も
熱心だったように記憶します。

その当時め練習方法は、当時としては非
常に恵まれていたのではないかと考えま
す。私らは騎兵隊め好意で立派な五、六
才馬を常に使用することが出来て練習に
事かきませんでした。その当時と雖も、

乗馬にかけては、それこそ専門家の騎兵
が使用している。優秀で、しかも充分調
教された馬で練習できる機会はそう簡単
には得られませんでした。

吾々が寝城にしたところは、千葉県津
田沼市のはづれにある騎兵連隊であつて
当時日本軍の騎兵の精鋭が集まつていた
処でした。ここの騎兵連隊は第十三、第
十四、第十五の三個連隊で編成されてい

て、そのうちの第十四連隊が特別の取計
らいで青山学院の出入を許してくれまし
た。それで吾々部員は、月に二回から三
回、土曜から日曜にかけて泊りがけて、
出かけたものです。特に夏季休暇中には
二週間位の隊内合宿が許され、士官の道
場を急場の合宿所にあてがつてくれたば
かりでなく、士官並の立派な食事がまか
なわれるなど、聯隊が私らに与えてくれ
た好意は並ならぬものがありました。そ
うして合宿中には、士官自ら馬場内の基
礎訓練、野外練習、遠乗り、水馬練習、
障害飛越など、軍隊同様の指導をうけま
したため上達も早く、しまいには一同の
腕前は一流の乗り手になりました。

当時の士官で最も親密になつて面倒を
みてくれた田村理七中尉は今でも忘れら
れない方です。その後、戦争中には聯隊
長として南方作戦で奮戦された勇士であ
ります。現在は東京におられ某保険会社
で元気に活躍されておられると聞いてお
ります。

習志野原に通つておりました当時の愉
快だった思い出を二三述べてみましょ
う。

最も印象の深かつたことは合宿中に行
はれた水馬訓練であつて、馬があんなに
上手な泳ぎ手だと云うことに初めて気づ
いたのです。行なわれた場所は稲毛海岸
で、今でこそ余りきれいな所ではありません
せんが当時は海水も澄んでおりましたし
人も出も至つて少く、思う存分馬と共に海
中で楽しんだものです。部員の中には泳

ぎの出来ない者もいた筈だったのに、参加者は一人残らず馬と共に海中に飛び込んだのにはあとから考えて驚きました。乗馬に長年の経験をもっている方はありますが、水馬の経験をもっている方は至って少ないと思います。真夏には実に楽しいものですよ。

高之台への連乗りは炎天のもとに行われ、帰りに人馬共にへばりました。しかし、その日はとんだ拾いものがあつて興を添えてくれました。当日はたまたま高之台で岡田嘉子という女優が映画を撮影していて、馬に乗る場面に吾らの馬を提供したのを覚えております。撮影が終つてカメラマンが遠乗りした吾ら一打の写真をとつてくれたのですが、どなたが当時の写真を持つていた方がありましたらぜひもう一度見たいものです。そのほか野外練習に初めて乗り出でた時には、野原の真ん中に何回となくふり落とされましたが、不思議にこんな時には怪我をしないものです。

こんな具合に一通りの訓練を受けた部員は隊内は勿論、野外も自由に乗馬で行動を許され、全く楽しい乗馬のだいごみを味い続けることが出来ました。ただ時



乗りものに馬に勝るものなし

山本磐彦氏を訪ねて

緑鞍会の名簿をひもどくとまず目に飛び込んでくるのが山本さんの御名前です。学院創立九十周年に因み、馬術部創設以来の歴史を振り返ってみようとの企画が成つた時私達はまずこの方を尋ねてみることにしました。

六月も半ば過ぎ、太陽のまぶしく照りつける日の午後私達は山本さんにお会いしました。

西伊豆観光ビルの一隅に氏の事務所があります。狭い階段を右に折れ左に曲りしながら部屋に入る。氏はデスクに向つて書きものをされていたがすぐ立つて椅子を勧めてくれた。デスクの横には百寿の軸物「寿」の字を百通りに書いた珍らしいもの「が掛つていた。仕事は仲々忙しいらしく話

中によく電話のベルが鳴る。氏は明治四十五年に本学を卒業された。そして当馬術部の最先輩になつておられる。机の上の煙草をとり出して旨そうに吸いながら當時を回想して次のように話して下さった。

「そう、私はただ本場に馬が好きですね。もちろん当時は部というものはなく一人でよく横浜の小湊にあつた乗馬倶楽部で乗つたものですよ。戦時中は在郷軍人会横浜聯合分会長をやつてね。この時も馬上から指揮を取つたものですよ。」

氏の在学中には正式に馬術部は存在しなかったが



時代中尉軍陸



同好の士が集つて四、五人であちら、こちらと乗りに出かけたそうである。しんから馬術を愛好された氏はその後数人の協力者と共に小湊に昔の横浜乗馬倶楽部を設立されている。又軍馬を豊富に抱えていた当時の横浜の帝國在郷軍人聯合分会では二十騎もの馬を持ち八千余名の会員を統率した人であつてみれば、その力量のほど自ら推察されるものである。ところで緑鞍会に入られた動機は、と伺つてみた。

「あれは十年ぐらい前になるかな、君達も知つていると思うが、すぐそのサツポロピルに勤める伊藤「直明」君が突然尋ねて来て、OB会というのが出来たから是非入会してくれ」と言われてね、今更私だと辞退したのだがモトモト馬が好きなものだし、青山を出たからというので入会したわけですよ。」

こうして伊藤氏が山本氏の馬術愛好家振りを伝え聞かれてOB会発足の折りに部の歴史め先端を是非にと願われたわけである。

現在山本氏は増々御壮健で東海汽船会社顧問、西伊豆観光、武蔵野観光両社の社長、気儘旅行倶楽部その他数社の仕事に携つておられる。

七夕の日に生まれたことからその伝説の中の千引の磐、七夕め夜牽牛と織女が各々五百人づつ下の僕を従えて来て天の川にあるこの磐を取り除かせて再会する伝説に因んで磐彦と名付けられたという山本氏は、幼い頃よく父親から、将来千人を統率する男になれ。と言われたそうである。そして、「私は実際そうになりましたよ。」と心地良げに笑つておられた。

〔稲態武臣記〕

々、吾々を悩ました心配のたねは、中学部の連中でした。冒険好きの年頃の彼等のごとくから、こつそり単独で野外に出かけ、大怪我をして吾々を驚かしたものです。最早昔の話ですからすつぱぬいてもお怒りにはならないと思います。その勇士は森田崎夫君でした。このエピソードは今ままであまり知られていない筈です。森田君は他の連中をまいて、独りこつそりぬけ出して野外の固定障害の練習にでかけたのですが、運悪く固定障害の敷に落ちこんで大腿骨を折り、気絶一步手前の状態で、恐らく三時間前後の間助けの者がかけつけるまでがんばっていました。森田君の馬が乗り手をふり落して、ゆうゆう厩舎に帰つたため、兵隊さん等が驚いてかけつけたので命拾いをしたようなものの、兵隊さん等があきれた程の豪の者でした。さもありなん彼の年令は当時十七、八才の少年だったと思います。私は陸軍病院で手当てをうけた彼を都内の病院に移す役割を負わされたので一切の事情が判つたのですが、恐らく当時の部員の中でもこめ話しを知っている方はたんとはいないと思います。森田君、こんなところで引き合いにだしましたがあしからず。

なるのでした。それで馬に運動を与えるため軍隊から応援をたのまれるのでした。出来るだけ多くの馬に乗つてくれというのですから乗りたさ一心に部員一同勇んで出かけたものです。多い時は朝早くから一日に五、六頭位乗つたこともありましたが乗つたあとが大変でした。馬の全身にブラシをかけ、足にマツサージをほどこし、蹄の手入れなどよくたくたになつたものですが、誰一人文句も云わず、何日間もやり遂げて軍隊から感謝された時は、苦しい思いもすつとんだものです。こんな風にして厩舎に通っているうちには当然乗りこゝちの良い、いわゆるウマの合う馬を選ぶ結果になります。可愛がった馬が覚えていてくれて、歓迎の態度を示してくれると、ついなけなしの小使錢はたいて好物の人参を買つてしまうのです。野外で一休みしている時など、ポケットの人参を探る馬にズボンのハンドをくわえてつり上げられ、ひどくのめつたり、馬の頸つたまにかじりついたりしている人馬の友情あふれる光景は吾々だけが知る楽しみでした。

五年の頃だつたように記憶しております。今までの記事で想像がつくと思いますが、私らが始めました馬術部の活動ぶり、現在の緑技会の活動ぶりとは全く異つておりますが、馬を友として理解し合う愛情にはちつとも変りないと思います。現役の部員の方は、自分らの手で育てているので私らと比較して並み大抵の苦勞ではないと想像されます。部員がアルバイトまでして飼料を入手している話を耳にしますが、それだけに馬に対する愛情は深いものがあると思えます。鋭敏で利口な動物のことですからきつと皆さんの深い愛情を感じとつていことでしょう。

現在、私は乗馬をやめてもつぱらゴルフを楽しんでおりますが、私の所属している倶楽部は鷹之台カントリー倶楽部なので、そこに行く時には必ず津田沼市と習志野原を通過しますので其の都度昔の楽しかつた種々め思い出がよみがえつてくるのです。ですからゴルフに心をはづませながら、楽しい思い出を懐しむ二重の楽しみを味わっているようなものです。この倶楽部に入会したのも、昔のなつかしさに心引かれたからでしょう。最後に緑技会がますます発展されんことを希いながら筆をおきます。



〔大正十三年卒〕

稲毛屋の特徴
当店の靴は保存型付です
営業品目
・乗馬用長靴
・軽便保存型各種靴
・靴ヌギ器

創業50有余年
東京靴産業

稲毛屋



大正 14 年 12 月 習志野騎兵隊
前より 2 列目左側が内藤氏、3 列目左より山本、森政雄
右より 3 人目内田友正氏

今時の成年式と戦前の徴兵検査、男の子が満二十才で国民の三大義務の一つとして兵役に服するのであるが健康でさえあれば歩、騎、抱工、輜重の五兵種か或は海軍兵役に決定されるので、徴兵検査が男の子生涯の一段階と見なされて居た。私も青山の高等部本科二年の時に本籍地の都役所に呼出されての徴兵検査なるものを受けたのであるが、光栄にも甲種合格歩兵と云う印を捺され徴兵司令官の前に立たされた。当時は学校出などは珍しい時代だから、特に何か希望があるかと訊かれたので大抵の運動は行つたから、騎兵に入つて馬を習いたいと答えた。当時、青学野球部の捕手。特科隊は幸いが

覚悟は良いか、結構です。と滞なく済んで卒業の年に入隊と決定した。斯くして馬と私との因縁が始まったのである。大正十四年の春卒業はしたが騎兵の入隊は十二月一日である。十一月三十日に二年兵が除隊して半数の兵員で、中隊百二十頭の馬と全勤務を背負つて居る所に僅かに四名の志願兵が入営したのである。当初の一遍聞こそお客様の扱ひではあつたがそれからはイケません。飯番出るから始めて馬手入れ出る、ボ口棄て出ると矢継ぎ早やの古兵殿の命令。朝の点呼（夏は四時半、冬は五時）から消灯ラッパ迄休む暇もない。正月までは朝歯を磨いて飯を食つた事もなく僅かに馬手入れの蹄洗桶で顔を洗う位が精々であつた。一番恐しいのが馬にも乗れない新兵も二頭併馬で馬運動に引張り出される事で、運動不足で張切つて居る馬が広い習志野の原に出ると無間に跳上る。隊列を乱せは怒鳴られる。勿論危いので澄上げだからコロリと落馬する。しかし、死んでも水勒は離せないので埃まみれ、泥まみれ、全く親兄弟に見せられないし況やガールフレンドなどにはとても見られたくない姿であつた。一月五日の陸軍初めの観兵式には左肩に外套、右肩に水筒、弾薬食を付けて鉄砲をかつぎ、長靴をはいて長剣を釣つた馬に乗れない騎兵が徒歩分列式とは、世にも珍らしい出来事だつたと思う。一月十日新兵の入営。四十日の古兵の資格で命令する立場になつた。正月休暇に外泊許可が出て帰省した時、母

はヒビとアカギレで見えるも無惨な手を眺めて涙を浮かべていた。この頃から愈々本格的な教育計画に則つて、実科や科学に追立てられ乗馬演習、執銃教練、陣中勤務、夜間演習とよくマア斯様まで絞るものかなと思つばかり、今更徴兵検査の時に司令官が特科隊は辛いぞと云つた言葉が思い出されて、後悔の様な気持ちも無いでもない。丁度この頃の日曜日に青山学院の乗馬会が騎兵十三連隊に来た。特別外出許可で星一つ二名兵が白い手袋で行つてみると、同勢二十五名位、森政雄君が引卒だつたと記憶する。学生達は大尉の教官殿と気易く談笑するが、此方は神様の前に立つ様に終始不動の姿勢で應對の始末。先輩面をするには二ヶ月足らずの飯倉では事足りぬ。右に左に総て上官ばかりでは肩身が狭く、懐しい母校の消息など語り合う裕りもなかつた。しかしこれが青山学院が本格的に団体で乗馬会を催した最初の出来事であつた（写真参照）。桜の散る頃ともなると、演習も激しくなり怒も得もなく無念無想で反射運動の如く眠るのと食う事だけの毎日で全く色気もシヤバ気も解脱しての第一期検閲準備であつた。

兵隊には昼も夜もなく雨降りもお構いなし此方も相当無神経か不感症になつて来たが、首筋から背中を雨が流れて長靴にジャブジャブ水が溜るめは誠に気持ち悪いものだ。夕飯後の学科の恐しい睡鹿斗争は絶対の苦難である。五月雨ともなると寝道を通路に積上げて乾燥して

やる事も出来ず馬もさぞかし寝心地が悪
からう。馬具も武器も赤銅の様にサビが
付くから手は抜けない。之には外出止め
か鞍置場でめ往復ピンタが懸けられてい
る。三月に上等兵、五月に伍長と肩章が
変つて、左翼分隊長になると最早大丈夫
である。一週間に互る昼夜打通しの第一
期検閲。炎天の習志野、下志津の原を馳
駁して乗馬戦、徒歩戦、夜間の斥候動作
から払曉戦、内務や学科。日に焦けた顔
に目ばかり光つてイササか瘦せて来た様
だ。検閲の慰勞休暇に外泊が実施される。
私達はこの間に勤務実習で厩番、衝兵、
彈薬庫歩哨、舎内当番等々連続に行つて
漸く順番が来て帰省した。街を歩くと、
今度は金筋一本の威光で出遇わす兵隊の
半数位から敬礼を受ける身であつた。
外泊から帰営する兵隊が、何れも型通
りの中隊長や班長に申告が済むと、無意
識に厩舎の愛馬に土産を持って行くから
面白い。これが人情と云うものが愛情と
云うものか不思議な心理である。
柿の色付く頃ともなると一ヶ年め総決
算とも云うべき秋季演習で、二週間に互
る戦斗行動である。連隊を離れて文字
通り愛馬と寝食を共にして、暮早い晩秋
の空に露営め夢を結ぶ事既に数日。馬も
人も疲れ切つて挽馬行軍の雨め夜、霜の
朝の山越え迂回で払曉戦。延々何里の戦
線を、今日は筑波の頂きを東に見て明日
は西、利根川畔を駆けて夜明けには霞浦
に立つ。遭遇戦で終止符の演習終了ラッ
パが聞えた時は虚脱した様に畑地の中に

座り込んでしまつた。
百舌雀の聲が梢に高く鳴きわたつて山
里の秋深きを思わせた。怪我もせず病氣
もせずよくぞ働いて呉れたこの幾日、愛
馬を労わる気持ちひとしおであつた。
第二期検閲が済むと二年兵は十一月三
十日の除隊に浮き立つてそわそわして落
着かない。日頃意地の悪い奴でも、愛馬
に別れを惜しんでいる姿はしおらしい。
この日一日だけ軍曹の階級に進んで肩
章を付ける。営門に除隊兵を見送つて、
愈々古參兵の立場。
十二月の寒い頃青山学院から乗馬演習
合宿の申込みが来た。半数除隊の空き兵
舎の廊下に天幕を張つて防寒準備して、
十二、三名位を今度こそ一応先輩面をし
て受入れた。中隊長から火の元責任を負
つたので毎晩点呼後はそれとなく見廻り
に行つたが、学生であり乍ら起床、点呼
馬手入れ、食事、演習、外出、敬礼、夜
間の水飼与えまで動作総て軍隊の掟通り
規律正しく、お世話をした私も将校集合
所で面目を施したものであつた。
寒む空の一過間位を習志野に無事合宿
が終わつて、営門に見送つて別れを惜し
んだのであつた。之が恐らく学院馬術部
の合宿の最初であつたと思う。時に昭和
元年の事である。
丁度この時四ヶ月の見習士官勤務終了
と同時に米國に留学させられる事が決ま
つて、團長許可で髪を伸ばして居たが、
当時の兵隊で髪を分けていたのは秩父宮
と私位のものであつたと思う。

正月、この正月は勤務はなし外出は出
来る、夜兵官の寝台に歸つて眠ればよい
のだから、世に將校とは良い身分だと思
つた。除隊した兵隊が面会に来る。壊し
くて来るのでも辞儀に来るのでもない。
当方は付け足して、連中は厩舎に行くの
だ。矢張り起居を共にした馬が可愛いと
見える。
雪の三月十日払曉、非常呼集。陸軍記
念日だ。何かあると予期はしていたが四
個連隊合同の払曉戦さすがに勇壮果敢、
吹雪を突いて原野を馳駆する演習は思ひ
出であつた。
四月一日除隊。直属上官に申告「陸軍
見習士官、何々以下何名は四月一日付を
以つて除隊を命ぜられました。謹んで御
申告いたします」実に嬉しい調子である。
本心に夢に見た自由の響きである。今日
この年になつてもこの感懐に及ぶものは
二度とない悦びであつたと思う。
各兵舎を廻つて挨拶をする。別れをか
わすめであるが厩舎は辛い。愛馬の別れ、
浪花節調ではないが、頭をたゞき、頬を
抱いて、判つてか分らないの知らない
が此方の気持ちは涙がこみ上げて来る。
全く純真そのものゝ気持である。
もの云わぬ馬は可愛い。
〔大正十四年卒〕

キロット・乗馬服 ……

井 沢 商 店

千葉県 TEL (0474) 7・0250

黄金期

大正十三年 } 昭和六年

この時代は遊佐、今村、西各馬術界の大先輩が令名を欲しいままにした頃である。これに呼応して学生馬術も盛んな活動を行っていたらう。その中であつて、ひととき青山の馬術部はその存在をめでたせていたばかりか、学生馬術界に君臨していた。十名の関東学生馬術選手に三名もの先輩がぞくぞくと選手権を手にしたというのが、その何よりの証拠であらう。青木、緒方、内田の諸先輩である。頂点をもつて底辺を推し計り、その部の活躍の時を称して黄金期と名付ける次第。

大正末期のこと

古谷信治先生を訪ねて

古谷先輩が馬術を志したのは大正十一年。言うときと大学二年生の時であつた。当時の大学は予科一ヶ年、本科三ヶ年と。当時は正式のクラブにもなっていない。言う形式で古谷先輩が本科一年、今様に。ととて自馬はなく、馬場など勿論ないの

で代々木にある井上馬場で練習をしたそうである。馬の使用料は一時間一円、学生にしてみれば骨身にしみる額、そこで友と三〇分ずつ一円を折半して払い、それでも学校帰りに通つたそうである。

この時代女性は着物姿で、後にバイオリンなどを待たせた老僕を従えた美しい女学生が静々と現われたと思つた。さうする乗馬服に着換え、胸をときめかせたと云うことでした。蛇足ながら、当時と云つても女性の乗馬服姿は今と同じだつた。そんな美しい方やら、自馬を持つた方やらはテラスで椅子に腰かけ紅茶などを飲み、楽しそうに談笑し、一方先輩達学生は厩舎のそばの地面に腰を下して馬が空くのひたすら待つたとか、差別待遇を受け、楽しい乍らもさう云つた面白くない思い出もちらり。さうこうするうちに三年生となり、もつと練習を気兼ねなくしたいと云う欲が出て来た。当時の学内制服着用、校内禁煙と云う学生の風紀を守る先生の骨折りで正式の部に昇格し、古谷先輩が部長、先生が顧問と云う形で習志野にある騎兵の十三連隊に練習の許可が下賜された。そこで日曜毎に部員十四、五名で整列、足踏、軍隊よろしく敬礼をして練習をさせてもらったそうである。その練習が軍人に最も恐れられていたと云う特務隊長の時は、全く学生と云えども容赦なく反つて学生と云う知識階級に対する階層的偏見から底意地の悪い絞り方をされ、辛い思い出もしたそうである。

練習が終ると午前一頭、午後一頭と乗つた馬を一人二頭の割で手入れをし、その手入れも中隊長の監視のもとで何度もやり直しをさせられたと云う。云わば日曜日の馬の運動と手入れの為の人手であつたのだと遠くを見ておられた。

その頃から神宮大会と云う「今の国体の前身であるが」大会に馬術が加えられ、青山学院も出場した。又、後々に関西学院との対抗試合を行なつたりして盛んになつて行つたそうである。部内では運営費もかさむ様になり、資金集めに音楽会を開いたり、部員用のメダルを作り、二倍の値で部員に買わせたり、やはり項々と同様に資金には苦心したそうである。

先輩の最も思い出深い事は、丁度冬休みの頃連隊の人員の移動があり、その時は兵隊と同じ所に寄宿させてもらひ云わゆるメシ上げ、メシ下げなど軍人としての訓練を一緒に受けて合宿をし、その間に鉄砲を背負い演習に行つたこと、馬のたて髪につかまり馬と一緒に泳ぐ水馬、それから馬を歩かせに連れて行つてゐる時に当時の有名な「岡田よし子」と云う女優が馬に乗る所の撮影をしに来ていて馬から下りて手伝つた時の思い出、その時の写真が今でも残つてゐるという事でした。又、ある時は、部員が障り物を飛越して大外傷をし、馬にも怪我をさせた事があり、部長である古谷先輩が呼び出され、今後の馬の使用許可を取り消すとさえ言われ、平あやまりにあやまり、許してもらへたこともあつたとか、お話し

を伺っていると、今でこそ楽しそうに當時を回想しておられるけど、口には言い

今昔の感

私が馬術部に入ったのは大正十四年からもう四十年前と云うことになる。全く感無量の至り。

当時部長は四年の古谷信治さん、そして副部長格は三年の森政堆さんだった。それに同級生だがこの道では先輩の青木真次君、内田友正君。新入部員には藤紹敏雄君、伊藤政夫君、田代浩敏君、伊藤清行君等が居た。

最初の二、三回は代々木の原の井上乘馬クラブで手綱の持ち方、乗り方を習ってからは毎日曜日に習志野の騎兵第十四連隊に練習に行った。渋谷から市電で両国に行き、汽車で総武線を津田沼で降り、そこから歩いて連隊まで行ったのだから相当なもの……。文字通り星を頂いて家を出、月を背負って帰って来た。「いくら好きだからってこのドンシャ降りに東京から……。」とあきれられたも

尽せない苦勞をなさっているのだと、つくづく感じられ、感慨無量でした。

〔大正十五年卒〕

〔桜井富美〕

緒方一夫

のだった。でもその精励の甲斐あって技倆はメキメキ上達、昭和二、三年の二ヶ年間、関東学生馬術協会の選手〔当時十名〕の内、青学が三名占めると言う良き時代であった。

騎兵連隊の他に習志野の騎兵学校にも時々行き、当時の遊佐中佐、今村少佐、西中尉（ロスアンゼルス・オリンピック優勝のパロン・ニシ）等我が国馬術界の最高峰の方々に親しく接する機会を得た。尚この外にも当時の配属将校で部の顧問にお願した中村少佐のお力添えで陸軍士官学校や世田谷野砲第一連隊等でも練習する機会を考えられたが、やはりあの習志野の平原を襲歩でブツ飛ばした壮快味は忘れられない。卒業後はずっと関西の方に勤めていたので、その後の部事は余り知らなかったが、二、三年前東京に帰って来て、青木真次君が緑鞍会の会



長になって部の発展に大きく寄与して居られることを知りました。

部で馬匹を教頭持つて部員の方々がその世話をし乍ら、練習に励んで居られるとのこと。吾々の時は軍馬だから鞍は皆軍鞍で、実戦用だからその固いこと、重いこと……。それでせめて鞍は道遥鞍（今でもこう言うのかしら）に乗り度いと云う事で、やっと部費で二つ三つ揃えた様に記憶して居るが、これも今昔の感。兎に角素晴らしい発展でご同慶の至りです。一層の御発展、ご活躍を期待して居ります。

〔大正十五年卒〕

外国製品直輸入販売

★名国時計・貴金属
★諸・宝石・銀器類

清光堂

本店 東京都中央区銀座一丁目三番地（京橋際）
TEL (561) 2054・2087・6984
大手町支店 東京都千代田区大手町1の3（産経会館ビル1階）
TEL (231) 1711(直通)・(7171) (内線813)

素晴しき日々

内田友正

あの可愛い馬に初めて触ったのは、一九二二年青山学院中等部三年生の頃でした。学校の塚本先生を団長とする青山ボーイスカウトの行事で或る日曜日に習志野の騎兵隊に見学に行き、其処で初めて馬の背に乗せられたのです。

それからには月に二度三度と、中等部の有志数名と習志野に出掛け、一日に二頭の馬に乗り、又馬の手入れもずませて帰るのでした。十六才の少年にとつては、過激な運動だったのです。うか帰りの汽車の中で眠り込み、両国駅で駅員に超された事も度々でした。習志野通いが一年も経った時でしたか、当時高等部に内藤長一、井上恒春、森政雄等の諸兄により馬術部が誕生し、代々木の井上乘馬倶楽部で練習されて居られたのですが、貸馬では馬も良くないし、又一時間一円也の貸馬料も当時の学生にとつては大きな負担であつたのに比し中学部の私共は僅かな汽車賃だけで一日に軍馬二頭に乗り騎兵の老練軍曹が広々とした習志野で指導されるのですから高等部諸兄の垂涎的になつたのも当然で、遂に一九二四年に合同練習を申し込まれました。聯隊側も了承して呉れましたので、諸兄の涎も止まつた訳ですが、中学部々員の習志野で

の一年分の練習は十分充実したものでしたので、高等部諸兄をリードする程でした。夏休みには聯隊前の大久保館、松翠館に中高合同で合宿練習をし、起床ラツパと共に馬上の人となつたり、又兵隊さんと共に馬で一泊行軍をやつたり等忘れ得ぬ思い出があります。習志野の練習を二年も経た時は馬場馬術、野外椅乗、障碍飛越、水馬等、一通りの訓練を終えた時分でした。私も高等部の部員になつて居りました。当時馬術界に大きな存在でした関東馬術協会があり、毎年四月三日を期して陸軍士官学校々庭で関東学生乗馬大会が盛大に行われて居りました。又秋には大阪と京都でも乗馬大会があり、この三つの大会は日本馬術界の三大行事であり、関東対大阪及び関東対京都と双方より各十名づつの選手に依り障碍飛越の對抗試合を行つて居りました。この對抗試合に出場する十名の関東選手は、其の試合の都度、各大学専門学校から三名の選手を出場させ陸士の馬術教官が十名を厳選しました。私が高等部一年の時に初めてこの予選に出て卒業する一九三十年迄実に十数回の予選に一度も落選せず関東選手となり、後半は主将として騎乗し、各對抗試合では一回も負け

事なく「常勝の関東」の名を恣にして居りました。この関東選手は後年昭和十年頃から始まつたかと思ひます。かの全日本学生馬術選手権の前身にも値する權威ある存在でした。この関東選手に青木真次、緒方一夫の両氏も数回入選されましたので、其の時は十名の内三名が青山から選ばれ、当馬術部初期の輝かしい黄金特代はこの頃でした。又其の間口スアンゼルスで行われた第十回オリンピック大會馬術選手の民間人予選が騎兵学校であり、それにも出場させて貰いました。大変厳しい課程で連続障碍が二十位あり、中には一米五十位の三段飛び等もあつて苦しみましたが、幸い其の選に入りました。然し何と言つても最終予選は皆様も良く御存知の名選手、西竹一中佐（当時中尉）等騎兵将校連と共にしなければならぬので選に漏れたのは当然の事でしたが、この時が「吾が生涯の馬術最高の日」でした。卒業後は二回程OB競技に出場したきりで永い十余年に渡る馬との生活に終止符を打ちました。

今はもう還暦に近く、脾肉の歎に堪え返子にあつて、釣と狩猟を楽しんで居ります。

〔昭和四年卒〕

江戸自慢の味

後楽寿詞

（国電水道橋下車）

内熟期

昭和七年〜十五年

辛抱大切

伊藤直明氏を訪ねて

黄金期の後数年、低迷していた時期があったが、伊藤、東条中沢等諸先輩の熱意により部の陣容がしつかりと整えられた時である。というのは昭和八年から十四、五年にかけて部長、副部長、マネージャー、協会幹事、会計の各役割がガッチリと決められている。そして西中尉の活潑が学生馬術界にも刺激を与え、往年の黄金時代を再現すべく猛練習に明けくれる毎日を送ったらしい。この結果が細野、脇坂等諸先輩に至る迄の好成績をもたらす手となった。

特にこの期には、初のOB会が正式に結成されていることに注目したい。よって内熟期と名付ける次第。



私達はサツポロビールに約束の午前十時に伊藤直明大先輩を訪ねた。恰幅の良い先輩は、慣れぬインスタント記者がモタモタと主旨を話し終えると、スラスラと当時の事を楽しそうに話し出された。

「私達の練習は陸軍大学、士官学校、騎兵一聯隊で行い、それはすごい練習だったんですよ、何しろ初回からアプミ上げで乗った馬もどれもこれも癖のある馬ばかり、それを毎日毎日一時間以上も乗ったんだから、今の学生よりずっと上手になりましたよ。当時、馬は兵器として扱われ、兵器係の総長がいるいるコーチしてくれましてね、行くと「伊藤他何名参りました」と言っただけです。すると総長が乗り手の腕に応じた馬を出してくれるんです。私には『伊藤はこれに乗れ』と総長の新馬を貸してくれるんですけどね、その馬が亦癖があって、前に行けば嘔む、払う、後へ行けば蹴る。それでもやつとの思いで鞍に跨って馬場に出るとしゃがみ込んでしまうんです。それからお尻をポンとはね上げたりしてね。まあそんな馬でしたが除々に慣らして障碍を飛べる様になった時は嬉しかったですね。」

氏の時代の練習方法は新人生でも初めから鑑あげてビシビシと行つた。又兵器である馬も兵隊の数よりずっと多かったので運動させきれない馬が沢山あつた為に学生が乗る事に依つて運動になり、一石二鳥であつた訳である。又この時期には毎年二、三名の関東選手が出ていた。昭和九年、全日本学生馬術選手権大会、「中障碍」が習志野練兵所で行われた。尚、学習院には、三十頭もの馬がいた為氏は個人的に乗りに行つたりもしたそうである。ここで私達が何かエピソードがありますか、と尋ねると、

「戦争になつて歩兵になつた時に兵隊がズラリと並んでいる所で、「この中に乗馬が下士官よりうまい奴がいる。」と将校が言つんだな、くやしいものだから将校以上とは言わないんですよ。」と気持ち良さそうにワハハと体を揺つて笑われた。また何年頃かは忘れたそうであるが東京乗馬で現役対OB戦があり、最後の障碍に向つた時に馬場の状態が悪くて人馬転をしてしまい、下着までグツシヨリとなり冬の寒空にオーパー一枚で家に帰られたそうだ。

「それ以来、家内がみつともないからと

云うので馬には乗っていませんがね。今 思うとあの時はきつと反対手前で駆けて いた為だろうと思えますよ。久し振りで 乗ったものだから手前にまで気が廻らな かったんでしよう。」
最後に、最低千鞍は乗らなければ乗ったと言えない事、乗馬には辛抱が大切だと
言う事、生き物相手のスポーツである為

相手「馬」の気持も考えねばならないから、そう言う点では大変に有意義である事等を感じ深げに語られた。「泉・秋元」
〔大正十年卒〕



昭和 8 年 2 月 石田、山口、和久井 卒業記念真島図書館前

江浦 通郎 二	和久井重雄 四	故マナージャー	山口 利国 四	友清 中佐	部長	石田 英一 四	鎌田 和正 三	伊藤 直明 二	前列	東奈 宏美 二	鶴井 芳男 二	河島 一 一	故青木 美三 一	故川地 不明	不明	村山 美之 一	中列	神永 一	後列	左より
---------	---------	---------	---------	-------	----	---------	---------	---------	----	---------	---------	--------	----------	--------	----	---------	----	------	----	-----

O・B 会 発 足 す

東 條 宏 実

馬術部創立四十二年お目出とう！
四十二年と言えばそう永い年でもないが、然し我々現世人には大変永い大切な年月であります。その間青史に残る記事や、エピソードが沢山ある事と想われるが、生憎小生本来の無精からこれと言う記録もなく、OBの一人として相済まぬ次第です。
先日突然現役の方から此度馬術部四十二年史を発行する故小生に何か雑感なりと書く様お奨めを受け、些かとまどつている状況です。何から申し上げて宜敷いやら・・・。
私が馬術部に関係がありましたのは、昭和六年から昭和十年の四ケ年間であります。中学部から専門部に進学しまして野球部に入る心算りで居りました処、級友平生君（現協和銀行芝支店長）か、江浦君（故人となられました）が在校中馬術部幹事、主将）だったか、二、三の学友から「馬術部へ入るうじやないか」と奨められ、唯ズルズルと入部した訳です。入部して初めて、青山の馬術部が過去に放て、如何に盛大で立派であり、然も全日本馬術界に大いなる足跡を残して居る

由緒ある事を知り、びつくりしたと同時にこれはウカウカして居れぬ、諸先輩方々の苦勞、功績を後輩が受け継がねはならぬ、とおかしな話ですが、私なりに強く心に銘じたのがそもそも乗馬への病みつきになったと云う訳であります。
うる覚えで恐縮ですが、聞き及んでいる事で遊佐少将、今村中佐等に監督指導を受けた先輩の緒方、青木、内田諸氏等、日本学生選手権保持者が続々と表われ、大正末期から昭和初年迄の数年間、我国学生馬術界に君臨して居った時代もあつた。先づ馬術界で一番印象に残る事は、昭和七年ロスアンゼルスに於いて行われたオリンピックで大障礙飛越馬術大会に優勝した西大佐（当時中尉）の輝かしい勝利の感激です。
当時優秀馬の入手に苦勞していた遊佐少将初め関係者は歐洲大会で度々優秀な成績を挙げていた俊馬ウラヌヌ号を買取り西中尉の不断の調教宣しきを得てついにあの素晴らしい優勝となつた事です。
西中尉（太平洋戦争の際硫黄島で戦死す）の英姿が、当時吾々学生のシンボルであり、学生馬術界は勿論、日本馬術界に

如何に大きな素晴らしい影響を与えたかは想像に難くないだろう。

私が馬術部長に推薦されました時は、誠に残念乍ら、青山の馬術部は優秀な先輩が去った後で、丁度私が二年生の時で、些か馬術部の沈滞して居った時でした。オリンピックの優勝ではなく、往年の華やかな青学馬術部を如何にして再興しようかという事でした。

同僚の伊藤、鶴井、江浦君らと大いにハツスルのだが、悲しいかな微力での意の如くならなかった。

之はどうしても先輩方々の直接の指導を仰ねばと考え、OB倶楽部の設立に着手し、幸い下記の方々の絶大な力を得た事が、今もって大変良い事であったと自覚している。旧OB倶楽部を設立した当時のメンバーを思い起しますと、小池、古谷、青木、藤沼、伊藤、田代（敬称略）

諸先輩で、第一回の会合が銀座一千足星一で催されたかと記憶します。現役、OB共々私気茹々に松戸に或いは奥多摩に遠乗会を催したり、亦對抗戦を行ったり、懐しい記憶が甦って来ます。私の直ぐ後輩に河島、細野君等優秀な方々も多勢居られたが、中に悲しい事にも出会いました。後輩に竹内君（昭和十一年関東馬術大会で優勝す）、佐藤君等は無理な練習が原因で存学中途でたおれた事は、返す返すも残念な事であり、悲しみに耐えぬ事でありました。（昭和十年卒）

私の馬術部員生活の回想

河島 一

私が馬術部にいたのは昭和七・十一月三月卒業迄の四年間でした。其間の顧問は尾崎茂先生、金巻實治先生、転属将校は友清、本多、小塚の各当時から中佐であり練習場は諸先輩の開拓により余っていません。即ち、

騎兵第一連隊（世田ヶ谷区）冬休み、夏休み

野戦重砲兵第一連隊（国府台）土、日

夏休み

重兵第一大隊（目黒区）土、日

赤坂憲兵分隊（赤坂）週二回

陸軍士官学校（市ヶ谷）日

井上乘馬クラブ（代々木）随時

村上乗馬クラブ（駒馬）随時

其他、多磨川、御嶽山、戸越銀座等諸々にクラブがあり時折折行ったものでした。

騎兵第一連隊（騎一）の思い出

冬休みは元旦は勿論、早朝から夕方迄練習しました。馬は良い大学生に貸す方は手答えがある上に兵隊の交替期で運動不足で張り切っている。私や中沢正夫、故青木美之等がなんとかあばれないでくれと念じている新入生当時、石田英一さん（昭七部長、主将）は、自ら馬品の良

いかん馬に打跨がり、部員を整理させ「乗馬用意」といい、拍車でせめて馬の頭をチョンチョンと叩いて立上らせてから号令一下颯爽と先頭を行進するさまは心憎くも勇ましいなど感じたものでした。私共は四年を通じ第一中隊の馬を借りました。（借賃一鞍五銭）尚この中隊には今回の五輪総監督竹田恒憲元中尉が孫神という名馬を持たれ調教師を集めて説教しているのをよく見かけました。又馬術監督の旧姓藤野奉三氏も商大の学生で第二中隊で練習していました。

昭和十年の夏休みは騎一の近所に合宿しました（十五名位、当時の落馬罰金二十銭）

この中隊に、そる、蹴る、咬む、立つという癖馬がいました。乗りましたが馬品は良く反動殆んどなく良い馬でした。又湯梅という真に素早やく咬付く馬がいました。被害者は記憶のあることと存じます。

馬場の隣りに剣道場があり、我々が練習していると大声と同時に竹刀の音、踏み鳴す足音で、その都度、馬は二、三米

横飛びをします。振り向くと部員がコロコロ落ちて居る。スリル万点でした。

私の乗り納めは、この隊の南玉という馬でした。手綱を使わず脚と騎座であやつれ、営門前の数々の固定障碍をスイスイと越しました。全く素晴らしい馬でした。これで思い残すことなくして私は就職運動に専念しました。

この隊を含め私共の乗った馬は恐らく全部戦死した事と思うと哀れさが胸に迫ります。

昭和十年度競技会の思い出
全日本馬術競技大会（昭一〇・四・二一）

主催 習志野乗馬会 於谷津海岸
私は幸にして障碍競技で四等に入賞しました。四、五位決定戦で京大の岩坪君（卒業後も良く新聞で見かけました人）を破ったことが慰めでした。（前年は鶴井芳夫先輩優勝）

東北学生馬術連盟主催の馬術大会（昭一〇・夏）仙台宮城野練兵場へ五名（氏名後述）で遠征しましたが馬運悪く中沢、細野両名負傷しました。試合前日、青葉城のほとりの木陰で、そよ風に吹かれ乍ら沢山のカツコウ鳥の声をきき、草むらに長時間寝そべっていました。

第十三回関東乗馬大会（昭一〇・夏）
主催 関東学生乗馬協会 於戸山ヶ原

故竹内君が何かの競技で優勝カップをもつて来ました。其他の人で入賞した人もいました。

第十二回全国学生馬術大会（昭一〇・九・三〇）

主催 京都学生馬術連盟 於深草練兵
障碍に河島、中沢参加、入賞せず。

第五回関東学生馬術争覇戦（昭一〇・一〇・一二）

主催 朝日新聞社 於河田町馬場



昭和 10 年 12 月 関東学生馬術争覇戦(準々決勝まで)

細野日出臣	二
マナージャー	
中沢 正夫	
河島	一
清水 吾作	二
竹内 将晃	一

日頃練習しているのはこれに優勝した
いわけです。初戦に明治学院を破り、次
で東京齒科医専を一蹴、強豪高等獣医と
対戦しましたが負けました。選手は河島
一、中沢正夫、清水吾作、竹内晃、細野
日出臣の五名でした。
遠乗会の思出

昭和九年晩秋、関東学生乗馬協会の幹
事をしていた時、雨中を早朝から夜八時
半迄かかり市ヶ谷の陸軍士官学校から館
林茂林寺迄行きました。先発班で藤野氏
〔前記〕と一語でした。駆歩で行きます
と雨滴が頬を強く打ち黄色の開東平野を
行くのは実に爽快でした。

昭和十年二月卒業生送別会の思い出
この年は一度に次の四選手と文科の勉
強家の三山さんを送り出すこととなり私
共三年間良く面倒を見て下さった先輩

東條広実氏（昭八部長、強い意思で正
しいホーム、どんな馬も乗りこなす。
鞍上逆立ちが特技）

江浦通郎氏（昭八主将、美しいホーム
で闘志万点、馬の表情の真似をして
笑わす）

伊藤直明氏（昭九部長、円熟した何物
にも恐れないうで何時もニコニコさ
れていた）

鶴井芳夫氏 昭九主将、勇敢な騎乗振
りで試合に強い、卒業後も必ず試合
に応援に来て下さった方）

三山信治氏（文科の方で勉強でしぼら
れ運動は当時商科ということでした。
それでも合宿には来られた）

の方々に何とか芳に報いたいと考え、今
迄に例のない会にしようというので趣向
を凝らし青山の「いろは」で大いにハメ
を外しました。勿論大変な盛会でした。

青山学院馬術部OB倶楽部の思い出
私は戦災に遭い裸になりましたが数少
い疎開荷物の中に偶々OB倶楽部結成時

の名簿が入っていました。御役に立てば
と存じます。

OB 倶楽部は私が三年の時、昭和九年
五月一日、小池孝一大先輩（東京海上）
の非常な徹底力により、フランス料理店
マーブルで結成されました。この会は古
坂岩城先生を代表に載き、日本乗馬協会
に登録されており、練習場も騎一、輻重
一となっていました。その為会員資格は
厳選されていたようでした。

私共学生に対しても指導後援をしてい
ただきました。田代重之大先輩が日本乗
馬協会においてになりましたので其後の
貴重な資料を平田善行氏（昭七卒）が借
りて来られ、学生のため記録映画（ロス
アンゼルス、アムスタルダム等の五輪馬
術及ヨーロッパの国際試合等々の実写を
度々持参の上映写して下さいました。

三年生の時、輻重一の馬でOB、現投
で多摩川方面へ遠乗会があり、盛会でし
たが、小池孝一さんも十年振りでしたの
で、馬上で腹痛を起され、お顔をしかめ
鞍に這う様な恰好で駆歩をされていたの
を憶えています。然し、終了後道玄坂の
宴会場では見違えるお元気でありまし
た。

四年生の時、騎一へは伊藤政夫さん、
藤沼敏雄さん、石田英一さん等多数のOB
の方々が乗られ練習致しました。

今、OB 倶楽部の名簿を見ますと、卒業
年月や当時の住所、勤務先が訂正記入さ
れ染味もあります。これは我が馬術部が、
緒方さん、内田さん等関東学生代表選手



〔昭和十年卒〕

を輩出した部であると聞かえていま
したが発起当時の事がよくわかりませ
んでしたので記録にして置こうと思
い調査照会のため記入したものです
。

其時、森卓爾大先輩（其後昭和三十
一年に私は大阪で御拝顔の折御款待を
得ました）、森政雄大先輩（当時京阪
神急行御勤務）より長文の発起当時
の模様を載せました。之を引続きまし
たが恐らく戦争のため灰になった事
でしょう。私がOB会員になりましたか
ら、昭和十六年六月八日に当時の部
長、主将の脇板さんより遠乗会の御
招待を得、参加いたしました。御殿
場より相根長尾峠往復で総員二十
名位でしたがコースも良く一日を
楽しく過ごせていただき感謝して
おります。当時は農馬でこれだけ集
めることは非常に御苦労だったと思
います。部員の方々も既に戦時色も
濃い時代でしたので「質実剛健」の
気風が溢れているように感ぜられ
ました。

待望の関東制覇 関東学生大会に優勝

最近の我が馬術部の動静を御知らせ
致します。戦時体制下の秋／＼関東制
覇の野望を目指して練習を重ね乗
つた我が馬術部は天高く馬肥ゆる
秋に入ると共に深刺たる活気を呈
した年来の指針たる馬術本来の目
的達成のため練習第一主義を採り
来つた我が馬術部は其の効を奏し
て愈々関東に其の雄を現はすに到
つた。即ち第十五回関東学生馬術大
会は十一月十四日陸軍士官学校馬
場水野ヶ原に於て、竹田宮殿下初
台臨の下に挙行された。参加選手三
百七十余名、これが延人員は六百
余名と云ふ近來稀に見る大量出場
であり、これに優勝する事は相当の
技術、練習並に度胸とを必要とする
ものである。その上気遣はれた天候
も一夜明ければ此の大会を祝福す
るが如き秋晴れの乗馬日和。観覧
者も場内一杯軍団の調べ高らかに
大会の幕は切つて落された。我が
馬術部はこの大会に二名の新人選
手を送つた。一人は商科二年脇坂、
師範科二年水野の両君である。脇
坂君は学生新人對抗障碍飛越競技
に於て一流大学選手と良く善戦し
見事一等の栄冠をになひ水野君も
又好成績をあげ我が光輝ある馬術
部に更に万丈の気を吐いたのであ
つた。尚一昨年度に於ても猛練習
の為か故人となられた竹内君も此
の関東馬術大会に堂々優勝した事
は諸君も御承知の事と思ふ。故竹
内君も我が部の此の栄ある再優勝
を地下に於て喜んで下さるもの
と思ふ。我々部員一同感慨無量な
ものである。「中略」終りに一言し
たい事は戦時体制下、非常時下に
於けるスポーツとしての馬術であ
る。馬術そのも

国民皆乗馬

資料提供 昭和15年卒脇坂氏

のは壮快味に於て最も男性的にして
吾に若人の血を湧かし勇敏と沈思
の気象とを養ふ事は云う迄もない
。且又躍進日本の指導階級として
我々は北支に或は満蒙に活躍せね
ばならない事も亦云ふ迄もある
まい。そして我等には直接間接に
国防国策スポーツとしての馬術練
習の必要は誠に痛感せられるもの
がある。

〔校内新聞〕

馬に親しむ

紀元節の佳辰に、帝都で催された
愛馬行進は、愛馬宣伝に寄与する
ところ少くなかつた。馬に親しむ
といふことが、愛馬への第一歩
であり、馬事思想普及への第一歩
である。この意味から国民の多数
が馬に乗ることが馬に親しむ所
であり、馬事思想普及の捷径だ
と思ふ。

国民体位の低下が問題になって
いる今日先づ馬にも乗つて質実
剛健の氣を養ひ体位の向上を
図ることも一策ではあるまいか。

目下議會では軍馬資源保護法案
が審議せられ、馬政計画が従來
の輕種から重種へと改革の道を
辿り、各府県でも軍用候補馬
鍛練會が組織され、馬に關心が
払われている際、軍馬の資源
保護と同時に國民がもつと馬に
親しむことも考慮されねばなら
ぬ問題である。

平素馬に親しんでいることが一
朝有事の際、お役に立つことは
支那事變が証明している。國民
の總てが、水に親しむことと馬
に親しむことを忘れぬといふ
ことは広義国防の一部分とも
云へよう。

〔x x 新聞〕
〔昭和十三年〕

動乱期

昭和十六年～十九年

この期はそろそろ日本が軍国主義に化しつつあり、遂には戦争に突入し、教室から戦場に学生が送られ、数多くの先輩が失われたいまわしい時である。このような時期ではあったが、どの年代にも数少ない部員があつて、ガツチリと部を保持し存続されている。記録によると当時は鬼と呼ばれるキャプテンがいて強力に部員を統一していたらしい。戦後、部の再建に当つてこの期の先輩諸兄の助力は力あつて大きかつた。戦中時代ゆえ動乱期と称する次第。



学生と馬

青木昇

本年は青山学院創立九十周年の記念すべき年であり、又我々が青春の日々を謳歌出来た馬術部が誕生してから四十二年に当る。この間、馬術部の灯は、或いは燃え盛り、或は風前の命脈をやつと保つたこともあつた。然しその時代時代め学生が苦悩し努力して、今日を築き又四十二年の歴史の緯系となつてこられたことに敬意を払わねばならない。小生が馬と関係をもつたのは学院の中学部を昭和十三年に卒業し、高等商業学部に移してからである。事変に籍を者すという言葉を使つたのは、何となく中学部を卒業したら翌月から道路を隔てた向い側の高等部に移つていた為である。中学部の頃は、最初一二年頃、親父の影響を受けて剣道をやっていたが、棒振りがスランプに入つた頃兄貴がラクビーで国際試合等に出場、華々しく活躍していたので、大いにそれに刺激されて三年から中学卒業迄ラクビーに熱をあげた。今日でこそ十八貫近くの体重を、時にもて余すこともあるが、当時は針金かキリギリスの様な体の小生が試合に出た位だから、その頃の中学部のラクビー部は残念ながら常敗チームであつた。

高等部ではラクビー部々員としてメンバーの末尾に加えられ、一方馬術部に入部していた小生は丁度、蝙蝠の様な存在であつた。実は斯斯で私にはとてもラクビーは無理と思ひますので退部させて下さいなどと申し出れば、先輩から頭から雷を落されることは明白であり、困り果て当時の馬術部のキャプテンの小松さんに相談したところ、俺がラクビー部の了解を取つてやるから心配するな、という返事でほつとした。まる少なくとも一度や二度は鉄拳制裁を加えられるものと覚悟はしていたが、無事に入部のゴクゴクも片付き練習に入ることが出来た。当時の四年生は前述のキャプテン小松氏の外、伊藤直友（伊藤直明氏の弟で故人）、長野明、小川徳太郎、鶴井貞彦、佐伯信義、故人の諸氏で一年、即ち新入生は篠原和夫、羽坂勇司と小生であつた。今日の様に自馬はなく、平日は国電「玉川線」大橋から駒沢の練習場の片隅にあつた村上乗馬倶楽部（現清風会付上氏の兄経営）へ通つていた。又日曜は市ヶ谷の陸軍士官学校の馬を借りて練習に励んだ。最初はどんなにしぼられても、落馬しようともラクビーから比べれば、体力的に

はそれ程の苦痛はなかつた。夢中の期間を過ぎると、又々如何ともしようのない壁に突當つた。それはラグビーは体力が続けば後は意地と練習量で或程度なんともなるが、馬術は頑張り丈ではどうにも前進しないことが、おぼる気乍ら分つて来たことだ。馬という感情をもつた動物に乗っているのを亡却していた為である。

どんなに力んでも馬耳東風、馬の方ではそう新人に嘗められてたまるものかと押ししても、引いてもケロツとしたものだ。リンゴの気持ならぬ馬の状態を常に把握し、人と馬との約束を馬が衆知していることが前提である。即ち未調教の馬では間垣平九郎といえど歴史に残す様な妙技は不可能である。又人の方で馬との約束を破つては、馬の方で面食つて、馬鹿にしてしまう。思うに人と馬との約束は手綱捌きと騎坐、脚の操作以外にないと思う。拍車や鞭は刺激剤であるが、本質的なものではなからう。釈迦に説法はさておき、一年も夏休みとなり一角の馬乗り気分になつた小生は、軽井沢で不節制が祟り、盲腸炎で約十日間適当な病院もありません、サナトリウムに入院し、退院早々馬に乗りたくなり貸馬屋へ出掛けた。貸馬屋の親友が、「お客さんはこの馬がいいだろう。この馬なら一日でもじつとしていけるから」と頭から馬鹿にしたので「冗談じゃない。俺は馬術の選手だからなるべく癖のある馬にしてくれ」と大見得を切つてクラブ一の難馬で一週間も乗

り手がないという馬を借りてしまった。乗る時から、馬の方は大張切りで、しまつたと思つたが後の祭である。男として見得を切つた限り、もう馬を代えてもらふ訳にはゆかない。ままよとばかり乗るや否や馬め方は一週間分めスタミナを一時に吐き出した。避暑地の午後、外人、日本人が三々五々ゆつたりと散策を楽しんでいる中を、奔馬が疾風のように走つたからたまらない。お巡りさんは、前へ立つて止まれと怒鳴り立てるが、余りの凄まじさに脇へどき、小生は下手なところへ退院の翌日で騎坐も脚もあつたものはない。落馬しては馬に殺されると、馬にやつとしがみ付いていた。何分かの長い時間が過ぎ、我に返つた時、三四人の馬方にやつと止められていた。さんざん油を絞られ小さくなつて最初の意気は何処へやら、こそこそ立去つた。その晩、悪友達から全快祝とばかり酒を堆められ、あくる日から又床に臥し、若しあの時馬を止めて貰えなかつたならと思うとぞつとした。

二年になると新人は一級上り新たに、市場、中越の両君が入部し、脇坂氏がキヤブテンに就いた。今の部員諸君は、その様なことはないと思うが、当時は練習が終ると、一年生は挨拶だけの顔のまま、上級生の衣類にブラシを掛け、靴を磨きその後で自分の手入をした。他の人達も同じ様にしたのであるが、馬場君がウィットに富んだことを云い乍ら上級生

の靴磨きをしたのをほほ恵ましく思い出す。後に軍隊に入つて残念に思つたのは、金を払つて借りて乗っていた我々はクラブからみれば御得意様である。肝心の馬の手入は殆んどクラブ任せで、時折手入の手伝いをするに恐縮がられたものだ。士官学校の練習に行つても、馬丁さんが乗つた後の馬の手入は全部引受けてくれ、いい気になつて乗りつばなしていたが、やはり馬に乗る者は自分で馬の手入をしなければ馬の状態を把握することは不可能であるということだ。二年の時の思い出は夏の合宿である。小田急の松田の裁縫学校に合宿し、炎天下の練習を終つたところ、中越君の乗つた馬が、急に日射病で倒れ、一同頭を冷すやらテイヤワンヤの内に息を引き取つた。当分、中越君は馬殺と冷かされた。賠償金を取られるかとヒヤヒヤしたが、協同組合の馬だつたので助かつた。二年の頃から練習場によく渋谷の東横百貨店で、一同打揃つてビールを飲んだものだ。

昭和十三、四年頃の東横百貨店は国電の宮益坂寄りの小じんまりした面積で、お客の数も少なく比較的落付いた感じのデパートであつた様である。今日の雑踏から見ると雲泥の差である。馬術部員の数も少なく、良からぬ相談は直ちに意見の一致を見て怪気煽を上げていた。三年になると我々と同学年の風間梯次、中谷亮の両君が途中より加わり、又新たに福島保男、巻島利雄、阿部堆三、橋本文次、伊藤芳富、佐藤道夫、外川新一、飯島の

新人諸君が入部し急に部も活気付き、キヤブテンは脇坂達雄氏の後を松井英伸氏が縫いだ。当時の対抗戦は、関西学院、明治学院、東北学院との定期戦が主体であつた。二十数年前の事故記憶も詳ではないが、確か三年の時、関西遠征に出掛け、大阪駅前のステーションホテルに泊つた。名前は立派であるが、当時の大阪駅前たるや、一杯飲み屋や、バーとも喫茶店ともつかない店とか、一體飯屋の類が、ゴタゴタ立並び、その間にあつたホテルとは名ばかりの宿であつたと思う。悪童達は門限まで飲み屋で騒いでいた。明くれば試合当日、関西学院の馬術部の練習場たる阪神乗馬倶楽部へ着いて一同驚いたことは、馬の良いことと、馬房の立派さである。おそらく殆んどが自馬で調教も行届き相当な障害も自由にこなしていた。馬房はそんじよそこの人間様のアパートなど比較にならない位立派で採光は良く、清潔である。我々の練習場たるや、正式な馬場はなく、練兵場の借用でいわば広っぱである。馬は次から次への貸馬で、勿論調教など保てる筈もない。折角倶楽部の親父たる村上氏が調教しても、その後からこわされてしまふ様な状態であり、半ば諦められた馬でも表現しなければならぬだろう。馬房は付上氏の名誉の關係もあり、詳述しないが、悪臭に満ちていたこと又は事実であり、余りの相違に肘を突き合つて苦笑した。前夜の不節制といい、馬の条件といい、全く以て敗ける条件を整えてい



昭和 14 年卒業記念

左より 前野 長野 不明 小松 尾崎 金巻 伊藤 鶴中 小川 後列 石浜 千葉 松井 脇坂 井上 羽坂 青木 井上 篠原

たようだ。結果は書く迄もなく惨敗であった。馬の話より余談が多いが、その時、関西遠征の全員が某先輩に牡蠣舟に招ば

れ、一夕いい気になって御馳走になったことを思い出す。その頃は青木真次会長は応召で外地へ行って居られ、先輩に寄

附の御願などは故小池氏の元へよくお伺いした。或時、羽坂君と例め如く小池氏のところへ寄附の相談に行つた時、新橋のクリルで食事も御馳走になり、ビールを傾けながら、「君達は先輩のところへ行けば、金の相談は何とでもなると思つたら大間違いだよ。学校を出ても最初は安サラーだし、高くなる頃は妻子がいるし、君達が考える様な訳にはゆかないんだ」と話され、経済観念のない我々は、そんなものかなと拜聴した。今日になつて成る程と思つている。小池先輩からは、そう云われ乍らも良く寄附を戴いた。三年の時の冬休みには、大勢で鎌倉乗馬倶楽部に合宿した。倶楽部所属の某調教師が非常に口うるさく、うつ憤晴らしに毎夜の様に一同連れ立つて一合十八銭の酒を飲んで騒ぎ廻つた。平常、几帳面の固まりでマネージャーを努めていた伊藤芳富君だつたと思うが、酔つ払つて橋の上から飛込んでやるから見てると怒鳴るのを皆で押えて気嫌をとりながら連れ戻した。彼の様な温厚な紳士でさえ若き日の感激には勝ち難い時もあったのだから。四年になると新しく吉岡茂之、藤野浩一の両君が入部し、松井キャプテンの後を篠原和夫君が引受けた。

も致命的なことは、自馬を持つていないことであり、又決つた教師や、コーチャーが居なかつたことである。今日の様に自馬があれば、馬との接触は単に練習時間内丈でなく、手入れや飼付けを通して人と馬とのつながりが保て、馬の状態や癖なども知り得たのではなからうか。又決つたコーチャーが居なかつた為、三年間の経験しかない者が四年になると下級生に技術的指導をすることになるので些か無理な点があつた。それに比べ現在は経験豊富な、且つ、技術的水準の高い平木君がコーチの任に當つているので、その点幸である。馬術部の歴史を通じ我々の先輩にほ青木会長を初め数氏の関東選手を出し、又戦後も優秀な選手を生み出した中で、我々の時代は残念乍ら最底でほなかつたかと思ふ。

歴史の中の質の良い偉業であろう。この偉業を補う為にも今後一層輝かしい部員が続々と生れることを切に希望する。

（昭和十六年十二月卒）

まず初代「青峯号」の馬輸送から氏の話は始まつた。

八才とはかり思つて、鞍を含めて三万二千円で御殿場の長田家から買った初めての自馬である青峯号は、後になつて十三才であることがわかつた。その輸送たるや、誠に涙ぐましい努力がはらわれた。

我馬術部時代

羽坂 勇 司

私と同期は篠原和夫、青木昇、風間悌次、中谷享と私の五名であるが、青木會長代理が詳しいことは書かれる様であるので只思い出すままに述べてみたい。私が馬術部に入部したのは昭和十三年の四月であった。当時、日本は軍国主義に入りの時代であり、支那事変のため、又將來の対アメリカ戦争を予想し、非常時態勢をとり、三月に國家總動員法が成立した。学院においても、これ等国の方針には抗し切れず我々の入学した年から長髪禁止（即ち丸坊主）替りズボン禁止（即ち学生服ズボン以外は着られない）学生の

ダンスホール立入禁止等が発令され、我々を本当にガツカリさせたものである。当時の学生生活は最近の現役諸君には理解しにくい点多々あると思われるが、教練（軍隊の予備的訓練で他の授業はサボってもこれ丈は出席した。）でも短靴禁止（即ち編上靴をはかなければならぬ）になり、教練の時は馬術部の部室で通学靴を編上靴にかえたものである。学院は当時小学校が設立され、又専門部（後の大学）は一学年、商業部約百二十名文学部百名程度であった。現在の大木院長が我々高等商業学部四年間のクラス担



故伊藤直友氏
当時の練習スタイル
（夏・冬共である）

任であったのも印象的である。当時馬は街に始終見受けられ、軍隊の動力の主軸をなしており馬は兵器として、現在よりもっと巾をきかせていた。従って馬と軍隊とは密接な関係にあり、馬装をしていると女め子にモテた時代であった。馬に不自由をしないので当時自馬を持つていた大学は少なく、私の記憶では慶応が五頭位持つていたのみでほないかと思う。その様な背景で馬術部に入部をした我々は、練習は駒沢練兵場にあった村上乗馬及び陸軍士官学校であった。貸馬科一時間五十銭、コーヒー一杯十銭、都電七銭の時代である。定期戦は対関西学院、対明治学院、対東北学院、合宿は鎌倉、御殿場であった。一年の時（昭和十三年）の思い出。キャプテン小松秀、部長金巻教授、マネージャー伊藤直友、協会幹事小川徳太郎。小松キャプテンは一番恐かった。伊藤マネージャーと小川幹事は仲が良く大アブ、小アブのアダ名があった。開学戦のため遠征。社会は「妻と兵隊」発刊、ヒットラー コーゲント来日。二年の時（昭和十四年）の思い出。キャプテン脇坂達雄、部長尾崎茂教授（現第二学部長）、マネージャー松井英伸。やはり脇坂キャプテンもこわかった。四年生が一名であったので大変であったろう。よき先輩である。双葉山六九連勝敗。三ノモハン事件、ドイツ英仏戦宣告。三年の時（昭和十五年）の思い出。部長、尾崎茂教授、キャプテン松井英伸、昨年までおとなしかった松井キャプテンが鬼

キャプテンと云われる程恐くなった。そして本当によくシボツた。いい先輩だ。それ迄三名位の入部者であったのに巻島氏以下十名近く入部したのが印象的。紀元二六〇〇年「パーマネットはやめましよう」運動で巡査が街の女性に注意ました。米、砂糖、マツチまで切符制、九月に日本軍印（今のベトナム等）に進駐独軍バリ入城、ダンスホール廃止、日独伊三国協定成立、関西遠征。四年の時（昭和十六年）の思い出。部長中村金勝先生、キャプテン篠原和夫、マネージャー、キャプテン篠原和夫、青木昇。大過なく過しました。学院の外人宣教師婦国命令が出た。学生はゲートルを巻き、敬礼の実施、独ソ開戦、東条内閣成立、回覧板、バケツリレーの訓練、終に大学専門学校の明年三月卒業を本年十二月にくり上げる第一回のくり上げ卒業となった。卒業式験の真最中、昭和十六年十二月八日対英米宣戦が布告され、我々卒業生ほとんど全員軍隊に入隊させられたのである。軍隊では私が兵隊で、同級生の篠原和夫は将校で、内地及びスマトラで偶然何回か会い随分世話になったのも一つの思い出である。とに角、学生中、馬術部で良き先輩及び後輩の方々と生活したことは、非常によかったと思つてゐる。社会に出ても、馬術部の生活を通じて、私の人生に大いなるプラスを与えてくれたことを今だに感謝している。今後も部の発展のために縁故会と現役が一つになつて邁進しようではないか。特に学生時代

御世話になつた先輩及物故された方々に
感謝しつつ。
〔昭和十六年十二月卒〕



昭和 15.y

千葉 羽坂 馬場 松井 後列 加藤 中越 井上 篠原 青木 中列 不明 佐伯 脇坂 前列 左より

激渦の中で

阿部先輩を訪ねて

この頃は第二次大戦のため昭和十八年九月高商部三年で繰り上げ卒業したそうだ。戦時中で軍国主義のため軍隊の力を貸り、国家が馬術、射撃等は国防的なものと見做し援助してくれたので学生には師官学校の良い馬を貸してくれたその点では馬術都としては恵まれていたそうだ。そして配属将校が中学以上各校に来て訓練したので大いに練習になったそう。

阿部先輩め代は非常に熱心で一年から卒業まで同期生九人は変らなかつたそうだ。部員は二十名というからその半分はこの代が占めている事になる。(当時男子部員だけで現在のように女子部員が沢山いるのが羨しいそうだ。)主将として巻島先輩(富士銀行)、阿部先輩が副主将を務めていた。

練習は駒沢練兵所(池泥)大橋そば)村上乘馬で一週二回放課後に行い、この練習は、円陣をつくり外側に上級生、内側に下級生が入り、十五〜三十分間全員が大勤でみっちりやつたそうだ。又、障碍の時は馬がやせているため特別料金を収めたそう。(今の清風会はこの村上乘馬から独立。)しかし村上乘馬は高かったので軍隊、馬事公苑、他の乗馬クラブ

ブをフルに活用した。又井上乘馬にも定期的に通つたそうだ。何処も学役には近かつたので、馬装で構内を測歩したそうだ。

前記した様、当時我馬術部は黄金時代だという。東北・明治三学院定期戦、開学との試合。トーナメント(この頃、馬事公苑、師官学校のどちらかで開催)にも参加した。(しかし後でこの試合成績を聞き忘れたのに気がついた。)合宿は一週間から十日、冬、春、夏の休暇を利用し、主に鎌倉材木座の湖南乗馬クラブで行い、部員の知人を訪ねまわつたそうだ。そして現在同様な一、二回御殿場まで遠乗りをしたという。

予算としては体育会より補助金をもらい、その体育会の中で中位を保つていた。当時は自馬を持つている学校は大学だけで、明治、成城(関東選手に必ず一、二名出た)早稲田、慶応、法政が強く専門学校では学習院(自馬あり)が強豪で、その試合はすべて障碍だったそうだ。我校では巻島先輩だけが目黒の東京馬術研究所で練習をしていて馬場が御出来になつたそうだ。そして巻島、阿部両先輩が関東選手予選に出場したが落ちてしま



昭和16年送別会
左より

- 橋本 巻島 伊藤 中越 伊藤 猪原 不明 不明 風間 馬場 後列 青木 真次 小池 飯島 不明 中列 脇坂 千葉 松井 井上 中谷 阿部 前列

ったそうだ。

試合、合宿の思い出として昭和十八年四月トーナメントが馬車公苑で開催中、初めての東京大空襲がありその中で試合を続行し、これが生湮忘れられない思い出となった。又鎌倉での合宿中、部員同士でお酒を飲みに行き水口酔気分で帰って来たところを先生にみつかり、翌朝早く二日酔いの状態で起こされ鐘上げをシボラレ全員歯をくいしばって我慢したそうだ。

当時の先輩として阿部先輩の三年上に松井先輩（現三菱商事）が主将で、二年上に青木昇、羽坂、篠原先輩がいらつしやうた。又昭和十九、二十年の部員は競争のため消息不明であるそうだ。

最後に現役に対してやはり学生時代運動をする事は有意義でありし、現在、自馬と馬場があるという恵まれた条件であるから努力してトーナメント、関東選手権大会には頭張って欲しいとのことでした。

このインタビューをして、戦争中でもわずかな人数でも如何なる苦境にも耐えての青山学院馬術部、守り通して下さったということで先輩に感謝の気持ちで一ぱいになりました。（本所弘子）

（昭和十八年卒）

おしやれの店

heath



自由ヶ丘 TEL (717) 7098

ジンタから始まって

池谷三郎

一、サーカスの馬に魅せられた私

天然の美という音楽「御存知?そう

あの四分の三拍子。明治大正生れの人にとつて、あの物悲しいメロディーはジンタの代表的音楽として、遠い昔の甘酸っぱい思い出につながる筈です。そして、そのジンタにつながるのがサーカス。それも最近の様にポリシヨイとかスペインとかのデラックスなものではなく、街はずれの原っぱにかかると小さな小さな、曲馬団と称するやつ。夜ともなれば素通しの裸電球が天幕の前に三つ四つ、風に揺れ呼び込みのオジサンが塩から声を張り上げている。そばに猿が二、三匹寒そうに身を縮めてうすくまり、その隣りに艶の悪い馬が、潤んだ様な悲しい目をしばたきながら、立っている。如何にも佻しい風景。しかし子供達にとつてはお伽の国の夢の国のような感じなんです。手がかじかもうが、水っぱなが垂れようが、晩御飯だから早く帰って来いと云われ様が全て上の空。只々ジンタの調べに酔い、糞と動物の臭いの中で馬を見つめ、猿を見つめて立ち尽す。そんな子供達の中の一人が、私なんです。私が馬の魅力にとりつかれたのは、そんな時からです。

一、生まれて初めて馬に乗った私。小学

校一年生の時、近所の叔父さんに連れられて豊島園へ行きました。ウオーターシユート、電気自動車、ボートと回つて、小さな馬場の前に出た時、私は動かなくなりました。驢馬が一頭と素敵に立派な当時の私にはそう見えたんです。栗毛の馬が一頭、子供を乗せてトコトコ馬場を歩いていきます。勿論、乗りました。係のオジサンに抱えられて鞍の上に乗った時の私は、興奮の極みにあつたと言つても過言ではないでしょう。足の脛脛に当る馬腹の温さ、目のすぐ前にあるたて髪、よく動く竹を切った様な耳、快良く伝わるバカツバカツと云う蹄の音、まさに夢見心地とは、あの事を云うのでしよう。後年、初めて女性とデートした時よりも幸せな気持ちでしたネ。(ホント)手綱をとつて胸を反せ真赤な顔で力んでる子供の姿、判るでしょう?馬場二週りで十銭。「もう一度もう一度」でとうとう連れて来てくれた叔父さんに一円五十銭の散財をさせてしまいました。さて、それからと云うものは豊島園へ行けば、ウオーターシユートも電気自動車も全く眼中になく、専ら馬場で時を過す様にな

り、係りのオジサンともスツカリ仲良くなつて、馬房に入つて掃除を手伝つたり、飼付けをやつたり・…という始末で、豊島園へ遊びに行くと馬臭くなつて帰るので、母に「臭い臭い」といやがられたものです。

一、馬術部と私。昭和十七年三月。青山

学院文学部英文科の入試合格発表の日、母と一緒に掲示被の前に立ちました。自分の番号を確認するとすぐに飛んで行ったのが、馬術部の新入部員募集の所で入学手続きの方は母にまかせつきり。云うなれば青山学院文学部入学と云うよりは、青山学院馬術部入学と云つた型。さて四月になつて初めて部室に入つた時。先ずビックリしたのは内部の汚い事と小さい事。尤も、今でも綱島の部室は汚いですが。(アレもう少し何とか、衛生的になりませんか?)当時は白馬なんてぜい沢なものはないので、駒場の乗馬クラブに一週二回通つたものです。それも馬の数が少ないので、一回の練習に十五分位しか乗れません。仕方がないので、一ヶ月の小遣を全部注ぎ込んで、個人的に一時間くらいで、乗馬クラブに乗りに行きました。その他隔週位に、朝霞の陸軍士官学校とか戸山ヶ原の騎兵学校の軍隊練習に参加しました。この軍隊練習では随分絞られました。楽しかったですネ。時には朝霞から井の頭まで中尉殿に引卒されて、颯爽と遠乗りなんて事もありました。しかし馬の手入れは大変だつ

優秀技術の店

★ドライクリーニング・洋服染



サクラ商会

都電青山六丁目電停前
青山学院記念会館前
TEL (401) 6958

たですな。一人で五頭位受持ち、意地悪上等兵にガミガミ云われ乍らやるんです。がイロイロ癖のある馬が居ましてネ。近づくと耳をピタッと後にねかせて、目を怒らせ、顔を斜めにして口を開けてくる咬癖馬（こういうのは、たて髪に赤い小布が付いてありました）。一、二度肩や腕を咬まれました。冬だと大した事はないけど、夏は練習着だけなので、血が滲んだり内出血して腫れてしまいます。それから常に尻を向けていて、時々振向いてにらむ蹴癖馬（これは尻尾の先に小布がついています）蹴癖馬の馬房に入る時はいくら馬が好きでも一寸コワイですネ。「オーラ、オーラ」と猫無声き出し乍ら横木をくぐり、尻に手を置く。という簡単な様ですが、この尻に手を置くまでがスリルそのもの。壊しくも又恐ろしき思い出です。

なつて埃の中に坐り込んでしまい怒鳴られる。毎度毎度の事で御座んした。一番ひどかったのは夏季合宿で、宮城県一の牧場に行った時、新馬調教をやらされ厭がる奴に三十分位かかって鞍をつけ、それから十分位かかって、やっと乗馬。途端に馬はロデオの様に躍り出す。それをおさえ宥めて、どうにか輪乗りに入れてホツト一息。さわやかな谷間の風がサーッと馬のたて髪を流した。次の瞬間目の前の桜の小枝が大きく終れた。これがイケナカッタ。馬は完全に狂乱状態になって馬場の柵に向つて突進。（ピツッカケラレタンデスネ）というより柵がワァーソと目の前に迫つた。それから天と地と線がクルクルとまわつた。ハイソレマデヨ。気がついたら草の上に長々とのびている私の顔を大勢で覗きこんでガヤガヤ。処が悲しい事にこの人達の顔は判るんだけど、名前がどうしても思い出せないんです。あたりを見廻しても何か他所の景色を見ている感じ。ソーツと身を起すと右後頭部と肩のあたりがズソキーン。「コリヤイカン、俺は記憶喪失症になつた。



「あわてて井戸端へ連れて行って貰い、頭にジャージャー。冷い井戸水に打たれ乍ら口の中でドイツ語のアルファベットを一生懸命咬いてみる。ところが駄目なんです。Sから始まって位まではどうにか云えても先がどうしても出て来ない。又Sに戻る。・・・」
 P.P.Sで止る。又戻る。「アーとうとう俺は馬鹿になっちゃつた。」悲しい気持でした。馬から落ちて馬鹿になる……
 洒落にもならない話ですヨ。しかし二晩程、軽い熱が出ただけで、医者にもかからず、記憶喪失症にもならず合宿後半を無事に過ぎ事が出来ました。
 メデタシ、メデタシ。
 （昭和十九年卒）

★浴室・台所・洗面所・取壊工事

東京都指定水道工事店・東京ガスサービスステーション
 全日本事業生活協同組合指定・宮内庁御用達

窪寺風呂工業株式会社

中野区新井町1-14
 TEL (386) 1284-5

復興期

昭和二十一年～二十五年

日本敗戦により全国民虚脱状態、そして腹ペコの頃である。

このような時に復員学生が集って部を復興しようと志したのであるからその意気まさに天をつくものあり賞賛に値しよう。脈々と流れる馬術部の精神はこの期に真価を発揮したと言うべきか。すでに軍隊はなく、部を支えるバックはない。自力で馬を見つけ、買い、育て、調教して……という新しい学生馬術の苦難の道への第一歩がこの期に踏み出される「飢えた子供のように馬を求めて歩きまわるところから戦後の部復興が初められたのである。



焼け跡の中から

柿原政吉

私達の馬術部史は昭和二十一年に始まる。戦後間もなく焼け残った学院の中に軍関係諸学校の出身者や、軍隊からの復員者数人を中心として、馬術部を設立しようではないかとの声がさかんとした。当時は全く食に事欠く時代であり、学院には何の施設もなく、先輩と連絡し得る手段とてなく、部活動の行われる環境ではなかったが、少なくとも何等かの馬に關係を持ったグループであったためか、よくも曲りなりに何年かを過ごしたものと感慨無量である。そうした環境に生まれ育った部時代であるから、当時の記録らしいものは、個人の残している写真を除いて何も残されておらぬので、昭和二十九年八月八日、当時のメンバーが寄り集まり、記憶をたどって当時の模様をまとめることとした。前にも述べたとおり、終戦直後の焼野原となった東京では、何としても人間の食量が大問題の時代で服装どころの騒ぎではなかったが、幸い部の構成員がほとんど馬装を持っていたので恰好はついた様であった。ところが練習馬には全くの苦勞の連続であった。

二十一年いち早く当時の関東学生馬術連



盟に加入手続をとり、練習場の斡旋を計つてもらったが、それとて今の馬事公苑に月一〜二回の練習日を与えてもらえる程度で、練習に行っても当時の馬丁さんが威張っており、練習時間より使投となる時間が多くなる様な状態であったと思う。こんな事ではどうにもならぬので、当時協会幹事の賀川君に努力を願い、塩を種に東京乗馬倶楽部に連絡し、主練習場とすることに成功した。当時のクラブにはオリンピックク、ロサンゼルス大会に活躍された亡き山本大尉が居られて、い



金井泉 四人目 後列 黒川 金井 甘粕 柿原 賀川 武田 不明 中列 宮坂 森健 不明 不明 左より 前列

いろいろと指導されていたが、何としても馬匹に与える馬糧不足のため、練習時間や練習科目が制限され、障害飛越の練習等ほ殆んど禁止される状態であった。

自分等の食糧も事実不自由な時代であったが、一応張り切つてクラブに出掛けると、厩舎では馬が殆んど休養状態、中にはハンモックにつられて絶対安静等もあり、練習せずに馬の看護をする有様であったが、さすがに馬手公苑の馬は当時、米軍の関係で食糧は賄われていたためか、人間よりも艶が良かった様であった。

従即、我々としては、馬を貸してもらえぬ所があればまるで水に飢えた子供の様、あちこちと練習に歩き廻つたことが憶い出される。

それと共に学院の体育会として承認をうけ、島居哲先生に部長就任をお願いすることゝなつた。当時そうした環境から体育会の方からの予算も極めて少なく、皆手弁当で動き廻つたものである。馬術部バツチもその当時作成したが、現在のものとは別個である。

（昭和二十三年卒）

- ・創立大正元年
- ・乗馬戦の御用命は伝統ある技術の習志野稲毛屋へ

習志野

INAGEYA

稲毛屋

東京都渋谷区穂田2-63
TEL (402) 0307

再編成期

昭和二十五年～昭和三十年

馬を求めてさまよい歩かなくてもよい程に時代がおちつきはじめたのは、この頃である。しかし戦前と戦後の間の大きな断絶は部にとっても一切を新機まき直しにさせた。見よう見まねでそのスタートがなされたと言えよう。しかしながらそのミソをうすめるべく戦前の皇諸兄との間に橋をかける努力がなされている。特にこの時期に注目すべきことは初めて自馬が買ってもらわれたことであろう。自馬所有まではよいがその飼育のための金銭的苦労というものがこの時から当分続くのである。

再編成の記

植松英 二一

我馬術部が敗戦の傷手から立ち直り復興がなされたのは昭和二十二年と聞く。柿原、賀川の先輩が復学され部の再建に力を尽されたが、部員の卒業と同時に自

然消滅と言う形になったらしい。この後を受けたのが私と言うことになるのか。昭和二十五年、同僚の清水幸雄君（現清水書院取締役）と相談して「馬術部再建

する同好の士よ・来れ！」の広告を出し、集まった者四、五名で同好会を結成出来たのは、同年の六月であった。

顧問に鳥居哲教授をいただき、予算は二万五千円でスタートした。集まった連中は皆、生れて初めて馬の背にまたがる者ばかりで、馬も知らなければ、術もさらさら覚えなしという状態で、大拳して東京代々木乗馬倶楽部に押しかけた。それでも遂には御殿場に遠乗りし、富士山麓を自由に疾走するまでに上達した。これが長田さんと出会った初めである。当時の部員は数多くいたが、出たり入ったりで、沈君を除いては残っている者は誰もいない。この年の十一月、かつて馬術部で活躍されたという一人のOBに紹介された。細野さんである。細野さんからよき時代の、良き部生活の御話を伺い、又数多くのOBがおられるのを知り、目を丸くしたり細くしたりで、早速御紹介を受けて、その一人一人を訪ね歩き、部復活の援助を乞うて廻った。OB巡礼の初まりである。越えて昭和二十六年高等部から中島、宮坂、森等を迎え入れ、部員数十名となり、ようやく運動部として認められ予算三万七千円を得、顧問に鳥居教授、部長に植松と陣容を少しばかり整えた。しかし依然として借用馬で代々木倶楽部に練習に行くたびに、他大学の自馬訓練を見て、羨ましくてたまらず、皆脾肉の嘆をかこっていた。同年六月、我等も一丁自馬を持つてはいないかとの声が起こり、遂に長田さんの手を経て新馬を

購入するに至った。彼の有名な「青峰号」である。値段は四万一千円、酷暑の中を森・宮坂が御殿場から歩いて運搬、八月十八日代々木倶楽部の馬房の一隅に無事おさまった時の感激、今でも思うと胸が熱くなる。馬匹購入のためOBに奉賀帳を回し寄附頂いたものが二万五千円、部員が出し合ったお金も僅か、購入金の未払い多く、その上飼育費が予想以上にかかると言うわけで、「当時は月七千円位かと思う。」部員の親の財布の金が頻々と盗まれたのはこの時代特に多い。特にピンチはこの年の暮れであった。借金返済の期日もとうに過ぎ、折角頂いた援助金も馬料に食われ、予定した金も入らず、長田さんからは、矢のような催促の手紙はくるので、遂には差押えということまで来てしまった。すんでのところ自馬を手離すところまでいったが、十二月に借金で借金を清算して助かった。その時沈・米谷・小池の各君から個人的融資を受けたのだが、これを返済しているかどうか「未だ返しでないのなら三君よ！アキラメてくれ。」しかし一方案しきもあつた。自馬所有の故に東都大学馬術連盟に加入を許され、自馬にまたがつて出場した時め気分は格別であった。沈、植松、中島、堀内、森、宮坂、藤根東、米谷が初出場、晴れて八校中七位の成績であった。第一回のOB、現役の懇親会が同年十月明治製菓の二階で開催され、大いに激励されて無暗に感激したこともあつたし、代々木倶楽部でOBとの

競技会を行い、十数年も馬に乗っていない先輩に敗けて、「お前達はなんだ」とハツバをかけられ、「なる程ウメーものだ」と感嘆の声を放ったこともあった。

又馬車二台を幌馬車に見立て、馬を七騎に分乗して西部劇よろしく・山中湖まで遠乗り、湖畔にキャンプ・ファイヤーを囲み、馬車の下にもぐり込んで一泊したことも、愉快な思い出の一つである。

この外に馬事公苑に於けるトーナメントで緒戦に敗れ、体育館での一週間にわたる合宿訓練め功なかつたことを嘆き悲しんだこともあった。あれやこれやの泣き笑いの一年も自馬と共に過ぎたが、資金の絶対額不足は年を越しても変らなかつた。馬房借用代一千元が支払えず、止むなく代々木倶楽部をおん出で、強引に学校構内にバラックを建て、学校当局の反対にも係らず居座つたことも記憶に新しい。

昭和二十七年四月、年度が変わり、顧問に土用教授をいただき、部長に沈、主将に堀内、会計に小池の陣容でスタート。部予算は三万七千円であった。

この頃から女子学生が入部し始めるようになり男共を喜ばせた。平木、按之、



伊藤、三枝、海津、河野、飯塚の諸嬢である。よほど嬉しかったとみえて今でも全員の名前を憶えている。

この年は多士済々で活動も多彩であった。新部長も積極的に働き、「青兎」

「青兎」の新馬を十万円で購入している。こめ際特筆すべきことは、沈君が親から七万円を借りて馬代に当てていることである。そして

その七万円は未だ彼に借金しているが、沈君はその返済を請求してはいないということである。

その後の部の歴史については詳しく知らない。これまでの部復興のいきさつを記したが、始めから順調に発展して来たことは喜ばしい。しかしこの背後に多くの輩の好意と援助があつたことを忘れてはなるまい。

OB会が組織され、緑鞍会と名を変え、蔭に陽に現役部活動に大いなる援助が与えられて来たことを。

（昭和二十八年卒）

女子部員の功罪

沈 廻 浜

馬術部創立四十二週年を記念して、ここに「いなゝき」の特集号が出されることになったが、考えてみれば実に歴史の古い部であるが今更ながらに感激の気持ちを味わっている。

小生が青山の大学に入った頃は丁度終戦の為に部が解散し、何もなかつた時代であつた。

小さな頃からあの長い顔になんとなく親しみをもち、色々の処で乗っていたので、他の大学に馬術部があるのに青山には馬術部がないのが少々残念に思えた。そうかといって自分から言い出す程の勇氣はなかつた。

そのうちにいつしか部復活の気運がたかまり、同好者の遠乗会を開いたりして馬術部が出来たのが大学三年の時である。

植松君が発起人となり、古い記録を引っぱり出して先輩方の名簿を作成したり学校当局にかけあつたりと、全く無より有を生じる様な努力で今日の部を作りあげ、且、今日の如き発展をみるに至つたのであるから、植松君のこの努力にほ敬服の他はない。

大学四年になり一応部の責任者にまつりあげられたが、その当時の馬術部はど

今日め様な優雅な女性部員の姿などは各学校ともになかつた。今でこそ言うが、その当時の部はいわゆる金欠病の最たるもので部員の数が増えなくてはやつて行くのが困難な状態になつて来た。

校内め学生の数からみて女性の多いのに気がつき、この馬術部に女性を入れたらどうかと考えた。女性ならば馬を酷使はしないだろうし今迄以上の負担は馬には余りないだろうと考えたわけである。

早速幹部会にはかつた処、異見百出、とても治まりそうにもない。それではと最後の切札として経済的な面を持ち出した処、まあしぶしぶ賛成という事になりここに女子部員の誕生という新馬術部が出来たが、その後はこの女子部が関東の雄「いや雌かな！」として名をあげたのだから皮肉なものだと思つている。

さてこれにより女子部員募集のポスターを出したところ、ものめづらしさから十数名の女性の入部があつた。

入部金は入る、部費も増加するといふ点では目算通りだったがなにしろ全部がズブの素人。馬のそばに近づくの恐ろしいというお嬢さんばかりなのでその世話たるや大変なもの。

馬術部であるから遊びに乗ってもらつ

たのでは面目上困るので練習という事にしていたが、我々の方がキヤーキヤー音におどかさされ、おまけに馬に乗せるために男子部員二人掛り。一人が馬を取り押え一人が女子部員の尻を押し上げてやるというナイト振りを發揮してやらなければすべてが進行しないという状態であるから、とてもとも訓練などというわけにはいかなかった。

始めからきつい事をいっただけでは「止めます」と言われ経済的危機が到来するのでハレモノにさわる様、それほそれは大事に扱ったものである。併しころんでは泣き、馬にかまれたといっでは泣き出されるといっ状態がしばらく続き、私としてははなんだか頭の下げっぱなしだった様な記憶が残っている。

今は名も高き平木茂子嬢もその当時は雨あがりの固い馬場で手綱さばきも危く



転倒し骨を折ったなどという事はオシヤカサマでも気がつかない程の内緒話になつてしまふわけである（これはこゝで発表をさしつかえるがな）。

こめ様に、新人優先の内規のお陰で、レギュラー連中は満足に馬にも乗れないので止むを得ず、日曜日に集り巻島先輩をかっぎ出してみつちりしぼつてもらつたものである。

巻島先輩の監督ぶりはとても言語に絶するのたえ通り、紙上に書ける様な生易しいもめではなかつたが今は壊しく、もう一度味わつてみたい気がするから不思議なものだ。

さて部内の状態はと言うと前に述べた如く経済状態は会社でいう赤字経営め域をぬけ出ることが出来ず、窮々の生活であつたが皆の気持はなごやかでありまゝまつていた。

或る者は滴戸物店に交渉して運搬の際の菓をもらつて来たり、又或る者は食堂と交渉して野菜等をもらつて来たり、或る者は自分の金で塩やら薬品やらを購入して来たり、馬房のいたんだのを見て、板やらブリキ板等を集めて皆で修理したりと各人が率先して部の為になる様に努めたものである。

馬小屋と部室と同居の貧しい生活であつたが心の灯はいつもあかあかと燃えている様な楽しい雰囲気は今もつて忘れ難い思い出として残っている。

学生時代一緒ではなかつた後輩諸兄と毎年一度は集り昔の悪童振りを發揮出来るのもこの学生生活の名残であらう。

学校を出てしまつてもうそれきりになつてしまふ部の多い中で、卒業後も緑鞣会という会の中で楽しく過せる機関をもつ馬術部に私は誇をもち、今後も大きく発展して行く様心より祈つてやまない。

（昭和二十八年卒）

乗馬服装 技術を誇り70年

目黒 森下洋服店

各乗馬クラブ御用

国電目黒駅前都電通り
TEL (441) 2922

自馬を得た喜び

堀内陽一先輩を訪ねて

何時電話しても層ない人と定評のある堀内氏とようやく会えることとなった。

逢うまでは声から想像して太り気味の貫録づいた紳士かと思っていたら、案に相違して若さあふるスポーツマンであった。ゴルフでは社内一、二を争うそうである。早速応接間で当時の思い出を拝聴した。

私が入部したのは、丁度新制大学に於いての馬術部が創立された時でした。発起人の松ちやん（植松氏）が学生部長として目覚ましい活躍をしました。あの人は馬術部にとつて最大の功労者でしょう。私はブレイ専門で、一応軍隊で乗った経験があったので技術的なことを受持っていました。

部が出来て間もなく連盟に入り、東都大学リーグ戦に初参加したわけだ。その頃の東都大学リーグ戦では日大、学習院、農工が優勝を争っていました。初参加のうちは七位でしたが、戦ったこと自体に満足してました。

当時の学生の馬には未調教の馬が多くて、いかにして馬場に入るか、入ったらスタートできるだろうか、スタートして

もその先素直に歩いてくれるだろうかといった様な具合で、強引に体ごと持って行くほか仕方なく、試合は全く水ものという考えでした。

自馬第一号の青峯は、二十六年の夏に御殿場から購入し、森、宮坂が興津を経て横浜の私の家まで曳馬してきました、それを引き継いだ私は庭で一日休ませ、交通量の少ない夜に出発し、東京乗馬に翌朝の九時頃無事着くことができました。

なにしろ長靴で歩くのだから、いい加減足を上げるのもいやになるが、馬の方も疲れ果てて、しまいにはもう、ヨロヨロとつまずきながら歩いているんです。しかし、自分達の馬なんだと思つた時はなんともいえず嬉しかったですね。

二十七年の夏頃でしたが、沈さんと共に北海道の日高まで合宿地を選定すべく十日間の無銭に近い旅行に出掛けた事があるんです。

札幌の縁故を頼って、道庁から紹介状をもらい、日高の国営牧場と合宿の取り決めをして来たのですが、合宿の費用で馬匹購入を、という部員の声もあって、この計画はダメになりました。

さてその日高から札幌に帰ってきた時には二人共すでに一銭もなくなつてしまつてね。いつものように、いつもの場所へと質屋の暖簾をくぐつて、時計などを入れ、急場をしのぐことが出来た様なわけでした。質草は後で北海道の部員に出してもらつたので流さずに済みました。この時には古谷先輩に大変お世話になったのですが、今もつて礼状一本出してないんです。えらい部員が訪ねて来たもの地位は覚えていてもかも知れませんが。

古谷さんの息子さんが北大の馬術部の主将をしていたので、北大との定期戦を結んできたのだけれど、この方はお流れとなりました。

同年の夏休みに鎌倉で男女合同の合宿を行いました。参加者は沈、中島、平木梅本さんなど十二、三名で、馬は四、五頭いたと思います。

合宿所は近くの光明寺という所で、皆ゴ口寝をしました。

この合宿では平木、梅本さん等が上手になつたのを覚えていますが、自分としては海水浴しか記憶に残ってないんです。毎日よく泳ぎましたから。

合宿の代りによく御殿場へ遠乗りに行きました。女子も一緒に。

当時はまだ食糧が十分でないもので、テントの他に、米、カンヅメからミソまで持参して、大八車を風よけにして野営するんですよ。楽しかったですね。

OBになつてからもよく行きましたよ。ある時、芦の湖までのハイキングコース

を行った事があって、騎座を強くするため現役全部を鍛上げにしたわけです。

乙女峠でしたが、急なところを馬を曳いて下りたりして相当の強行軍だったがこの頃の女子は負けず嫌いが多くて、最後までついて来たのにはいささか驚きました。

いまでもそうだと思うけれど、部屋で飲んだり、家に帰るのを忘れたような者が何時も四、五人ゴロゴロしてました。

当時の学生は、部に対しての絶対数が足りなかつたので、ほとんど兼部してたようです。昼は馬場、夜はリンクにと、アイスホッケーに入つてた私は、授業に出る暇がない様な状態であつたが、何とか卒業は出来ました。現役諸君も大いにガンバツテ下さい。（石原、高松）

（昭和二十九年卒）



エン表をかつぎ コッペパンをかじって

森健先輩を訪ねて

まず初代「青峯号」の馬輸送から氏の話は始まった。

八才とはかり思つて、鞍を含めて三万二千円で御殿場の長田家から買った初めての自馬である青峯号は、後になつて十三才であることがわかった。その輸送たるや、誠に涙ぐましい努力がはらわれた。

七月二十二日の夕方（昭和二十六年）御殿場を出発した森、宮坂両氏は、一人が騎乗し、他の一人は馬を疲れさせない為に、エン表をかつぎコッペパンをかじりかじり歩いたそうである。二日目の晩は農家に御世話になり、そこで再び勇気百倍して青山の地に向い、三日間という日時を費して初めての馬輸送は終つた。

一年後には「青姫」「青兎」の二頭が加わりブルーの後部に馬房が出来た。その二頭とて鞍が買えないために半年間裸馬で練習が行われたが、その内に先輩の寄附によって鞍も整つた。

そして昭和二十六年十二月十五日、学習院の馬場で東都大学リーグ戦が行われ、学習院、農大、日大、慈恵医大、専修大農工大、青山学院が参加、農工大が優勝した。試合は四名戦であり青学は七位に留つた。翌年ほ四位で三部優勝をした。

資金難は既にこの頃から激しく学校からの補助金は年間五千円にすぎず、あれこれと苦心されたようだ。そして全員バイトをしたり、月五百円で高等部に貸したりした。

こぼれ話として、森氏が二年の時、乗馬スタイルが写真向きで良いというので日刊スポーツの人に頼まれて、慈恵医大の「愛宕号」で障碍を飛んだ。飛び終って何気なく計つたところ一米八の新記録を作つたことがわかり、一同驚いた。

未公開記録として残念ではあるが、楽しい思い出として森氏の胸の内に生きている。又台風で馬房がやられ真夜中に三頭の馬を探して歩き回つた事、馬房が出来た迄の三ヶ月間、氏の家で馬を世話した為に「青峯」に乗つて毎日学校に通つた事等々思い出はつきないようでした。

（昭和三十年卒）
（秋元、泉）

アッ!と驚く

永谷園の **オマケつき**

DEG

カレンダー

ふりかけ



- カレンダー・ふりかけはおかかふりかけ・キミカレー・えびたま・おきさま茶漬・のりたまご・磯のふきよせで1セットになっております
- おまけ「忍者の素」は忍者が敵をあざむく装束用に使います。ムヒゲ・ホクロ・大・星・飛行機・ハート・チューリップ・クローバが打ちぬきになっておりますのでハサミを使わずどこへでも手軽につけられます。

6袋につき ¥50

株式会社 **永谷園本舗**
東京都港区芝田村町23 TEL (432) 2211~7



梅本

松居

平木

安藤

福原

伊藤

磯部

添 花 期

昭和三十一年と三十二年

自馬四頭に加えて自前の馬房、馬場を持つに至るといふ威勢の
良い時期である。しかしその白馬たるや駈足能力だけがやや
満足出来るといったただの動物。それだけに部員は馬がいなく
ても自分で障碍飛越を行い得る気概の持ち主が多いようだ。記
録によれば渡辺先輩が関東選手になっている。飼育には四苦
苦、馬といえどおからとそば湯が喰わされ、飲まされた時代で
ある。この時期に注目すべき手柄は多数の女子学生が入部した
こと。ガサツな部の中に色のあざやかな花が添えられたとい
うわけである。

戦後に強くなったものは

女子部の歴史はその端を昭和二十七年に発しました。

数々の偉業を成し遂げて、青学女子部の名を学生馬術界に知らしめた荣誉ある一代目は、現コーチの平木さんを中心とする福原、小島（当時梅本）、伊藤、秋山、等の皆さん。

この時代に於いて最も銘記すべきことは、平木、小島両先輩の大奔走によって成就した関東女子学生馬術連盟の誕生です。単に青学女子部員にとつてのみでなく、全関東の女子学生馬術家にとつても大きな宿題であつた連盟の結成。その発起人が、我が部の先輩であつたということとは、大いに誇りにして良いことではないでしょうか。

連盟発足に當つて行われた、第一回競技大会に際し、その成立のいきさつを、小島さんは次のように述べています。

暗い日 辛い日 明るい日

”女子のリーグ戦を絶対三月には開きましようね” と言いだめたのが去年の十一月初。冬の柔い日さしにいちよの葉が輝くばかりの黄金色に燃えている頃でした。アパロンへの長い道を平木さんと二人で、時には絶望し、時には歡喜におど

りながら馬の話に夢中になっていた頃、「君達そんなにリーグ戦したいなら連盟を作るのだよ」とヒントを与えて下さったのが渡辺さん、それからの私達は、連盟を自分達で作ろうと頭を悩まし始めたのです。平木さんは徹夜で規約の草案を作つて下さいました。一月二十九日、発起人会を行いました。冷たい雨がしよぼしよぼ降つて本当に寒い日でしたのに早稲田・慶応・学習院の三校が集り、大いに賛意を表して下さい、お互いに喜び合つたのでした。

二月六日、第一回幹事会を青学部室にて行いました。新たに法政・中央・成城が参加し、又立教・慈恵大は手紙でわざわざ激励して下さい、本当に有難く思いました。一方学習院・慶応は女子連盟設立の時機早尚として前意を覆し保留するという、しかし早稲田・法政の強硬な態度で連盟は其の億存続させることに決定二月七日、日本馬術連盟理事会に出席し私達の連盟の目的を伝えたと、関東学生連盟大会の中に馬術部を設けて頂いた方が良いだろうという意見でした。しかし前記加盟校は設立された以上、今更取消す必要なしとして、あくまで一歩目的に向つて邁進することに決定。

二月十日、第二回幹事会学習院・慶応は以前として保留するままに新たに日大が参加し、ト・ナメントを三月十三日に行うことに決定、当番校は青山学院、加盟校六校を擁する連盟の会長もまだ決らない状態のまま、私達は会長に推すべき人々を訪ね、大会費捻出のため走り廻り、あちらこちらで壁にぶつかつては引き返す、そんな日が三日も続いた二月十一日学習院が加盟、二十三日、成蹊が加盟しこれで合計八校となり、いよいよ最後の手段として「當つて砕ける」の言を文字通り実行。



昭和 30 年 第 1 回関東選手に優勝

と、快く就任を引き受けてその前途を祝福して下さつたのでした。嬉しかった！ 私と平木さんにとつてその日はまさに最良の日でした。笑うまいとしても自然と唇がほころびて来ました。何もかも楽しそうに見え私達は幸でした。こうして出来上つた連盟の第一回競技大会（これは日本で初の女子大生ばかりの馬術大会でした。）では、部班運動で平木さんが優勝、三位四位を梅本さん松居（清）さんが、占めるという好成绩、団体トーナメントでは四点差で惜しくも慶応に勝を譲つたが、良く健闘した試合でした。

松居 堀内 安藤 梅本 沈 賀川 平木 日高 植松 福原 磯部 伊藤 伊藤 東 左より

初の開東女子学生馬術代表選手選抜大会が行われ、一位平木、二位渡辺（慶）、三位小野（慶）、四位松岡（早）五位松居（青山）と決定。初の開東選手の栄冠が二つも我が部の上に輝いたので。二十九年十月に行われた第一回対学習院定期戦もそのうちのひとつ。これは女子部にとつて初の他校試合でもあつたのです。六名戦で選手は平木、福原、伊藤、梅本、小野塚（現、安藤）、松居の皆さん。試合中「アツ落馬」と思われた瞬間馬の首

馬房造り

をギョツと一ひねりして安藤さん、下った首を上げさせて危うく落馬をまぬがれる。という一コマもありましたが、対戦成績青山4・12学習院で圧倒的勝利初試合での優勝の喜びは、何ものにも増して嬉しかったとは福原さんの言葉です。

更に忘れられない試合としてもう一つ三十年十月の第一回関東北女子学生馬術大会、所謂福島遠征です。参加校は福島大、学習院、日大、成蹊、青山の五大学。ここでも団体戦で平木、福原の青山Aチームが優勝、二位の学習院に続いて三位も青山、磯部、小野塚のCチーム。

個人部門でも一位平木、二位福原、三位松居と上位を完全に押えきって堂々の成績、青山学院馬術部の名を増々高からしめたものでした。

このようにして、誕生後瞬時のうちに大きな成長を遂げ、内に見ては、青山学院馬術部の発展に、外に見ては連盟確立を通して女子学生馬術界に大きく貢献した功績は私達後輩にとっても大きな誇りとなつて伝わっているのです。

〔高松孝子〕

お忙しい中を東・藤根両氏にある喫茶店でインタビュー。

最初に当時の部員数と役員についてお伺いした。

当時は、男子十八と十九名、女子は、他校数名に対して、我校は二十数名と女子

右より
列子 森
左より
金藤 藤
中列 藤 藤
藤根 藤
3人 おいて
遠藤 藤
前列 藤
斉藤 藤



東・藤根両先輩を訪ねて

部員が非常に多かった。毎年入部者二十と三十名の多くをみるのであるが、四年の間にほ、四と六名と、少なくなるのが例年の事であった。又当時は、乗馬したくても部員として四年間を有意義に過ごす人もあつたとが。役員は、主將に東氏副將に市原氏、会計に藤根氏、協会幹事に村野氏、監督（この監督は今の監督と違ひ相談役である）に米谷氏であつた。部の方針はスパルタ式を取り、厳しさの中から部生活を通じて何かを得ようとするものであつた。

次に当時の馬匹をお伺いした。

当時、学校から出る予算は三万円程度、この金額では、馬など購入する事はほとんど不可能であり、馬の購入は部員の自費による事が多く、皆お金を節約し部の事に当て、又ある時には、ジャズやクラソツクの楽団を招きその収益を部費としたとか。

青蜂（栗毛） 部初めての自馬

青妃（鹿毛・四白） 昭和二十七年七月

青兎（栗毛） 月二十四日買入

この二頭は、御殿場から乗馬して輸送。青妃は四白と珍らしい馬で、長く部員に嘯む、蹴るなどの悪癖を遺憾なく發揮し手入れの時など新入生を困らせたとか。

しかし、破行のため、間もなく出て行た。

青翠（鹿毛） 昭和二十九年買入

青波（栗毛） 昭和三十年買入

青翠、青波両馬共にあまり癖のない良い馬であつたとが。

次に練習及び練習地について、

練習地は、学院内の元校友会館跡で、その一隅に六頭分の馬房（現在の網島と同じ型）があり、馬三頭分の残りの馬房二つは部室に、又一つは畳を敷き宿直室として使用した。その後、馬買入のため飯馬房をどこからともなく集まつた板で造り馬を入れる。校内にあつても常に清潔に気を付けていたので、回りから苦情も出ず皆から愛される馬であつたとが。

練習は、一日朝夕二回で、一回につき約二時間ぐらいであつた。自由練習の時間一時間は一年生を主体とし、放課後（三と六時）は上級生を主体とした。練習が終了手入れを済まし家に帰る頃には、すでに外は暗く空には星が輝いていた日が多かつたとが。又当時は、中、高等部大学（一部、二部）と部員数が多いわりには馬が少なかつたので、馬の負担はどのくらいであつたらうか。昭和二十八年のトーナメントの前の練習の時など、朝六時と八時まで、放課後三時と五時までの長い時間を一頭の馬で三〇〇と四〇〇回も障碍飛越に使つたとが。馬の負担を考え、体重、夫助などを比べて乗馬させた。又チームワークを計るために御殿場に遠乗りに出かけたたりした。又公式戦の

前の十日間は強化練習を行なった。練習には皆熱心であった。昭和二十九年に戦後初めて埼玉県の児玉という所で、夏期合宿を行った。遠征はしなかった。
次に試合記録について。

年間を通じて十四、十五回の試合を行なった。対抗試合は今の東都大学が多かった。年平均の勝率は四割ぐらいであったとか。当時「昭和二十八年」の一番大きな業績は、何といつても春のトーナメントで三部優勝し二部入れ換え戦で慈恵医大とやり勝ち二部昇格の大事を成し遂げた事である。選手は皆三年生であった。三部戦で一回戦は三名、二回戦四名、三回戦で五名となり、二部入れ換え戦で六名戦となると我部は当時男子五名のため男子トーナメントに初め女子参加が成るかと思われたのであるが、五名戦であった。この様に馬の数、部員数が少ないにもかかわらず二部に昇格できたのは、一つには運もあつたのであるが、スパルタ式による練習とチームワークの良さが、強く働いたのと言うまでもなかった。
次に当時は女性の黄金時代であった事について。



〔宮島康彰〕

昭和二十七、二十八年頃から、我部にも女性の登場を見た。初めての定期戦は、対学習院戦であった。当時の学習院には女子部員も少なかったので圧勝、昭和二十九年に初めてのリーグ戦が行なわれた。他校は部員数も少なく、まだまだ軟弱であったので、連戦連勝であった。又平木さん「軌コーチ」を中心に創立間も無い大丸百貨店の支店長を後援として関東女子馬術連盟を創設するなどの数々の偉業を成し遂げたのであった。

最後にこれからの部に対する希望
東氏 早く一部に昇格する事と関東選手を多く出し馬術を増々発展させる事を望む。
藤根氏 愛馬心を高め、部生活を通じて人格陶冶を望む。

私の馬術部生活を顧みて

大 島 孝 子

私が青山学院大学体育会馬術部にて大學生生活の大部分を過した四年間は限られた紙面に述べる事は全く出来ません。

馬の事を書いて、部員の性格をいかけても、OBの事を書いて、試合の事、他校との接触の事、合宿の事、新入部員の事、遠乗会の事、これらの中のどれをとつてみてもそれが全てエピソードであり、思い出す材料となっています。

私の馬術部生活を通して流れていた事は如何にし乍ら馬術部を存続させていくか、馬術部をつぶさない為には何をするか、という事につきると思います。自分個人の事は無視させられました。部員達はこの事のみそれぞれの考えをおき何とかして馬術部を一流のものにしようとい心を砕きました。

しかしながら我々一同に言える事は経済的に余裕のある者が一人も居なかつたことで馬術部自体も予算が十万円を出る事が無い程の微々たるものでした。この様な経済上の困難を克服して馬術部が存続したという事は兎にも角にも我々の努力と先輩の温い援助でした。

当時は馬術とは障害のみで馬場馬術の

心得のある馬は東都及び六大学を通じても何頭も居りません。

各大学馬術部の馬は癖のある物凄いのでした。例えば日大の桜駿、学習院の初桜、農工大の皇範、数え上げればきりない程癖馬の数は多かつた。その癖馬の中に我が馬術部の持ち馬青妃号もありました。当時の練習はただ障害を越えればよいという単純なもの。何が何でも馬に障害を越えさせるという人為的なもので馬が障害を越えるという馬まかせの馬は居ませんでした。此の様な人為的(?)馬術にあつては馬よりもむしろ人間の方が気塊をもつていないと障害馬術は出来ません。自分達のなげなしのボケットマネーは馬の人参になり馬小屋になり障害の横木になり又は馬糞になりました。自分達の乗馬服もなくキョロツトもなく、長靴もなく帽子もない馬術部員でしたが乗馬服のようなもの、長靴のようなものキョロツトのようなものを身につけて対抗試合にも出場し気塊のある試合を続けました。

当時我々は試合で何十点という差でまけた事はありません。勝つにしても負け

何でも戴きの記

るにしても何百点という差でした。馬を障害の向う側にもつていくという馬術の初歩の初歩しか知り合かせない馬術部員がよく試合に勝つたものだと思います。

私が四年の時戦後初めて関西遠征を行ないました。この時は関学、神戸大、立命館大、愛知大に勝ち、負けたのは同志社大、名古屋大のみでした。私は今でもよく我々は勝つたものだと思います。馬を障害の向う側にもつてゆく馬術部の気塊の勝利だと思っています。

豆腐のオカラだけで我々は青妃号を飼育し毎晩の宿直で秋月のソバのあげ湯をもらい何とか馬を生かした事は涙ぐましいと思つています。我々は馬術部の存続のみに自分達の精神を統一し努力しましたが我々を見守つてくれた人々も数々あります。その人達は我々のような単純で馬鹿な人間を指導して下さった各位であります。OB会長の青木真次氏、青木昇氏、羽板氏、沈氏、植松氏、中島氏、等は我々を上げまし、叱咤して下さいました。ここに心より感謝申し上げます。

我々の馬術部が何とか今でもあり活躍している事を聞くにつけ当時の苦労がみえた様に考へて居ります。

〔昭和三十三年卒〕

今も昔も馬術部の貧乏は変りない。高が十万円やそこいらの体育会の予算では何も出来ない。先輩に倣い、事故に備え手を付けずに年度末迄銀行に預け入れ遣り繰は部員の懐に頼るほかになかつたので、少しでも経費を縮めるために先輩



不明 見須 上原 不明 渡辺 大島 庄司 佐藤 不明 不明 後列 大辻 斉藤 相馬 内藤 安藤 小山 松居 前列 左より

内藤喜嗣

は色々調達方法を伝えてくれた。まずは、朝飼は六時に豆腐屋から卵の花を買ってくる（これは月払い）、これに切藁とフスマを混ぜればOK。昼は愛馬も我友、さぞ空腹であろうと馬並に燕麦とフスマ、夕飼は一日御苦労と割増するものやはり足りない。明日の英

気とスタミナを増す為に、疝痛など起こさぬ様に生麦屋から燕麦湯をもらい、水で割って補った。寝糞は前の瀬戸物屋が捨てるのに困っているのを恩に着せて頂戴し、ボロと交換した糞の足にした。それでも足りない時はガラス屋にも行つた。又、校友会の食堂のおばさんからパンの耳、野菜の切端等を分けてもらつて来た。

日曜日に短大や小学校の校庭でクローバの菜を食べさせ、スタ袋を担いで校内の草を集め草の少ない都会の馬に潤いを与へるようにつとめた。

合宿や強北練習の時に障害の修理作成、馬房の修善等を合わせて行つたがこれが又問題である。釘だけは買つて来るがあとは無料調達である。校舎の傍に放つてあ

る破れた机、椅子はもちろん、工場の丸太、コンクリートの打板、角材、板切れ等使える物は一切収奪した。

中でもコンクリートの打板は便利である。三枚合せてボックス障害が出来上り馬房増築となると羽目板代りになり、馬料置場では敷板にと変わるのである。

丸太は主に横木障害に、空のドラム缶はペンキを塗つてドラム障害と化した。台風も又我々に色々サビスしてくれた。ラグビーのボールを破損し踏切障害に変え、バスケットのゴールを破損しA字の三段障害に、立木を倒しこれを自然横木障害にと利用させてくれた。

こうして書いてくると馬術部はギャングのように思われるが、調達した物ほ破損品が正規の使用に及ばない物ばかりで如何に経済的に利用したかと云う事である。ただセメントの破品だけは使用する。ただセメントの破品は使用するのは困難であつたので砂、砂利と伴にリヤカーにて新品を失敬したものである。

しかし先輩が調達してくれた我々の小さな馬場を工事場として調達されたまゝ変わるものも調達出来ず、堅いグラウンドの一部を低姿勢でボロ捨ての箱を引き摺り、又馬にも負担を掛けながら練習したのは残念であつたが、これも今日網島の馬場を獲得出来た因となつたのであるから慰められよう。

この様に先輩の指導よろしく儉約した甲斐あつて我々馬術部も一頭の愛馬から二頭、三頭と、現在は六頭を有する部に発展したのだと思う。

馬術部は馬中心の部であるから馬の身になって管理し、人馬共にベストコンディションにあるよう心掛け、又前記の儉約、利用の精神を加えて増々発展することを望むものである。

〔昭和三十三年卒〕



渡辺 庄司 大島 相馬 佐藤 遠藤 後列
内藤 村野 市原 原功 前列
左より

今だから話そう

渡辺 充

【その二】 入部の事 昭29

口 貧乏な馬術部
入部してまずびっくりした事は、馬術

部があまりにも貧乏で粗末であった事です。

馬が一頭、借り物の鞍しかなく、馬房はあばら屋で部員も十名位という状態でした。又部内の統制も運動部らしくなぬ状態であったと思います。小生の様に中学、高校時代に運動部でスバルタ教育を受けた者にとって、まるで別世界に來た気持ちでした。

しかし個人的には、先輩諸氏は皆よい人達ばかりでした。その時小生は、良い人間の集りならば絶対に発展、前進出来る部になると考えました。

その時の小生の目標は、自分が関東選手になる事、馬匹を卒業迄に五頭以上にし、経済的にも健全にする事を四年間の仕事とする事でした。こ

の事は卒業迄に約九十パーセント以上は達する事が出来たと確信しています。皆さん如何でしょうか？

四年間の間、この目標の為に小生に御助力をいただいた先輩諸氏後輩には深く感謝しています。ありがとうございました。

【その二】 一年生夏期合宿 昭29

俺が何故こんな苦しい部に入ったかと考えた時

中島、堀内、巻島等の先輩に鑑上げで死ぬ程の目にあわされた時でした。小生が反動高き青姫に乗って鑑上げの練習中堀内先輩によって馬上より死の奈落へとたゞき落とされた時でしたが、「そこで武蔵は考えた。」俺が何んの理由でこんな目に会わなければならぬのか。何んの為にこんな苦しみを受けなければならぬのかと。

しかし今でもその時の堀内先輩には感謝しています。その時のその苦しみを受けた事が、今日の小生にとっては百の忠言以上の価値あるものでした。堀内先輩今後共宣しくお願い致します。

【その三】 島田のサロ金 昭30

あゝ日本男子よこゝにあり

この頃、一年生に島田という者がいて合宿中のある日ある時、鑑上げ中に鞍の

前部に大切な物の物をぶつけて落馬、そこ迄は皆さんも経験あると思います。その後が皆さんと違うのです。彼はその時どこへ行つて何をしたと思いますか。島田は一人で前を押さえながら医務室へ行き、妙齢の乙女の前につけられた男の物を出してサロンプラスを貼つてもらったのである。小生ウラヤマシキカギリであった。島田よ今どこにいるの。

【その四】 三年生夏期合宿 昭31

悪人その名は市原昭十郎

夏期合宿では初めての外部（大津乗馬クラブ）での合宿で、参加者十数名。非常に厳しい練習で遠藤君がよく泣いたと思うが。しかし自由時間には随分と悪い事をした人がいましたね。

トップに市原氏、大島、村野それに内藤君。彼等は、アルバイトに來ていた彦根短大の女の子のシリを追い廻わし、水中、ヨット上、砂上にと一生懸命なことがなされていた様です。特に悪い人は昭十郎氏でした。その後半年が一年位続いたとの事でした。この時小生は、居眠りばかりしていて「眠りのナベさん」と云われた様です。昭十郎氏バラシてごめんなさい。小生いまだに感心しています。色々と、「おぼれのナベさん」についてだけかに聞いて下さい。

【その五】 最後の夏期合宿 昭32

食しん坊の三木。張間の物。

小生以下九名が参加した北海道北見の合宿の時でした。札幌のある先輩がやっていた支那料理屋でこちそうになった時

でした。円卓の上に沢山の料理が並んでいたと思つて下さい。先輩が料理を取ろうと手を出した時、三木君、がつがつして相手がまわす円卓をくるくると廻わして料理を取った時の小生初め一同の驚きと淋しさは、今でも汗が出る程でした。「三木君今でもがつがつしているのですか。」

又最後に温根湯温泉に行き、皆さんで風呂の中で記念写真を写した時、写真に実ははつきりと張間君の物が写つていて後で大笑いをした事があつた。今でもその写真はあります。

【その六】 試合の事 昭32

一番残念な試合、東都ト・ナメントの時小生東都の幹事長であつた。その手前、このト・ナメントにはぜひ優勝したいと思ひ、又優勝のチャンスが大であつたのですが、ク口ちゃんのミスで優勝を逃がしたのである。

日本で初めての男女混成チームで試合に出たのである。メンバーは松居清子、小野塚節子、小生、相馬、佐藤、内藤の六名。一回戦学習院と会い、松居、小生相馬が食い、内藤、佐藤が同点でク口ちゃんもラス前迄は食つていたのが、そこで経路違反をして全て終り。その時の悔しさは今でも忘れません。その学習院が優勝したのですからね。

松居君に食われた関東選手の安田は、頭を丸弟主にしたそうである。当時は、このメンバーが最強であつたと今でも信じています。

【その七】 馬匹の事

我が恋人青姫青波
小生が一番お世話になつた馬であり、部の為にも功勞馬であるから後世迄記録に残す事。青姫については小生より東、村野、藤根、市原、大島の諸先輩が良く知つています。

青波は小生達が買つて来て育てた馬で、阿部氏が馬場を、小生が先生の指導の下で障害を教えた馬ですが、馬格は小さい方だが非常にバネのある馬で一六〇位は飛んだのです。又小生、青波で乙馬場や中障害の試合には良く出てまあまあ成績でした。対校試合では、青波の上手下手が勝敗を決した様です。青波については、内藤君や張間君がよく泣かされていたから彼等に聞くと色々面白いと思ひます。この両君は今でも青波を愛している事でしょう。

【その八】 関東選手

よくなれたと思ふ

小生は入部以來、関東選手になる事が個人の目標であり、三年間その為の練習をして来たが、関東選手は技術だけではないものではない事です。馬術界に、一顔二姿三馬術という言葉があるが、事実です。小生もこの言葉を守り実行した結果、関東選手になれたのです。僅か丸三年の馬歴で選手になつたのは他にはないのではないかと思います。石の上にも三



年。何事も目標に対し努力すれば不可能な事はないと思ひます。現在でも君達はその気になれば、四年生の時にはなれます。小生でさえもなれたのですから。

【その八】 卒業して

馬術部ホントに良いとこ

馬術部は、社会人になり、社会で活動する時、役に立つ人間、社会に必要な人間になるには一番良い部ではないかと思ひます。馬を通じての人間形成の場である馬術部で、有意義な学生生活を送れる様に努力することを皆さんにお勧めします。小生青学馬術部卒業を誇りに思つています。最後に諸先輩と後輩諸君の今後の御健闘を遠く北海の地より祈つています。

（昭和三十三年卒）

★ハイセンス
★時代の先達を行く

あなたの御髪は

ルリ美容室で

青山南町電停前
TEL (401) 4428

思い出すまゝに

佐藤 一 貫

戦前戦中はともかくとして、戦後、部が再開されたのは、確か二十五年 男子高等部で再発足したと記憶する。てな事を書くに私自身、馬鹿にゆつくりと学院で、いや部で、部費を納めた事が露れて



左より
村野 市原 大島 遠藤 佐藤 庄司

しまう。まあ家庭の事情やら病気やらで不本意ながら足踏み之余儀なくさせられた。御陰で戦後の部の活動を誰よりも長く経験し見守って来られた。部員は主将即ち故鬼大将、早川久万雄氏、それに中島、井崎、他に三枝（練習中落馬して下級生の手前を恥じて退部）等、名のみ登録した部員として私を始め、森健、宮坂悠次、平野、それに一年生の小笠原とそんなものだったと記憶する。

練習は毎週土曜、代々木の東京乗馬倶楽部で行われた。当時大学では未だ部として形が整っていなかった様に記憶するが好きな者が倶楽部へ顔を出した。例の大杉栄暗殺の甘粕大尉の息子、散々御世話になったアンチヨコの清水書院社長の令息等、良く尻を叩かれたものだった。毎土曜日、金百五十円也の学割騎乗料を苦面し、その他に渋谷代々木間往復電車賃二十円也を持って練習に通ったものだった。五、六月の暑い頃、練習後はアイスクャンデーが欲しくなる。大変失礼だが、当時先輩

といつても、早川氏や中島氏、御多分にもれず金まわりは悪かった。で遂に練習後なけなしの帰りの電車賃がキャンデーに化け、止むなく割箸をしゃぶりながらようやく目立ち始めたアベックを冷やかしながら、神宮を抜けて渋谷迄歩いて帰ったものだった。

その年最初の合宿が、八月信州め牧場で行われた。恐らく始めての合宿らしい合宿で、それ以後は、どうもあまり取り立てて云う程の合宿はなかった様に思う。小諸から小海線で入った北中込という所で、浅間山の麓である。県立か国立かは記憶していないが、その年一杯で閉鎖される事になっていった種畜牧場であった。東京の倶楽部で見慣れた、やせこけた馬に親しんでいた私達には、首さえ二抱えもありそんな種馬を見ただけで、ギョッとしてしまった。その上、一人二頭ずつ任され、朝夕二頭づつ練習、いや馬の運動をさせねばならなかった。五月から毎土曜、一時間足らずしか馬に乗った事のない私を始め、森、宮坂、そして小笠原に至っては、もう何をか云わんや、その場で連れ右をして帰らなくなってしまう。朝の来るのがうらめしかった。朝は五時半半に起きて、先づ朝の運動、未だ仏法僧の啼く声が聞こえる頃である。牧場の内のグラウンドへ出て、一時間、勿論、あぶみ上げをこつてりやられ、一度で股がおかしくなってしまう。そして飼付け。我々もその間に朝食、一時間後にもう一頭の馬め運動、結局、毎朝一頭に二時間、

計四時間め運動である。これでは、馬鹿でもチョンでも馬に乗れる様になる。ともかく大抵の馬には乗れる様に、みっちり面倒みられてしまった。しかし今思い起すと、遠い郷愁以上に懐かしく今を昔に戻したくなつて来る。ともかく私達は何も無かつた時代だったが、恵まれて居たと幸福に思う。

その合宿を思い出に、部も大きく発展し自馬が一頭、購入されるに至つた。御殿場で農耕に使われて居た馬である。最初の馬「青峯号」である。新制の高等部に復学し、丁度同好会から部に昇格出来、私は経験から主将にさせられた。当時高等部の部員は登録名のみ多く、実際には五、六名しか活躍して居なかつた。翌年都高馬連に新加盟し、最初のトーナメントに参加する事が出来た。五名の選手を揃えるのに一苦労したものだ。私、牧山、鬼頭、津田、そして未だ中等部の学生だった長谷川、「万が一、知れたらえらい事だったが」やつと五名揃えたものだった。

最初、東京乗馬倶楽部に預けていた、青峯を、経済的理由と、倶楽部側で学生の自馬を預からない、と云われて、「もっとも、それは他に法大や中大の各部が一諸に預けて居て各部の当番が互に自馬の為に倶楽部の飼料やら、わらを夜、闇に乗じて失敬して来るので、手を焼いて居たからに外ならないが、夜自分達のわらが十束あつたと思うと翌日は他校の束の中にいつの間にかまぎれ込んでいたり互

にこまかしくしたものであった。「中大の部員にはよくやられた」そんな事で借家を追われた「青峰」を止むなく、一時のぎのつもりで、現在アパロンの建物のある場所に、清水建設め飯場があり現場監督の好意に甘えて、余材を買い、掘立小屋を作つて、学校側の許可を待たず、既成事をこしらへてしまつた。亡くなられた龜徳先生には、その件に關して大変御世話になつた事を記憶している。丁度現在、短大のテニスコートのある場所に、かつて龜徳先生のお宅があつた。さて、それからが部の難行苦行の時代が始る。部員は居ても部費は集らず、年中ピーピーして、飼料屋の勘定は常に滞り勝ちであつた。サラリン錠でも解決出来ない金づまり、十円、二十円の小遣錢を出し合つては、ふすまやら表を買いに走つたものである。色々な面で当時の部は部員以外の人々の好意を得て何とか存続出席た。西門を出た通りの向い、花屋の裏に荷馬車屋があり駄馬を飼つて居た。親父の名は忘れたが、ペビーフェースのあの顔は忘れない。恐らく、もう故人となつたらうがそこではよくわらや飼料を買つたものであつた。さて、私も無事高等部を卒業して、大学へ進んだ。が、今度には胃潰瘍で「無理がたつて学校で吐血し」胃袋を切り取つてしまつた。云わば不具者となつてしまつた。そこで一年足踏み、医者からは乗馬を禁止され、無論激しい運動は一切御法度を申し渡され、

がっくり来た。しかし馬術に対する情熱止み難たく、手術後、二、三ヶ月も経つと医者の言葉もどこへやら、馬の背にまたがつた。てな事を書くとは大変、偉そうに思われるが、下手の横好きと云う奴なんだろうが。その年一年、再び休学の浮目を見て、翌年一年からやり直し、御陰で部では古顔になつてしまつた。その為得もしたし、損もした。無胃のハンデを背負つての部活動は、他人より倍以上の練習と努力を要した。辛くもあつたし、口惜しい事もあつた。健康人が本当にうらやましかつた。いまだに、あまり無理の効かぬ身体である。さて、自分の事はともかく、戦後始めての遠征を豊橋の名大へ行つた。一番のドン行で昼近く豊橋に着き、その日の内に東京に帰つて来たのである。試合は軽く一勝したが、ともかく、きつい遠征であつた。メンバーは写真も残つているが、主将、東、藤根、村野、市原、大島、相馬、渡辺、内藤、小池、それに私だつたと記憶している。その翌年、関西へ大遠征を行つた。市原氏の俸力に依る所、大である。そして大島マネシャー、それに私という名サブマネシャーを配しての遠征は、大成功であつた。恐らくもう記録は残つていないと思つた。恐らくもう記録は残つていないと思つた。経済的にも恵まれ、最後大阪で解散した時は、参加者全員に千円づつの小遣いを渡せた位で、後にも先にもこんな遠征はなかつたらうと思つた。此の年、昭和三十一年、五月に始めてのダンスパーティーを、品川のプリンスホテルで開いた。ベギー葉山等の演奏を加え、原信

夫と & ♀ をも加え、他には見えない盛大なものであつた。が利益は御陰で大した事はなかつた。がともかく部の経済が潤つたのは事実である。そしてその翌年三十二年、再び、私達は特に北海道は北見に引込んで居る渡辺等の俸力に依り、より盛大なパーティーを、同じプリンスホテルで開いた。記録が残つているかどうか知らぬが、十万円近くの利益を上げ、馬具、自馬も二頭、「青影号、青峯号」購入し、尚、諸々への借金を返済して黒字財政とした。内藤會計の努力、諸先輩の協力に依る事は言う迄もない。終りに私自身、いわゆる青春の大半を此の馬術部で過して来て思う事は、得る事多く幸福であつた。と改めて思う。それにつけても健康は何よりも大切なものであるといふ事を痛感する。がしかし、私のような無胃の者でも馬術は出来るといふ事である。現部員の諸君も健康には充分注意して頑張つて下さい。

（昭和三十三年卒）

青山学院御用

★徽章・カップ
★トロフィー・卒業記念品の

御注文は
TEL (401) 2389

富士徽章製作所へ

青山学院正門前



世界をつなぐ

報國チェーン



製造品目
コンベヤー装置一式
コンベヤーチェーン
機械伝導用各種
オートバイ用チェーン
自動車用チェーン

報國チェーン株式会社

本社及び大森工場
東京都大田区大森西3丁目1番20号 電話大森(761) 6791-1番
清田工場
東京都大田区西六郷1丁目18番地 電話清田(731) 3883-5番
大阪営業所
大阪市南区安堂寺橋通り2ノ22(安ニビル内) 電話大阪(251) 7087番

充 実 期

昭和三十四年～三十七年

日本経済の成長につれて部も順調に発展、この頃には五十名近くの部員を擁するに至り、老馬が去り血統のよい満点馬が入厩するなど馬匹購入、飼育の面でいささかの余裕が出て来た。特に部専用の調教師が置かれ自馬の調教に意が用いられたことはその成長の一端を知り得て面白い。この頃の女子学生の活躍ぶりはその競技成績において目を見はるものがある。あらゆる点に一応欠けた処のない時期とみられ充実期と称する次第。しかし対戦成績に割合に値するものはないことはどうしたことだろうか



馬 術 部 の 思 い 出

石 割 洋 子

学生時代、学問に背いたのか、それとも自から放棄してしまったのか、勉強にはなじみの薄い女子学生でしたが、馬を愛し、馬によく乗り、そして真白面な馬術部員であったのではないかと自負しておりますが、同輩の皆さんいかがでしょうか。当時、馬は青波、青葉、青幸、青嵐等でしたが、一頭一頭に尽きない思い出と、愛着が込められています。青波は名だたる雌馬で、美馬の誉れ高い、気性の激しい馬でした。それだけに、これ程乗って乗りがいのある馬も少ないのではないかと感じさせました。彼女はよくかみ、蹴飛ばそうとする御婦人でしたが、馬族にしてみればそうもしたくなるのでしょうか。青嵐の消息は確かではありませんが、他は全部薄命、その中で青波、青葉はボンコツの憂き目にあっています。青幸は破壊風で亡くなりました。皆で北里研究所から血清を取り寄せ看病しましたが、所詮、運命は決まっています。彼は実に素直な青年でした。日高嬢が特に可愛がっていて、彼女は、彼の死の時にたてがみを三つ編みにして、目を真赤に泣きはらしていたのを覚えています。勿論、私達部員一同も泣きました。青葉、これは私が一番心を残して卒業した馬です。彼は何というか、人間で言えば一見大人しそうで、平凡な感じだけど、深く入っていけば行く程、分けがわからないというか、深みがあるというか、何しろ理解しがたく、又私には乗りこせなかつた馬でした。当時コーチであつた阿部先生に言わせると、「ちっとも難しくない。脚さえびつたりと素直に使えばいい。」という事でした。青波は膠着したすと、余程の事が無い限り、そのままゴネ得。勿論、試合の時など、鞭で激しくひっぱたかれ、拍車をお腹に叩き込まれていましたが・・・の様な時もありました。しかし青葉で、東京乗馬クラブで開かれた婦人少年障碍大会の時、東京乗馬クラブの自馬と優勝を争って二位になつた時は、青葉に少しは乗れるのかしらなどと気を良くしたのですが、大学三年の後半から四年にかけて、乗るといつも手の外で、一時は執念みたいな気持で、彼を乗りこなしたいと思いましたがついに果さず、乗れないまま卒業してしまいました。二年位して横浜乗馬クラブで彼に会つた時は、とても嬉しく、懐かしかつたのですが、彼は跛行していて、何かとても可哀相でした。大学三年の時、毎年開かれる関東女子

学生選手権の団体で、慶応、学習院を敗つて、初優勝した時は、本当に嬉しかったです。その他、毎年、夏に横浜乗馬クラブで開かれた合宿にも尽きない思い出と懐かしさが込められております。秋には福島で関東女子学生馬術大会があり、いつも平木先輩に連れられて、大挙して参加したものです。最近は何事も忙しく仲々馬に専念する事も出来ませんが、夏休みは田舎で郊外や山野を駆け巡ったり、又湖などの貸馬に乗ったりしています。でも学生時代程心行くまで乗れるという事は、もう二度となさそうです。ですから後輩の皆さんには、本当に馬術を



やりたかったら、短い四年間ですが、徹底的に、真白面にやってほしいとお願いしたいのです。学生時代、学問か運動に専念できたら、きっと社会に出た時に困難や危機に立ち向う事の出来る強靱な精神が得られるのではないのでしょうか。そしてフェア精神も・・・。私は馬に乗って一生懸命とした学生時代から私にとつて非常に数多くの貴重な教訓となつて、現在私の心の中に生きているように思えます。

最後に、素晴らしい先輩の皆様には、学生時代、卒業後の御指導やお世話を心から感謝し後輩の皆さんには、最後まで馬術を放棄しないで、頑張り続けて下さいと御願してペンを置きます。

（昭和三十五年卒）

白崎 立村 上原 木田 安藤 斉藤 高橋 遠藤 石割 松居 手塚

馬術部の転換期にあつて

平 中 三 彦

その二

第六障碍飛越直後の難しい鋭角回転から、功みに馬首を斜線上兎障碍に直面させ、「やれやれ第七障碍も無事通過出来た！」と思つた途端、「ヒィー！経路違反、失権です。」昭和三十五年七月、関西遠征の緒戦甲南大学との試合でした。

「経路違反」どうしてこんな失敗をしたのだらう。勿論、経路を途中で忘れてしまつて、上がつていたわけではありませんが、不思議と馬は我が手の内にあり、私も自信たっぷり間違つた障碍へ馬を誘導して行つたのですから、世話はありません。勝敗の帰趨は自から明らかです。自分のチョンボで大切な緒戦を失つたのは、やはりやりきれない気持ちでした。いや、全敗を喫した責任を・・・等と殊勝な気持は毛頭ありません。只、暑さの折から、一寸頭を冷やしたかつたのです。

その三

「アルバイトのお給料です。」と、菅原さんから袋を手渡されたのは、昭和三十四年の秋、私が主将になつた間もない頃でした。「私、都合でバイトを続けら

れなくなつたのです。馬術部で仕事を引継いで下さいませんか。」と彼女が言いだしたので。僕は自分の耳を疑ひました。我々交替したばかりの新役員は、馬術部の行事を種々計画していました。「出来そうなことなら何んでもやってやろう！」と張切つて居ました。アルバイトもその計画の一部でしたが、馬術部から具体的な仕事の司令はまだ出されては

いなかったのです。残り少なくなつた部生活を有意義なものにしようと、山本さん、五十嵐さん、島原さん、藤田さん等々、卒業を来年に控えた女子短大の部員達が、計画をたてて府中の競馬場でボニーの世話をする仕事を見つけて働いていたのです。三年間の馬術部生活で、自分達はこれ程純粋な気持ちで一生懸命奉仕したことがあつたのだろうか？僕は感激しました。そして利発で一途なお嬢さん達の好意を喜んで受けとり、馬術部の仕事として、ボニーの世話を引継ぐことにしたのです。

その四

人間、渦中に身を置いて事を処するに常に冷静且適正な判断を期待するは不可

阿部先生の思い出

岩崎 修

部生活四年間の中には数限り無い思い出が有ります。北海道、琵琶湖、大室高原での合宿、四回の関西遠征、破傷風で死亡した青幸号、青波で踏んだ乙馬場、関東二部リーグ戦の準決勝で東大に負けたくやしざ、網島への馬場移動等、悲喜こもこもです。

さて、ここでは私にとって部生活の中に忘れる事の出来ない人についてお話をしたい。その人ほ調教師の阿部先生です。阿部先生には高校時代からお世話になり

多くの事を教わりました。先生といつても特別きどつた附合いではなく、むしろ酒飲み友達のような間柄でした。ですから先生と言うより阿部さんの方がびつたりします。又御本人も先生などと呼ばれる事を喜ばれなかつた様です。こんな具合に、阿部さんは一切取つた所が無くいつも物事に真剣で、素朴に取りくまれる方で、私にとつては馬の先生であると同時に、心の中の先生でもありました。馬を調教される時の阿部さんは、近寄り難いくらい真剣で、辛抱強く、そして、一際馬に妥協をしないきびしさがあります。阿部さんの乗られた後は汗びつりよりで、我々が狂つた様に馬を走らせて

も追つかぬくらい馬は疲れ切つてしまいます。軍隊時代、同僚から阿部は馬氣遣いだと言われたそうですが、その熱心さには頭が下ります。そんな阿部さんにも馬の他に好きな物が有ります。それはお酒です。真に酒の好きな方ですから、阿部さんから馬を教わる時は、酒を飲んで話を持ちかけるより他は有りません。部室内の阿部さんの都星で冷酒を飲みながらの話です。そこには馬を中心にした男だけの心の触れ合いしか有りません。いつか、いつもの様に酒を飲みながら話をしていた時、「岩崎、おまえ馬はどこで乗るかわかるか。」と聞かれ、私はとつさの質問に、阿部さんが練習の時に、口うるさい位脚を使え脚を使えと言つておられるのを頭に浮べ、「脚です」と答えましたが、「かなり自信を持って、」と「一はか、馬は頭で乗るんだよ。」と一蹴され汗をかいた事がありました。すなわち一馬力と一入力、力では馬に勝てない。勝てるのは人間の頭だけだと言われたのです。話ははずみます。阿部さんは、「馬に乗るにはまず真すぐ歩かせる事だ。その為には姿勢が大事、すべて姿勢が基本だ。」と、「はやる馬は手綱を引くな。」

能に近い事です。馬術部を去つて既に四年も経つた今日、現役時代の自分の行動を反省するに、意気込みばかり凄まじく随分と言減法に突走つたものだと、一人冷汗を禁じ得ません。三十四年十月の役員交替で、主将に任命された当時、馬匹の数は随分充実したものでした。それにもかかわらず、当時の馬術部には何か無気力な空気が充満しているのを感じました。「何かやらなければ！」先づ、男子部員の「宿直当番制」から始めました。これ迄、夜間の馬匹管理や、朝の飼付けまでも、調教師の阿部先生にまかせつくりだつたからです。次に全部員に責任担当馬匹を決めました。自校の馬をもつと良く知るよう努めるべきだと思つたからです。「愛馬袋を持つていない者は乗馬を禁ずる」と言う「お触れ」を出して、皆でにんじん袋を作つたのもこの頃でした。その年の暮、永年お世話になつた阿部調教師が青山を去り、横浜乗馬クラブに勤務される事になりました。こうして四頭の馬達は、我々学生だけの手に委ねられる事になつたのです。翌春、奥羽一の関で見付けた農馬を、青木緑鞍会長にお願いして、入手する事が出来ました。会長は、青光の名を下さつたのですが、皆は、その容姿から「ドタ」の愛称を授け、学生だけで調教を試す第一号の馬を迎へられました。新馬を得た喜びは幾歳月共に暮した愛馬を手放す悲しみとなつて返つて来ました。「育波・青影」の放出を決意したからです。その後、関

西遠征の際に関学の「月雪」を連れて帰りました。遠征の男子部員が一存で前ぶれもなくやつたことですから、当然先輩の大目玉を喰いました。おかげで「月雪」は我校伝統の名を貰えぬまま我々の仲間入りをする事になつたのです。「月雪」は咬癖がひどく悪名高かつたのですが、我校へ来て後すつかりおとなしい良い子になつたと、後年聞き及んで居ります。その夏遂に一大事がもち上りました。東都大学リーグ戦の為、馬共を引き連れて馬事公苑に居る中に、学校側の都合で、馬房への出入を突然閉鎖され、帰る家を失つた馬達を、その後二ヶ月余り、馬事公苑に預けなければならなくなりました。本当につらいジブシー生活でしたが、全員よく頑張つて持ちこたえて呉れました。網島に総合グラウンドより一足早く馬房が出来たのは、八月の終り頃でしたが、軟弱地盤のため、馬が歩けず、足がめり込むと言ふ具合で、石炭ガラを集めたり蹄跡を地ならししたりの毎日が続きました。皆実によく働きました。自分達の馬場で練習出来る有難さを身にしみて知っているからです。その間「青葉」が横浜乗馬クラブに移り、「青剣」と「青渚」が網島の仲間に加りました。新しい馬場で、新しい馬共を中心に、新しい馬術部が前進を始めたのです。後は次代に期待しています。親身に御指導下さつた平木コーイチや諸先輩方に感謝しながら。

欄筆



むしろ出ない馬は手綱をしめる。」と。「鞭を使う時は良く考える。馬が悪いのが自分が悪いのかを。」人に能力の差がある様に、馬にも能力差がある。調教はその馬の最大を引き出す事だ。「真の調教は自分だけ乗れる馬を作るのではなく、誰が乗っても乗れる馬を作る事だ。「自分がマスターしていない事を下級生に教えるな。」一障碍は自分が飛ばせるのでほなく、馬が飛ぶのだ。だから馬の飛びやすい様に乗れ。」等々。これは教わった事のごく一部です（しかし私は話を聞きながら、人生の訓話を受けている錯覚を起こしました。しかし、それは



錯覚ではなく、馬一筋に生きている阿部さんの私への真の教えだと思えます。私は大学の部生活を馬術の大家になるべく送るのではなく、馬を通して、又馬術部の一人人として、最終の能力を発揮し、自分を向上させせることにあるのではないかと思います。この心構えが出来ていれば、部内のいざこざなど無く、統一のたれた運営が出来ると信じます。

阿部先生の略歴

山形県の鶴岡に生れた阿部先生は、小さい頃から馬に乗って遊んでいたもので、大正七年、軍隊に入った時も騎馬隊に所属した。三年間の軍隊生活を終えた後、昭和十四年の初めまで十七年間というも連隊で新馬調教に専心す。

十四年から東京乗馬倶楽部に所属し、ここに二十年五月半ばまで居たが終戦後は馬車ひきをしていた。世の中が多少落ち着いてきた昭和二十三、四年頃井上乗馬倶楽部より要望され、我部のコーチとなる昭和三十年迄調数を続けて来た。

我部には三十四年の暮まで部員及び馬匹の技術向上に尽された。三十五年の初め、平木コーチと入れ替ったかたちで横浜乗馬クラブに移られた。現在も元気で教官として活躍しておられます。

私が横浜の三沢グラウンドに先生を訪ねると竜天に乗って馬場でパツサージユ及びビアツフェを見せてくれました。

そのあとで埃りがひどいと言って土手に上り、当時の部員の情報や学生馬術の問顔点等話を下さった。

最後に最近は青学生が来ないけど暇をみて乗りに来るよう伝えて下さいと御っしゃっていました。

（石原）



馬具と乗馬服装の御用命は

(941) 3744番 イワサキへ

RIDING GOODS SHOP

IWASAKI

NO. 11 | CHÔME OTOWA BUNKYO-KU, TOKYO

TEL (941) 3744

我事において後悔せず

金子 埠 男

「我事において後悔せず」と、掲破した、武威の心鏡を、貴方はどのように受取り、解釈しましたか。今日の社会生活には、後悔したくなるような出来事が、多すぎるのが事実です。あの時、こう答えれば、氣まじい口争いにならずにすんだものを、とか、るの時、もつとうまく説得すれば、セールスに成功したかもしれなかつたのに、とかいつたような、小さな無数の後悔が、重なり合つて、我々は、しばしば堅い表情をして、家路につき、そして、酒に氣をまぎらわせたりする。そんな時に、この無双の剣豪の言葉は、我々の力になつてくれる。自分のした事に対して責任をもち、たとえ失敗があつても、いたづらに悔いたり、とらわれたりせず、自己の未熟として、それを真正面から、認識しようとする積極的な姿勢、一時的失敗も経験せず、大樹を得ようとする、合理的な考えをもつ人は、決して自分の目標を、つかむ事を知らない。失敗した時は、計画が健全でなかつたためだから、それを認めて、計画をたてなおし、自分のめざす目標に向つて、再出発する。目標にも到達しないのに、あきらめては、それは隠退者のする事で

ある。「隠退者には勝利がないし、そして、勝利者は、決して隠退しない。」このように考えてくると、この世の中は広く、楽しいと思われてくるので不思議である。不恩義に思つてはいけない。行動しなくてはいけないのです。私は、この事実に直面し、何よりも得難い教訓を得たのは、他ならぬ部活動を通じて初めてなのです。馬場の綱島移転の問題は、私が一年の後半の頃より話題になり、特に遠藤主将が学校側と馬房の青写真を見ながら交渉していた事を思い出します。不本意ながら、我々は、綱島に馬場が完成しない前に、六月の初旬、校内の馬房から、世田谷の馬手公苑の外來馬房に、仮居することになり、三十五年度の主将、平中さんは、この環境の中で、奪斗され、離散しかねない下級生を、よく指導されました。平中さんと、馬房借用の為、一升瓶を二本さけて、夜遅く、馬事公苑に伺い、又、種々管理面について、説教を受けたが、とにかく我々は、馬房さえ借りれば良いのだから、感情のはばむ余地はない。四日毎の借用願ひも煩わしいが、広大な馬事公苑で、練習出来るから、又新馬二頭の青剣、青渚にも、順致には最

適であつたらう。月雪、青光、青葉、青麗にも、緑の多い馬事公苑は、安息所であつたかもしれない。試験が済み、夏休みに入り、八月の二十四日、馬房の新しい馬術部も遂に、綱島総合グラウンドの馬房に移転することが出来た。然しながら綱島の低い土地柄と、土の性質上、馬場は、水捌が悪く、雨が降ると、田んぼより始末が悪く、蹄鉄はすぐ落ち、馬は跛行し易い。馬場の整地が一大問題である。まず砂と石炭殻が必要である。会計の高倉君の手元には、新馬購入の時既に、二十万円の金が放され、我々で金を工面せねばならない。バイトは強化され、部員は皆土方となつて、馬場の為に努力した。我々の内情を知り、藤根監督、諸先輩の援助で漸やく練習出来るようになったが、完全に使用出来る迄には、かなりの月日を要した。毎日練習の変りに馬場の整地、赤土を取除けて、硬土の上に石炭殻と砂利を敷く作業である。「将を射んとすれば馬を射よ」ではないが、学校当局を動かさねば、解決の糸口は見出せない。そこで大木院長、三浦主事に馬場の現状を説明しなければならぬ段階に入つた。快諾を得た。小砂利、石炭殻が、トラックで数台投入された。勝利を得たのである。整地している間にも馬房内の修理、馬柵を造り、その残材は障礙となつた。更に更衣室が藤根監督の手で二坪



位の部屋ではあるが、ヶ月、日曜日毎に來部され、時には会社を休み、部屋造りに専念、寝食を共にされた。馬術部の日の敵とも思われていた梅津教授から我々の活動に絶賛が送られた。怒る事は知つていても賞する事を知らない人(名誉毀損ですか?)から教壇で「他の部の模範である。」と云われた事は真に希少価値がある。六ヶ月間というものが練習には専念出来なかつたが、この時程先輩後輩が一心同体となつて一つに邁進した時は無いと信じます。迂余曲折しつつ、活動出來たのは良き先輩を前の楯とし、良き後輩は後ろのつつかい棒となつてくれたが為、そして盟友は、マスタ・マインド・グループとして我が馬術部時代を築いたのである。私の意図する事を充分に述べられないので残念ですが、馬術部の発展と先輩皆様の御健康を祈ります。

(昭和三十七年卒)



網島の労働者

高倉 彰

倶楽部に於ては馬場移転の問題等で苦しい時もあったが苦しい中には又忘れ難い色々な楽しい事もあった。部員及び馬匹のエンジニアとして次の様な事もあった。青龍と金子君の間にはこんな話がある。馬事公苑での試合を終え網島へ帰る途中、一人輸送中の彼が小用をもよおし多摩川で下馬した。そして青空を眺めながら悠々と始めた所、草を食べていた青龍が突如馬事公苑へ向け疾走したのである。その時の彼は？都合の悪い事に、出るもの馬のその如く、滔々と流れ出てやまず……。何でも後で彼の云う事は途中でやめて追いかけたそうだが。又青渚号については私にとつて忘れ得ぬ年月である。その青渚ですが、仲々茶目ツ気があり、放馬しておくとうまく人を追いかけたものである。部員会に連れて小走りに馬場を横切つて来た女子にジャレつき服をかんで引き戻したり、後足で立ち上つたりして半ペソをかかせたり、彼の勇姿を写そうとカメラを向けたら速足でとんで来てカメラをのぞき込み、どうしても写させず逆にカメラを取られそうになった事もある。又、傷が出来た時ヨイチンをつけるのに暴れて近寄せず、為に水鉄砲でついたりしたものです。数

あるエンジニアの中でも合宿に於るものは沢山ある。確か二月頃だったと思う。合宿中に半数だけ一日帰宅した事があった。そして再び合宿に入る為馬房へ戻つた所、留守番の全員がヘドを吐いて倒れていたのである。その時わずかに正気だったのは飯田君だけだった。悪臭が鼻をつき、部屋は一面吐物という有様、長靴のまま上つてシャベルで八ケツに取つて仕末したり、帰宅部隊はサンザン。ズボンのまま小便「ようとする奴を脱がせてさせてやつたり、愛馬と一緒に寝るんだとわめく命知らずの奴を懸命に抱きとめている内にヘドをかけられるし、便所へ行つたまま帰つて来ない奴を迎えに行き、ケツをたたいて何とか立たしてやつたり、とにかく寒さも忘れて必死の看病「？」だった。それでも全員翌朝は日課通り練習を行つたのは流石である。これは全て、張間先輩の成せる業で、是非一度御恩返し「？」をさせて頂くと思つている間に卒業してしまつた。我々の時代には馬場の移転があつたりしてその際の苦労話も多い。が特別これといつて取り上げるものは無い。それは全然苦労があつた為、どれを取り上げて良いのか判らないのである。学院のグラウンドを追い

出される様に出て馬事公苑に間借りした。電燈も無い暗い馬房、人間はテントを張り、野宿同然の生活、雨でも降るものなら、布団はぬれ、ついには捨てる仕末、意地悪な某先生に「馬場を使うな」と云われ、未だ誰も居ない早朝にコツソリ使つたら、草を刈るな、馬を木につなぐな等々、やかましく云われ「糞親父畜生！」と腹を立てながらも、行く所のない悲しさ、必死に我慢したものである。そして待望の網島へ。だが待つていたのは赤土と粘土で、ドロドロの馬場であり、電気も水道も無い馬房であつた大きな期待を持つて移つた網島、だがそれは見事に裏切られた。粘土質の土の上に赤土を盛り、砂をバラバラと形ばかりまいただけの馬場、雨が降ると足がめり込み、果ては蹄鉄まで取れる仕末、とても練習出来る状態ではなかつた。学校側と交渉してもラチが明かずついに自分達の手で、という事になり、改善というよりむしろ「馬場造り」が始つた。まず上に飾り物の様にまいてある砂が、それでも貴重なものとして、シャベルですくい取られ片隅につまされた。その下に盛られた赤土は掘り起こされ、全部外へ棄てられた。そうしてまがりなりにも整地されていた馬場がアバタ面の様になつた時、先の事な思うと練習どころ



ではなかつた。だがそう言つた障害にぶつかつた時、我々の若さは強味だつた。排水を考へて多くの暗渠を造り、ローラーをかけたとか使用出来る様にしようと思命だつた。一方その間も学院や縁故会に御願いしたおかげで石炭ガラを入れて貰える様になつた。だがタンブカーの運んで来る石炭ガラは悪く、大きな塊ばかりであつた為一つずつ丸木で叩きつぶして使わなければならなかつた程で部員は学生である前に労働者であつた。それは朝暗い内から始まり、日が暮れるまで続けられた。疲れてそのまま馬房に泊る事も多くなつた。そんな時ローソクの下で愛馬と語り合う事は我々にとつて何よりの慰めだつた。そんな頃こんな話もあります。帰郷していた君が久し振りで馬房を訪ねようと川の所まで来た所相変らず皆が土方にはげんでいるのを見て、あわてて引き返したというのです。そんな気持が理解出来る程ついでに毎日でした。とにかく身体はガタガタ、某君など渋谷行き電車に乗つたに気がついたら横浜だつたとか。又、君の様に夕方になり疲れたので一眠りと横になつたら、次の日の夜まで眠が覚めず完全に一日寝てしまつた奴も居た。今考えると、よくも身体が続いたと思う。この間、藤根監督や平木コーチの御力添へ、御教示は、

馬 歴 六

非常に有難いものでした。そして何とか馬場らしきものが出来上ったのです。これで馬術部が一段と発展する基礎が出来たと思うと、この苦しい時代に部員であつた事にむしる喜びを感じたのは、おそらく私だけではなかつたと思います。そして馬場完成記念として行った部内対抗の楽しかつた事！「一番Aチーム、堤君、乗馬青剣号！」という声

創立四十二年と聞き驚きました。大先輩の青学馬術部、僅か一年半の部生活だつたけれど他の全ての事が霞んでしまう程に印象深かつた短い楽しい生活、真冬の五時起床は今考えるとゾツとするけれど、あの頃は少しも苦にならず、休講ともなれば大きなバツクを下げて東京乗馬とか府中、中山の競馬場へ行き、次の授業までで大急ぎで渋谷の駅に駆帰り、団体戦に出たくて男子に試合を申し込んだり、上級生と意見が合わずポロポロ涙を流して譲らなかつたり、とにかく色々な事をやり、誰よりも楽しい学生時代を送つた馬術部。心から信頼出来る友も出来側に居るだけで気が和らぐ馬とも知合いになり、又親程に年の離れた阿部先生や諸先輩とも対等に語り合える等、趣味で結ばれた人の有難さを教えてくれた部。

五 十 嵐 豊 子

が、今でも耳に残つて居る様です。そして全部員の気持を代表するかの様に、笑顔で颯爽と登場した彼の姿を、時々フツと思ひ出しては、心の中で「ニヤリ」と笑い、「よくやつたなあ・・・」とつくづく思う昨今です。

〔昭和三十七年卒〕

機械でなく、生物を相手にする特異さの為、馬と人、人と人がいつまでも離れられなくなり、気遣いの続出する部。私もその末席を汚す一人となり今年で丁度六年目。卒業した頃は、せめて五年乗つて少しでも面白さが解つてから止めようと思つたのに、この分だと十年乗つて少しでも動かせるようになったら止めよう等と思う事もしばしば。卒業してアパロンで乗り始め、競走馬上りの元氣な馬に落される事数え切れない。一年間怒鳴られ通して二年目にして平木先輩が来られた時は本当に嬉しかつたけれど、先輩の乗る馬が鼠の様にすばしく、これの下乗りでも散々振落される始末で、馬場荒しに行つて居るような毎日でした。でも翌年この馬で東京大会に優勝出来たのも新馬の時に乗せて戴いたお陰と感謝して



ます。馬場に出る予定が大会前日に障壁にも出ると言われ、それなら以前乗つた馬で出ますという事になり、一ヶ月振りで障壁を飛び、試合当日平木さんにコーチを受け、三位で予選を通過し決勝でも調子良く飛び、大きなカップを買いました。これが東京での最後の試合となり、新潟へ戻り、山口国体に行き残念乍ら予選で落ち、来年こそは絶対決勝に残りたいと平木さんにわざわざ新潟まで来て戴き嵐の中で教えて貰い、新潟国体では運よく複合で四位入賞がかない、東京大会と言ひ国体と言ひ良き先輩に恵まれた有難さをつくづく感じました。私の六年め馬歴、これも皆青学馬術部に席を置いてこそ続けられたのだと思ひ、良い先生、先輩を持つ事を感謝致します。

〔昭和三十五年短大卒〕

新馬の時に乗せて戴いたお陰と感謝して



網島に新しい馬場を得て

水 島 道 子



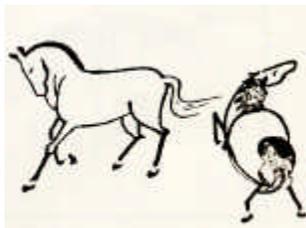
水島 原田 西谷

早いもので、私も短大馬術部を卒業してもう三年半を迎えようとしております。私の入部当時はまだ、網島馬場の事など想像も及ばず、現在体育館を建築中の所に馬房があつて、植込みになつてゐる所からずっと図書館の手前までが体育館のグラウンドになつていて、そこが私達馬術部の唯一の練習場でもあつたのでした。馬場とは言つても名ばかりの、ただ広いことだけが取柄の練習場でしたが、張切つて入部した私の心は希望に満ち溢れていたからでしょうか、全ての物は素晴らしいとて印象的でした。そして初めて馬に乗せて貰つた時のあの感激、今になつても決して忘れられません。お世辞にも颯爽とした姿ではありませんでしたが兎に角得意で、少しも恐くはありませんでした。でも馬場ではありませんから周囲には柵も何もなく、手綱さばきもなく知らない私達一年生は、列から離れて図書館の近くまで連れて行かれてしまいこわい上級生には怒鳴られるし馬は少しも言う事を聞いてくれないうし、本当に情けない思いをした事も度々でした。又部屋は独立したものでなく、馬房の一部を仕切つてあるだけで、薄い板一枚を隔てたお隣りには私達の愛馬があり、いななき、そして蹄を鳴らしているのです。

その申し訳ばかりの境の板も所々に穴があいており、その穴は冬になると一層大きくなるのでした。というめは、石炭が足りなくなると、皆が代る代るその破れ目から板を外し、火にくべてしまふからです。だから遂には大きくなつた破れ穴から馬達の脚が見え、尻尾が見え、時には鼻面がのぞきました。雨でも降れば、馬房の中と言わず外と言わずひどいぬかるみで、とても近寄れるものではありませんでしたが、それでも私達は十分、二十分のお休み時間をさいては馬房に集り、時の経つのを忘れて楽しい時間を過したものでした。ある時は馬を語り、ある時は恋を語らうと。今ではあの辺りもすっかり變つてしまひ、一体どこに何があつたのか皆目見当がつかなくなつてしまひました。でも目を閉じると独得の三角屋根の馬房や大きな二枚戸、そしてその中の薄暗い馬糞置場やそこにうず高く積まれた切り藁の山、そしていつでも手入れの時に馬をつないでおくのに便利だつた鉄棒や涼しい木陰のベンチなど、目の前にありありと浮んで来るのです。

も引けていませんでしたので、遠くの工事現場まで大きなバケツを一人が二つずつ持つて往復し、手入れをしたり飼付けを作つたりしました。大きなトラクク一杯の石炭ガラが運び込まれると、男子部員も女子部員も勇しくトラククに乗り、シャベルで石炭ガラを運び下しそれを全体に撒き散らして上からローラーをかける仕事に精出しました。大変な仕事だつたにもかかわらず、誰一人文句など言う人はいませんでした。きつと自分達自身の手で自分達の馬場を完成して行く喜びの方が強かつたからでしょうね。器用な男子部員達は暇を見ては障碍を作つたり、壊れた柵を修繕したり、周囲の溝を整備したり、果ては馬糞置場の小屋や合宿所まで作つてしまひました。こうして全部員が力を合わせて作り上げた私達の馬場を、私は心から誇りに思つております。網島にも長い間御無沙汰していますが、きつと立派になつてゐる事でしょう。近い内には是非立ち寄つてみたいと思つております。

〔昭和三十五年短大卒〕



馬と私

岡田 友美子

私が初めて馬に乗った時それは私が子供の頃デパートの屋上で象(勿論本物)に乗った時よりも遙かに強い不安と、そして感嘆とを感じた事を今でも忘れる事



1958 秋 . 福島遠征

井田 不明 不明 平木 育藤 酒井 後列 育藤 不明 高橋 石割 安藤 手塚 立村 前列 左より

が出来ません。大体私は東京で生れ東京で育った所謂都会っ子であったので自然とのつながりが薄かった。それでも私が小学生の頃には、この東京にも荷を引く馬の姿をよく見かけたものがある。私はそんな姿の馬しか実際には知らなかった野に遊ぶ鳥や畑を耕やす馬の姿は絵本の中に見ただけである。そんな私だったから学内で障碍を飛んでいる馬の姿を見た時、思わず目を見はって立ち止ってしまつた。「あゝこんな所に馬が……」。然し馬上には凛としてその馬を御している人の敢然とした姿がある……その時私は馬術部の存在を強く胸に焼きつけていた。それから数日後私は友人と馬房を訪れた。学内にあった頃の馬房は暗く、汚なく、陰気な感じだった。それに初めて身近に見た馬は随分大きく感じられ触れる事が恐ろしく側にも近よれなかつた。第一いつも馬房にたむろしている男子先輩さへ恐いと思つた程である。

その私が始めて練習に出たのは人よりも遅い五月に入つてからの事であつた。六時半集合に未だ覚めやらぬ面持で私が馬房に着いた時には既に何人かの人が見えていた。そして例め如く馬房内の清掃に取りかかつた。嫌な臭気の中でこの作業は、新参の私にとつて耐え難いものであつた。やつと終り一息つく間も無く練習に入る。霧雨の中で立ちこぼは辛い。けれど先輩の乗馬ぶりを見てるとそんな気持ちもふつ飛んでしまう。私の番になつた。喜んで馳けて近寄つた途端、「馬の後を馳けてはダメダ！」という大きな声が飛んで来た。やつと乗れるという瞬間的な喜びで、私は馬の後を通ると蹴られるという第一原則の様な注意をすっかり忘れていた。がその時は運良く何事もなく終つたが後日そういう光景を目のあたりに見て恐ろしさを痛感したものだった。とにかくやつとの事で私は馬上の人となつた。今注意して下さつた先輩も皆、何だかずつと小さく感ぜられ、自分だけの世界がある様な気がした。しかしその自分だけという意識は度々破られた。勿論先輩の声によつてである。爪先内！踵下げて！真直ぐ歩かせろ！等々……。その注意に耳を傾ける事に専念するのが精一杯でとてもじゃないが馬を動かすという事は出来なかつた。第一長い間待たされて雨で湿つた身体は、寒さとも恐しさともつかない小さな震えでもつて、益々思う様には



動かなくなつていた。こうして私の初騎乗は、終始馬に乗せられていたという事で終つてしまつた。だが地上に降り立つとあれ程の震えも止まり、又乗りたい気持で一杯になつたから不思議である。それにその後には更に辛い事が待つていたのである。何が更に分らぬままに膝を曲げて腰を下ろし背筋を伸ばし手を前に、という所謂前傾姿勢をさせられた。その辛かつた事といつたら……。馬上での数分間がまるで極楽の様に感ぜられた程だった。けれどとにかく私は言われるまに一生懸命頑張つた。私の初練習はこうして夢我夢中の内に終つたが後に残つたのは、これからずっと馬に接する事が出来るといふ喜びとある種の期待であつて、辛かつた事など問題にはならなかつた。現在私は自分の青春の思い出に馬が介在する事を満足に思つている。人各々に青春の思い出につながるものを持つている事と思うがたとえそれが何であれ、それがその人の心を生涯あたためる存在であつて欲しいと思う。「馬も又良きかな。」である。

(昭和三十七年短大卒)

おんま ちゃん

児 玉 京 子

我々が大学にいるのは、スムーズに行
つて四年間、部生活を経験する皆さんな
らば、短いと考えるのではないでしょ
うか。卒業後は部の生活からも離れてしま
います。部に於ては、一部
分的なものを知るにすぎま
せん。この際、部創立四十
二周年を記念すると共に、
部史を編算することは有意義
な事と喜んで居ります。

先ず物事に、方針・目的の
確立と発展を望むならば、
その歴史を知らねばなりま
せん。

私が馬に乗りたいたいと思
いはじめたのは、小学生の頃
でした。その頃は西部劇の
ブームの頃で、情緒ある西
部劇が上映されていました。
活劇とすばらしい音楽、そ
して馬です。カウボーイと
馬との一体の生活です。こ
れにものすごくあこがれました。何かあ
ると馬の話ばかりするので友達の間で
「おんま」ちゃんと呼ばれる様になりました。
これがだんだんつり大学受験の時、
馬術部のことを念頭に学校を選んだくら
いです。私達が入学した頃は、学校内に



馬房があり今の法学部前の庭で乗ったも
のです。身近かな校内に彼らと雑居して
いたのです。馬と人間、そして人間同志
の心と心の通い合い、これは他の運動部
と違い対象物が生きも
のであることが、いつそ
うの修練を我々にあたえ
てくれます。我々の在学
中に於いては、馬場の移
転等があり、近代的に発
展した時でしたのに、部
の為になる様な事が出来
なかつたと思うと非常に
残念です。

同じ目的と同好の人達
の団体です。皆さんが仲
良く一緒に成長できる場
として運動部らしい規律
正しい豪快な部となる
様努力して下さい。

（昭和三十七年短大卒）

にきびなら

はつとでたり、すぐビクラ
ニキビはひろがらないうちに、なや
のが大切で、つぶさないで、きれ
に洗って、ニキビの頭にビクラを
オンオンとつけて下さい。三〜七日
ほどでジーンがとれ、おとさないめ
らかな肌になります。

新ニキビ治療薬

ビクラ

チューブ入り 100g

シミ・ソバカス・色黒・ニキビにビクラ石鹸

エーザイ株式会社

東京都文京区竹塚町 大塚・札幌・名古屋・福岡

大平期

思い思われ振り

× × ×

伊藤正昭

昭和三十八年～三十九年

平和が当り前に感じられる程落着いてきている今日この頃、学生馬術にも大きな変化が見られる。それは、部というものが近代的に組織化され運営されて来た事と、トーナメントを除けばすべての試合が自馬となってきたという事である。これは驚異の繁栄と言われた日本経済の発展が、貧乏の代名詞であった馬術部にも多小の余裕を生ませた結果に他ならないと思う。我が青山学院大学馬術部も曲りなりにも綱島に馬場と馬房が建設され、六頭の優良馬が揃えられている。発足当時の我々から見れば、ただただ羨ましい限りである。一応の成績は残しているものの、これだけの条件を、見事に生かされているというには何かもの足りなさを感じる。この太平ムードに溺れることなく、平木コーチという強大な支えがある故、この辺で一層の飛躍を望みたいところである



僕が馬と親しい付合になったのは、中学の一年の頃である。

年間わずか三十鞍程度でしたが、途中で止めもせずバレスへ通っていました。大学へ入ると同時に馬術部へ入ったのは勿論のことです。しかし、入部してまもなく青葉号にけられノックアウト。気絶したまま病院へ運ばれ、そのまま一月半というものベットにねたきりということになった。一月半と一口で言うけれど、ねたきりというのは全く長く感じるものだ。

その間、月雪号、青光号が入り、青影が去って行った事は部に入ってから初めて見る明と、暗であった。

入院中は、月雪にかまれた部員が毎日薬をもらいに来て、そのついでによく見舞に来てくれたものです。

この頃、馬場の移転が始まったのであるが、綱島に移る前に、馬事公苑に居候していたことがある。丁度つゆ時で、野宿していた斉藤と佐藤は毎日雨にぬれていた。この時に渚と剣坊が入って来たのである。

八月から綱島新馬場で練習を開始。部員数が多かったので上馬した途端にす下馬という声が聞こえてきたものです。一年の冬の合宿の事である。日曜日の

晩、張問先輩が差入れにお出でになり、それではと、僕と柴田克が食事の買い出しに出かけた。(その頃は僕と克の料理が上手くて評判だったものです。)

さて食事の段になったら、一寸待てと日本酒、ウイスキーの安物がテーブルの上にずらりと並び、かけつけドンブリ三杯と並々つがれたのを一気に飲み干した途端意識不明。

翌日、飲んだ者はキャップ以下全員前傾姿勢をやらされるハメとなった。下を向いていると、のどまで昨日のものが出て来そうになる。その苦しいことといったら。隅角に立っけていても空ばかり仰いで我慢していたが、さて馬に乗らされた時には、全く死ぬのではないかと思つたものである。

あの時程、張問先輩を恨めしく思つたこともないし、今に到つても恨めしい。後日聞いたところによると、八時頃帰還組が帰って来た時は全員手のつけようがない程酔っていて、お陰で彼らは徹夜で看病し、掃除をし、一晩中ストーブの照りで夜明しをしたそうだ。

その後、二、三ヶ月はそのドンブリを見ただけで気持が悪くなり、日本酒を断つという結果となった。これも張問先輩のお陰であると思っています。



1963年6月 東京大会 青渚号

二年生になると、一年生とよく飲みに行った。その頃木目は全然飲めず、女にお酌されてどんな気持ですか。そんなの不潔だ。なんて言っていたが、大竹はあの童顔で意外と好きな方で、どこへもついていった。＃僕は嫌いです＃とむつとした顔つきで付合っていた本目が、今じゃ随分変わったね。

八月の頃、提さんとカケをし、僕が負けたので飲みに行くことになった。(一)どうも飲む話しばかりで恐縮だが、丁度その日は台風が来た日で、横浜はすごいドソヤブリ。一、二、三軒とはしこで、四軒目へ回った頃には水が道にあふれ、ナイトクラブの玄関などは水びたし。それでも飲んでいたら、提さんの家が水びたしという電話があった。急ぎよ家に帰ることになったのだが、車が途中でエンストを起したので、面倒とばかり着物を背中にゆえパンツ一丁となった。急流のところではロープに伝わりして、午前二時頃やっとたどりついた。シラフだったらさぞ恐わかっただろうと思う。

三年の七月にキャップになり、それからというものは雨の日も風の日も休まず練習に通った。

初の国体に青渚号を連れていった時の事。斉藤・柴田克・他に付添として塩川、山田が同行したのだが、岡山美人にあえなく陥落ということになった。その中でただただ者に付添って、夜飼・朝飯をやっていたのが僕である。

宿舎から風呂屋までは二十分も歩かな

くてはならないのだが、普段減多に行かない奴が毎日通ったものである。番台と何気なく話しながら、横目でチラリ、チラリと隣りをのぞき込み、ニヤリニヤリしていたのが克と塩川。どうせ入ったのならと一番多く入っていたのが斉藤。

青渚号はコロコロと太り、又持つていった馬糧、乾草も全然減らず逆にふえて帰って来た。しかし青渚号は蹄葉炎の為惜しくも入賞を免した。

九月に関東学生自馬があり、青渚号、青武号、青光号、月雪号が出場した。

武がステイブルの途中鍵を切り、そんな気配も見せず好タイムでゴールした。その途端一歩も動けなくなり走路で夜明しということになったのだが、それにしても、最後まで走った青武の根性には頭が下がる。この青武は、アバロン大会で婦人サンジョルジュに初出場(平木さん騎乗)で優勝した。又、その日に青光号、青慧号が廃馬になった。前年のアバロン大会では青慧が、やはり初出場で婦人障害に優勝しているのは何んと皮肉なことか。

十二月に、青扇号、育潮号、雷神号を購入。

四年生の六月にトーナメントに勝残ったので、図々しくも十二月の決勝まで主将を務めることになった。

女子が、関・東・北戦で団体優勝、神奈川大会婦人障害の部で岸さんが一位、高橋さんが三位と活躍めざましく、男子も負けじとトーナメントに全力を注入し

たが、決勝で立教に敗れ一部昇格の非願は達し得なかった。

自分達が引退間際になると、四年間の色々の事が思い出されるが、これから社会へ出ていく為にも馬術部というものから、有形無形のもの得られたのではないかと思う。現役諸君も不平不満で部生活を送らず、下級生は上級生を助け、四年間しつかりやってもらいたい。

部を卒業することが、真の部生活であつて、途中でやめる者はたとえ一年二年やつたにしても決して部というものを理解することが出来ないからである。

この「いな」が出来る頃には、トナメントの為に練習も一段と熱が入り又、その前に数々の試合が行われることを思い合せ、それもプラスし、反省、研究し、現役諸君が一致団結して我々の夢であつた一部に上つてくれることを希望と致します。

(昭和三十九年卒)



日曜午後のひととき

石田謙三

第一部 忍びの者

月曜日の夜七時頃テレビを見ている人は御承知だろうが、時代劇だが西部劇だか判らない番組がある。白馬にまたがった剣士が颯爽と、軽速歩で駆つて行く。見ていておかしくなるが、馬に乗れるタレントが居ないからしょうがない。そこで馬術部出身のタレントでも出てこないものかと誰れしも考える。居た。ただ不幸な事に美貌とは、お世辞にもいえない顔だつたから、途中で下りる事になつたけれども、今日はそのお話。

忍者と書いても、近頃では誰れもニンジャとは読まない。しのびのものと読む。世をしのぶ仮の姿という訳だ。所が、現代忍者は忍んでばかりもいられない。忍者即ち英雄であり、英雄とは常にブラウン管に現われていなければならぬ。それはともかく、忍者ブームを造り出した『映画「機密剣士」』も、頭初は弱小プロの駄作であつた。従つて制作費もろくに出せない経営状態、しかし、そんなこととはつゆ知らない先輩達、馬に乗つて交通費+千五百円と聞いて飛びついた。秋も終りに近い頃だ。ロケは放送と併行して行われたから、今日は日光、明日は御殿場と移り変わる。おまけに山中では雪も降ろうというものの、寒さには

るえ乍ら、つくづくタレントの辛さを知つたとは後の祭り。それでも残る期待は一万なんぼの出演料と、画面での我が活躍、だがフィルムにはカットという手もあつたのである。勝手なもんだと怒るな友よ、おまけに出演料もバーだつたとは荒城の月ではないけれど、後に残るはただカツラ。この積る恨みと借金を如何にせんと足かけ三年柿八年、その所在を求むれど、天に消えたか、地にもぐつたか今もつて姿なきは、正しく忍者。

第二部 剣士

その者、網島でまた月雪という名君が牙を鳴らしていた頃、馬房のそばに五畳半のバラックが建つた。練習前城主の別荘として三十一日の日時と金二万両を費して、苦心の未完成した。

かくして、別荘での生活が始まつた。朝は練習開始まで高いびき、一分前から当番兵の秒読みで、定時には幽霊の如く馬場に立つていたというから、ディレクターとしての素質があつた事は疑いない。いやあれは三十秒前だつたとか、当番兵がさばをよんでいたから可能だつたんだとか、諸説はあるが、詳くは省略して触れないことにする。ともあれ「英講への脱出」なんぞと気取る輩とは、本質的、概念的にも異質であつたことは確

かだ。うん。

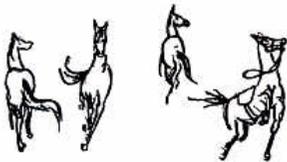
川端にオデン屋があつた。しよせん武士は商人には敵わない。後輩の分もまとめて背負い込んだ剣士、その返済の為にビル工事の穴掘りをやらされるはめになつた。たそがれの別荘に力無く帰毛した姿は、我々家臣の為とはいえ思わず口り。

だがここで同情してはいけない。翌朝の姿といえば、黒の袴に錆びた軍拍、大小二本のこん棒をたばさんで、遇角に仁王立ち。恐る恐る通過する我が背後に、突如襲い来る黒い殺意。イヤーツ。

あゝ、だが剣に立つものは剣に亡ぶ。目には目を、歯には歯をだ、我が調教の甲斐あつて、名君月雪の六体の前歯は、不意に彼の横腹を、ガブリとはかり咬んだのだつた。パンザイ。

まことに下克上の世の中、城は落ち、名君月川雪康もすでに亡く、げに夏草や強兵共が夢の跡だ。

(昭和三十九年卒)





左より
齊藤 (青渚号)
岸 (月雪号)
石田
佐藤 (青潮号)
伊藤 (青扇号)
小野崎 (青藤号)
渋谷 (雷神号)
高橋 (青武号)
左より

祝

青山学院大学体育会
馬術部創立四十二年記念

西伊豆観光株式会社
武蔵野観光開発会社

山本盤彦

タアちゃん ! コンパンワ

岸 祐子

タアちゃん今、何しているの？ いつもの悪い癖、マセン棒でもかじっているかな。それとも、お隣さんとやりあっているかな。それとも、オセンチになっているかな。日高牧場でのありし日でも思

い出しているかしら。ともあれ、体だけは気をつけてほしいの。持病の腰の痛みの方、いかが？ 何しろ人間様は食べさすだけで清いっばい。自分の体は大事にしてね。タケ…。いつ呼んでも懐しい。

お前がかの網島の地に雪ちゃんと仲良く着いた時、確か私が二年の秋。それにしても、



右端が筆者 青武号

あのちくこのう気味の雪ちゃんとは短いおつきあいだったわね。お前は腰が弱い弱いと言われながらも、良く辛抱強く我慢したものね。もう三年になるかしら。今じゃ、渚の次に古株ですものね。お前が来てから、直ぐに馬匹になった私。卒業するまでよくつきあってくれたと思うわ。新馬だったお前の背にまたがり、恐れを知らない私。試合でずいぶん、暴れ回ったわね。ウフフフ。障碍では「昔はお前も特技としていた。第四障碍で失権。馬場では水勒で出場（タケ一頭のみ）、そのファイトを買われた。エヘヘヘ。でも四年の六月、お前で乙馬

場が踏めた時はうれしかった。でも成績は悪かった。お前は実に難しい馬だもの。卒業した今でも、お前に申し訳けないと思っているの。その点で。本当に。私が下手で御免なさい。そして四年の最後のアバロン大会。あの時は本当に御免。ガタガタのお前に乗るのはしびなかった。どんなにかお前のことで苦しんだか。その苦しみがお前への愛情となつて私に帰って来たのだけだ。でも他の人には計り得ないだろう。お前を腰ぬけ馬とけなされ、なんとくやしかったことか。皆が去った馬場の片隅で、どんなに泣き叫んだことか。その時、八重子が慰めてくれた。あの時は、私はタケ、お前のことで頭が一杯だったのね。みつともないけど。ほれ腰が、がくがくじやないか。足に熱があるんじゃないか。運動は無理じゃないか。でも、ともかくお前を出してもらえた私。とても嬉しかった。あの試合が終った時ほど、お前がいとおしく、頼もしく、可愛いと思えた時はなかった。あれほどの喜びを感じ得たこの私。幸せである。その一語に尽きる。もし周りに人がいなくなったら私はお前に抱きついて、ウオン、ウオンと泣けに違いない。事実、溢れてくる涙を下級生に見られまいと、あわてて馬を渡したものだ。相当苦しかったらうに、我慢してこの私のいう通り精一杯やってくれたタケ。試合場に入った途端タケの心の緊張感がタケの体を通して私には解った。あの時、あれだけのお前で出来れば私は今でも思い残

すことはない位だ。私がタケと一緒に婦人サンジョルジュに出られた事。神様に感謝します。本当にありがとう。負けず嫌いのお前だもの。他のどんな名馬にも負けるのはいやだったろう。それなのに、ましな成績をお前ではとってやれなかった私。お前がかわいそうでならない。血統がいいと言つては、網島ではねたみの種だったものね。お前の責任じゃないのに。本当に人間には、まるでネコよりもやさしく、おとなしいのに、仲間での対抗意識の強さといつたら、まず比べるものはあるまい。私はお前のその意地つ張りの所が好きなの。ソンとおつにすましたタケ。何と言われようが平氣の平ちゃん。腰の痛みなど、どこ吹く風。実にお前は偉い馬だ。私もお前のようにになりたい。お前から教わった事、あまり多すぎて、すぐには浮かんでこない。お前という馬を知り得た私。満足である。「馬の妙技、ここにあり。」という感。この気持、どんな偉いオリンピック選手にも負けやせぬ。「せめて気持だけでも」では、このくらいで。夢の中でお前に会いたいものだ。タアちゃん、おやすみ。

（昭和三十九年卒）

手綱をとってこれからも

高井 由紀子

大学に入學してから、私は如何にしてカレッジライフを「楽しもう」かと考えた。何か余りポピュラーなものでなく、大学生活四年間というものを有意義に過ごすことができるものを……というわけだ。申し訳ないが私はそんな動機で馬術部に入った。

入部届けを出した時、「さあ、これからが大学生活の始まり」だと思った。何か大学生活というもの、馬術部入部ということが、今までの生活の型を打ち破ってくれるような……想像もつかない様な魅力的な存在であったのだ。

だが、やはりここは大学の体育会であった。今まで私のしてきた事は趣味の範囲を出ていなかった。自分の為に何かすることはあっても、部の為、学校の為につくすということは初めての経験であった。又本当にその気持を理解することが出来たのは卒業間近か、卒業後であった様に思う。幸いなるかな、私の性質はいやなことはすぐ忘れてしまい、自分に都合の良いことだけが胸の中に残っている。今では私の頭は乗馬服もさっそうと、障碍を次から次へと飛越していく姿だけなのである。本当に楽しかった。心からそう思う。

二年間の青春時代の思い出

小沢 詔子

卒業後しばらくして秘書として電タに入ったが、秘書なるものは体力を必要とする。おかげ様でそれには充分耐えて行ける。又浜名湖へ社の人達と旅行した時、私一人さっそうと馬であちらこちらを走り回った。楽しかった。卒業して二年目になるが馬の事がいつもひっかかった。

知らぬ人に会うとすぐに馬の話をしてしまふ。まるで馬の事しか話題がないみたいには人は思ったであろう。

友人によく言われた。「馬面の人なんか選ばない方がいいわよ」と。それにしても試合などで御一緒した津軽華子さんも結婚される。おかげさまで趣味としての馬術が認められてきたようである。この辺で私も余り馬面でない、将来馬でも買ってやるよという男性にめぐり合わないものかと思っているが……。

これから先人生は長い。馬と遊ぶ機会もあるのではないかと。私は学生時代青山の馬術部員だったのよ」と自慢することのできる機会が度々あるだろうと思う。

〔昭和三十八年卒〕

馬術部創立四十二周年目を迎え、心よりお喜び申し上げます。二十何分の一しか知らぬ私ですが、時として伝統とかスポーツ精神とか窮屈になり飛び出したいくなった事もありました。しかしこれ程クラブに没頭したことは初めてです。

毎日毎日手のかかる馬という生きものを媒介として色々敬服させられた事もありました。一声で自信がついたりこわかったり、それでいて言つて下さらなかつたら物足りなく感じる平木コーチの御指導をはじめ、尊敬すべき先輩、信頼できる先輩、俊輩に恵まれたせいかすつかり馬にとりつかれてしまいました。

部生活は相当つらく感じましたが、富士の裾野を駆け廻ったり、合宿での楽しい思い出等もあり、唯夢中で過ごしたようです。私にとってその二年間はとても充実した期間でした。

勤めに慣れて来た今日この頃、向上心の不足を時として感じるがあります。こういうことに対して、スポーツというものは一番効果があるものですが、まして馬という複雑な性質を持つ生きものを相手にするスポーツは、向上心を養うのに最も適していると思います。それだけに馬に愛情を持つ様になり、馬術部にと

りこにされたのかも知れません。

この夏、暑さをのがれて山中湖へ行きました。その時車で通つた所が、あのなつかしい御殿場遠乗りのコースでした。最初の遠乗りの時のことです。行きは元氣いっぱいでしたが、帰りは疲れてしまつて馬車に乗つてゆられて来る中に、馬に乗つての一行と分かれ道ではぐれてしまつたのです。山の天気は気まぐれで、たちまちガスにおおわれ、二、三間先きを見るのがようやくで、方角など全然わからない。道についた蹄の跡を捜して、これは新しいとか古いとか言いながら、どうにか目的地に着きました。下級生の私には不安でもあり又ちよつとしたスリルを感じました。

山中湖に着くとお客を乗せる為の馬が居るのを見るにつけ、又機会があれば乗りたいという思いにかられる私です。

では馬術部の今後の発展を祈つて筆を置きます。

〔昭和三十八年短大卒〕

二 部 記

昭和30年迄は一部二部の区別なく活動していた。現在の状態では難しいかも知れないが練習等、合同でやろうではないか。

私が馬に乗った頃

秋 元 国 松

私が大学に入ったのは、昭和二十七年春の事だ。学校に入って真つ先に目についたのは、「馬術部員募集」の広告だ。

高校の頃から何か変わったスポーツをしてみたいと思っていたので、この広告を見て一も二もなく馬術部に入学しようとした。決心した。入部届を出しに馬小屋……失礼！馬房などというシヤレた言葉はトント知りませんでした……。そこいらの建築場から運んできたような板切れで作ったホントの小屋。嬉しいことに立派な馬が一頭居ました。

馬だ！

これが青峯を見た第一印象でした。商科一年A組一番、秋元国松。名前はおかしいが、A組一番とは縁起のいい奴だ。みっちり鍛えてやるよと云ったのは中島先輩でした。

部費は幾らであつたか覚えていない。入部金を取られたのは覚えている。馬房を別の所に移す為だと云っていた。この馬房は馬と馬具は濡れないようになっていたが、人間は傘がなくては居られなかった。

キョロツトも長靴も借りもの。その頃の馬場は昔の野球場の裏手で、ガケの下にあつた。練習時間は一人せいぜい五分

程度、乗馬や馬装点検に時間を喰つたらそれこそ練習の時間はなかつた。私が初めて馬場の土を踏んだのは五月だつた。晴れた空の下、自分より大きな罔う体をした、蹴とばされ、ばいちょ口といった動物に乗るのだ。嬉しいやら怖いやらハイ次！と中島先輩の声がかかる。

「エート、何ツツタカナ。」

「秋元です。」

「そうか、アキモト乗れ。」

「乗り方は分つてるだろうな、アブミの持ち方がちがう、イヤ早く乗れ。」

「誰かおしりをおしてやれ。」

「ようよう馬上の人となる。」

「その高いこと！」

「何してる、前へ歩くんだよ。歩かない？歩かせろ、蹴つとばせてやうのに。」

「何が何だかさっぱり分らない。アーア」

「何とゆうものに乗つてしまつたんだ。」

「コラー、何してる。馬が寝てるぞ。もっと早く歩かせろ。」

「お馬さんすいませんがもう少し早く歩いて下さい。」

「マキノリだ！きこえないのか、返事をしろ！」

「ハイッ、マキノリは知りません。」

「バカ！、それを早くいえ！馳け歩！」

号令をきいて馬が馳り出した。バツと私の体は宙に浮いた。空と地面が分らなくなつた。ドシーンと尻もちをついた。初めての乗馬、初めての落馬。

馬が前に止つて私の顔を見て、「スマネーナー」、そんな感じだつた。

青姫が入つた。馬は二頭、練習時間もいくらか長くなつた。

昭和二十七年の頃の馬術部は予算が足りず会計は四苦八苦であつた。どんな所金でもよけいに集めなければならなかつた。二部学友会に部として予算を取つたのもこの頃からである。この頃に居た人は中島貞夫、横川実、瀬島達栄、関島修一、板橋隆、小出由治と私などであつた。この頃は一部二部といつた区別はなく、馬術部の名のもと一緒に練習を行つていた。違つている点といえば夏休みは皆参加していた。それとても沈さんや堀内さんが一緒にめんどうを見るといつた、今から思えば一部とか二部とかいつたものではなかつた様に思う。私は数少ない下級生の一人だつたので馬房の手入れ、寝ワラの出し入れ等、仕事に追われてただ夢中で時を過ごしていた。

二十八年頃から三十年にかけて二部の中心として働いていたのが瀬島達栄さんだ。あまり暇のない人達のめんどうをよく見て、日曜日に練習をしていた。二十九年頃になると日曜日に試合をする回数が増えてきた為止むなく、二部在席者は東京乗馬クラブ、清風会を使って練習を



することにした。特に使用したのは清風会で、食糧事情も悪かったせいか、それこそヤセ馬にムチ打つ様な事もした。私がよく練習したのは今は無くなつてしまつたが、富ヶ谷地蔵という渋谷と代々木八幡駅の途中にあつた井上乘馬クラブでした。ここは現在横浜乗馬クラブに御健在の阿部先生が居られたところです。この方はその後我が馬術部に於いて、一度は駄目かと思われた青波号を立派に立ち直らせ、且つ我々部員に馬術の基本を再認識させて下さつた方です。

佐藤一貫さんや、青山の高等部から早稲田大学に進学した小林君なども来ていたと思います。中央大学が自馬を預けておりました。

花車という、青姫に良く似た馬が居てこの馬には良く乗りました、というよりは並足から障害飛越までこの馬に教わりました。私の家より歩いて十五分位なので朝が夕方に乗りました。今日は見てやらないぞ、と云われながらよく阿部先生には見てもらいました。常歩だけでもきちんとして来るのは、この頃

青嵐号
秋元
村上
瀬島
鈴木
阿部先生
橋村
波多野
青姫号
後列
不明
増田
森
横堀
黒川
前列
左より

頃の先生が、常歩が出来れば他の事も出来るとおっしゃつたので一生懸命に練習したお陰だと思つています。三十年は新入生が多数入つた年です。五月にオリエンテーションが深大寺で行われ、瀬島さん以下四名ばかりで遠乗り方々アツピールを行つたのが効果あつたと思われます。夏期の合宿のあと、山中湖畔でキャンプと遠乗りをしました。メンバーは瀬島秋元、森川、増田、森、他五名でした。二部々員を中心とした活動は地味でしたが、決して波乱の少ないものではありませんでした。

三十一年瀬島さんより私がバトンを引き受けました。難しい年でしたが森川君等の協力により一応無事大任を果し、次代森川君にバトンを渡しました。三十三年、三十四年、森川君、三十四年波多野君、三十五年、雪野君、三十六年、金沢君と年々有望な後輩があとを引き受け、法政二部、青山学院短期大学との定期戦を行つております。私の手元にある記録によりますと、三十五年十一月十七日に法政二部及び青山短大と試合を行つておりうちの二部が優勝しております。最初は一部、二部という事なしに育つてきた馬術部が、その後学部の違いにより全く離れてしまつておるのを見ますと甚だ残念に思います。いつの日か手を握り合つてゆるゆるの日を夢みて筆を置きます。

〔昭和三十二年卒〕

Maxintex

・舶来調服高級紳士服地
 ・全日本紳士服技術コンクール高松宮賞受賞生地





商会

千代田区須田町2-5
 TEL (03) 3261 0011

二部馬術部のあり方

二部馬術部主将

金山屯

その主旨

二部馬術部を云々するのは、非常にむづかしいとされているようである。従来慣例によってなされてきた二部馬術部も昭和三十八年十月一日付をもって部則が正式に作成され、それによって運営される事になった。

第一章 総則

第一条

本馬術部は、二部運動部の特殊性を考慮しつつ馬術を通して心身の錬磨をすると共に実のスポーツマンシップを学び部員相互の親和を図りつつ学生馬術に寄する事を目的とする。

第二条

本馬術部は、全て本学院建学の精神に基き、之を運営するものとする。

馬術を通して

馬術を通して云々、我々にとってこれ程責任の重い言葉があるのか、然し同時にこれ程やり甲斐のある、やり抜いて痛快なるもあるまい。一概に馬術と言つてもどの程度の事を言うのだろうか、高等馬術までとても手が届かない。だからといってただ馬に乗れたと言つて喜んで良いわけでは決してない。

馬術にも初歩から上級まで、そして人

馬一体の境地は無限と言つても良いのだろう。我々はその一步一步を努力して学んでいくより仕方がないだろう。そしてそこにはもうこれで全部学び終つたと言ふ事のない無限の世界がある事だろう。我々は週二回ではありながらそれ厳しい練習から様々の事を学び取つていくに違いない。

部員相互の親和を図りつつ

我々二部運動部め特殊性を考慮しつつと言つのは即、部員相互の親和をいう事になるであろう。かくも様々め環境を持つた部員がいる事は真に二部の特殊性であるうし、これ等の部員が各々の持味を生かしながら互いに理解し、協力し得るならこれ程意義深いものは無かるうと思ふ。定職を持つた者あり、バイトする者あり、果は親の脛を噛つて遊ぶ者あり、一心に勉学に勤む者あり等々、どれが良い、或は悪いというのではない。我々は男女を問わず、又環境の如何に問わず互いに理解し、協力し、統一されねばならぬ。そして統一された時のエネルギーは計り知れないものがある。

学生馬術の発展に寄する事

井の中の蛙であつてはいけぬ。今や我々二部馬術部がどんなものであるかを

知つた。我々はその誇りと自信を持つて対外的に活動せねばならない。デモンストレーションは何も馬装姿で東京を闊歩せよと言ふのではない。対外的に勝つ事、それも重要な事かもしれない。然しその根底に横たわる意義を忘れてはならない。我々は対外的に学びかつ、教え得る所は大いに教えるという謙虚な気持と、自信と誇りを持つて対外的な親和、認識を深めなければならぬ。その事こそ学生馬術の発展に寄することに他ならない。

建学の精神に基く

学長も言われている様に建学の精神ほキリスト教ではなく私学という事である。青山の学生はまだまだ私学精神が足りない様である。幸いにして本馬術部は私学の精神に基くとある事から大いに再認識し独立心に燃える青年たれと叫びたい。青年よ大志を抱けとは昔の言葉でほなく今も生々と我々の心を打つ。

終りに

石田がよく集団リードになる事を言う。自分はこの言葉には余り意味の無い

事のように思つていた。然し先日以来考える所あつてこの言葉を思うに実に温い人情味が感じられるのである。今や我々は従来の運動部形式、即ち主将独裁、上級生絶対というものに疑問を持つたものである。主将個人の主観により全てがなされてはならない。上級生は虎威蔵を借りる狐であつてはいけない。本当に人間性にてで下級生から信頼される上級生でなければならぬであらう。集団リードを採用するとかしないとか言つてではなく、この言葉は今後の運動部のあり方を暗示しているのかも知れないのである。



兎にも角にも伝統あるこの馬術部、統一あるクラブとして定評のある本馬術部。短いながらもこの馬術部生活は我々に多くの事を教えて呉れるに違いない。我々はこの生活を疎かに過してはならないであらう。

高等部記

中等部とっていた頃より大学との接触は密である。彼等の馬に対する純粋な態度は好ましく、部昇格に一層の努力を望みたい

青年淑女の集りて

昭和三十六年卒

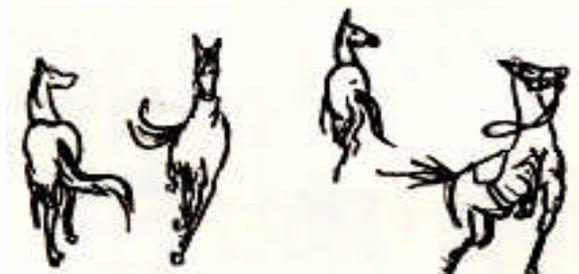
岩崎修

母校の創立九十周年、そして馬術部四十二周年を心から祝福します。

私も丁度十年前、青山学院高等部に入學、まだ田舎臭さの抜け切らぬ時で、フチの長い学生帽をかぶり、およそ青山学院とは縁遠い場違いな感じを受けました。馬術部にお世話になったのもこの時でした。当時は部員といっても鬼頭キャプテン以下小林、長谷川、羽入そして私の五人でした。練習も週二回、しかも馬は大學と共同で青妃という老練な馬一頭でした。こんな状態で満足に練習もできませんでしたが、それでも時間の許す限り皆で一生懸命やりました。当時大學は東キヤプテン、現平木コーチ他二十人近い部員を擁し、高等部を含めて二十五人余り、そして馬はただの一頭。現在では想像も出来ない事ですが事実でした。そのうち青翠、青波、青嵐とふえましたが入れ替りて二、三頭を維持するのが精一杯だった様です。やがて私も三年になりしかも同年では一人というわけでキャプテンを引き受け、又新任の松本先生を顧問に迎え、部員数も十人以上に増え一応部の形が整ってきました。(参考の為当時のメンバーは、早川、立花、沢口、屋、菊地、高橋、二年河合、川上、山口、木村の十

二人。)

夏休みには高等部として初めて合宿を學校のクランドで行い、すでに井上乘馬から調教師として迎えた阿部先生と先輩の小林さんから指導を受けました。実際の程は想像にまかせるとして、私も含めて皆真面目な青年、淑女の集りで今でも自慢出来るものと思います。卒業後二年目に部から同好会に格下げされ現在に至つておりますが高等部馬術部も最近では部員の数も増え、又先輩も多くこの機会に伝統ある部め再建を願ひ、馬を通じて高校生らしく発刺と真面目な交友を持たれる事を心から希望します。



部再興を願って

三年 真木 康 弘

青山学院高等部馬術部、かつては関東高校馬術トーナメントに放ける準優勝という輝かしい伝統あるクラブでしたが、ここ何年間は馬術部の顧問をなされて来た松本先生の御努力も空しく部員不足の為同好会として無活動の状態で存在するにすぎませんでした。しかし乍らこの沈帝期を破って馬術部再興を願う諸先輩の志を受け継いで活動を開始したのは一昨年の四月からの事です。活気ある十六名の部員によって馬術部同好会に至る一歩を踏み出したのでした。

活動状況

四月二十二日 国体高校貸与馬予戦
九月 十四日 関東高校馬術連盟加盟
十月 一日
十月 十九日
十月 二十八日
対成城戦 四名戦
対青学大二部戦 五名戦
対数大附属校戦 五名戦
十二月十九日・二十五日 合宿（綱島）
十二月二十七日・二十九日
関東高校馬術トーナメント
二月十日 対成城戦 四名戦
以上が主な活動状況ですが、関東高校馬術連盟加盟の事より説明いたしますと、

元来馬術連盟には学習院、慶応、成城、成漢、早稲田学院等十三校より成っており我高等部馬術同好会は十四番目として加盟したわけですが。馬術連盟主催で加盟記念を開いていただき、各校の馬術部員に新しい青山学院高等部馬術同好会の門出を共に喜んでいただき、新たなフアイトが沸いた記念すべき日でした。その後練習を重ね、初めての成城戦には初試合の為に皆少し上って未熟な点が多かった試合でしたが、多くの事を学び取った有益な試合でした。第二戦の対青学二部戦は前試合での経験を生じた善戦でした。教大附属戦では、相手校が清風会で練習している時の理由もあって破れてしまいました。この苦い経験は十二月に行われたトーナメントに於いて遺憾無く発揮されました。

踏み出しました。そして文化祭終了後は十二月のトーナメントを目指して練習に練習を重ね、合宿中は午前は綱島、午後は清風会、横浜乗馬、東京乗馬、アバロン乗馬学校と一日に二鞍は確実に練習を行いました。その努力はトーナメントで報われました。まず第一試合では強敵学習院高等科と相対し、初の大会にもかかわらず健闘してこれを退け、第二戦教大附属高校を勢いに乗じて連覇し、第三戦成城学園高校では健闘空しく破れてしまいました。続いて敗者復活戦では法政二高と対し若干及ばず再び敗北を味わい、結果としては五位になりましたが、我々にとつては実力を充分に発揮した好試合だったと言えるでしょう。

八月 一日 対名古屋学院戦
九月 一日 団体関東地区予戦（貸与馬）
〃 対神奈川
九月 一日 団体東京都予戦（自馬）
十八日 対青山学院大学二部戦
十月 一日 四校オープン戦
成城、日大、農大、青山
十九日、二十日 アバロン大会
二十八日より 国体出場（二名）
十二月二十五日・二十七日
関東高校馬術トーナメント。
一月二十六日 女子四校戦（日大馬場）
〃 白大・成城・成蹊・青山
二月十六日 東西対抗（名古屋）
まず新入生十五名を部員として迎え、二十四名となりました。そして高等部馬術部発展め為に、大学馬術部の練習に加え、いたただき、「土」、「日」は綱島で又「火」には東京乗馬で練習を行っています。
関東選手権大会では、これに備えて期末審査終了より男子は強化合宿に入り、苦しい練習の毎日でした。そして十八日、十九日の試合には苦しい練習の成果が実つて、鏝上げ予戦に匹名中三名が予戦を通過し、翌日十九日には障害飛越において、一位、二位、四位を獲得出来ました。この大会で十位迄の者は関東選手として後に行われる東西対抗に出場できるので。又一位、三位迄は団体東京都代表となるので、九月一日に行われた関東地区予戦にも通過して晴て団体（山中県）に出場致しました。結果はほんのわずかの差で優勝をのがして準優勝となりました。

二年 弓 野 道 子

前年度に続き三十八年度の活動状況報告をいたします。
七月十三日・十九日 男子合宿（綱島）
十八日、十九日 関東高校馬術選手権大会、団体東京都予戦

前年度に続き三十八年度の活動状況報告をいたします。
七月十三日・十九日 男子合宿（綱島）
十八日、十九日 関東高校馬術選手権大会、団体東京都予戦

団体予戦に自馬で一名出場しましたが、惜しくも失格となりました。

その他のオープン戦では、

対名古屋学院戦 同点で引き分け

対青学二部戦 百十四点差をもって勝

四校戦 準優勝

アハロン大会 障害 八位

婦人馬場 三位

そして又十一月に行われた部内対抗は、大学の方々と共に和やかに、馬場、障碍その他種々と楽しく行なわれました。

十二月に入り、私達にとつて最も重要なトーナメントとなりました。その出場校は十二校で、結果は、試合前の練習も空しく六位になりました。

一月になって初めて、女子だけの試合を持ちました。男子には、馬輸送から使役まで世話になりましたが、成績はかんばんしくなく最下位でした。女子にとつて大いに勉強になりました。ところで、女子の出場試合は、ほとんどありませんので、女子の練習目標とするために、このような女子だけの試合を定期戦にしようと思つています。そこで、第二回高校女子定期戦を、九月に計画しております。その年最後の試合は、名古屋で行なわれた東西対抗試合でした。結果は、あまりよくありませんでした。

三月に入つて、強化練習が行なわれ、一年生は、馬術に関する一応の事を教わり、総仕上げ致しました。

昭和三十九年度

四月十八日 団体予戦鑑上げ

五月十七日 関東高校馬術選手権大会

五月三十一日 三校戦

七月二十八日〜八月二日 法政 青山 男女合同強化合宿

八月 九日 対オール関西親善馬場試合

八月十一日 対オール関西親善障碍試合

八月二十三日 対日大戦



八月二十三日 対日大戦

九月 二十日 高校女子馬場試合

今年の新人部員は、二十二名となり、旧部員を含めて三十八名の大家族になり、我々は、新たなフアイトを燃やしました。ところで、団体予選鑑上げには、三名

が出場致しましたが、惜しくも選外に止まりましたが、関東選手権大会に於ては、三位と八位に入りました。又、法政、成城の二校を迎えての障碍試合には、我々は、快勝致しました。

夏季休暇に入つてからは、自由練習の後に、引続き一週間の男女合同強化合宿に入りました。この合宿は、女子にとつて初の合宿であり、期待が大きかつた事は言うまでもありません。騎乗時間が、短時間だつた為に、皆、一分一分身を入れ、フアイトを燃し、充実した練習でした。一、二、三年の結びつきも深まり、この団体生活は、なくてはならないものでした。

八月に行なわれたオール関西との試合は、余りよくありませんでしたが、練習について言えば、申し分ないものと言えるでしょう。

この様な沢山の試合経験を通して、馬術の観念を深めるばかりでなく、他にいろいろのことを学びました。それは、これまでお世話になつた顧問の松本先生及び、今年度から顧問をなさつて下さる大鳥先生を始め、大学生の方々、又諸先輩の暖かい御支援の賜物と、感謝しております。今後は、一回一回の練習を充実させてゆくつもりです。よろしく御指導をお願いいたします。



御子算個人数の多少に拘らずお気軽に御相談下さい。

結婚式場 * 宴会場

日本料理・フランス料理

日本閣

本店 国電 東中野駅前 電話 (362) 8531 大代表

支店 国電 南柏駅前 電話 (67) 2765

タバコと喫煙具に関するお問合せは

煙草・喫煙具専門店

銀座 菊 水

東京都中央区銀座6丁目2番地
電話 銀座 (571) 0010番
(572) 3886番

校友は校友の旅館へ

加盟員はみんな青学の校友です。

校友の各種の御越しを御持ち申上げます。
各館のパンフレットも取揃えてございます。
御旅行の御相談は是非当連盟へ。

（ア）（ウ）（エ）（オ）

鬼怒川	あさや	鬼怒川	ホテル白河
伊豆	落合樓	伊豆山	ホテル
湯ヶ島	大月ホテル	伊豆山	さがみや
熱海	河口湖	箱根	松坂屋
河口湖	ホテル	芦の湖畔	松坂屋
熱海網代	さのや旅館	箱根	松坂屋本店
熱海	志ほみや	芦の湯	松坂屋本店
仙遊	針久本店	妙高	妙高ホテル
箱根	箱根甲子園	日光湯元	湯乃家旅館
仙石原	箱根甲子園		
元箱根	橋本屋		

東京都渋谷区緑町廿二

青山学院校友会内

青山学院
校友会 観光旅館連盟

電話 (03) 八六二八

校友の皆様には特に奉仕致します一度御試泊下さいませ

祝 四 十 二 周 年 に よ せ

遊 佐 幸 平 城 戸 俊 三
井 上 喜 久 子 岡 部 長 忠

学生馬術に望む

遊 佐 幸 平

この度青山学院大学体育会馬術部が創立四十二年記念を迎えた事は慶ばしい次第であります。

思い起こすに学生が馬術に親し始めたのは大正時代に成つてからでありその頃の練習は習志野騎兵学校という余りある馬匹と広大な練習場を有する学校以下数々の軍隊機関が学生に対し馬術奨励を唱えたおかげで今日の学生より恵れていたものでした。故に当時の学生の方が今日の学生よりは遙かに馬を動かす事に於いては、優れていたものである。(しかしながら、障碍飛越に於いては、当時は余り行わなかつたために今日の学生より若干劣るかもれません。)

今日の学生馬術を見るに予算の少ない故設備の不充分さ、練習者に比べて少ない馬匹数の為か進歩が全く見られない。しかしながら、進歩が見られない理由は確かに前述した事のためばかりであろうか？答は否である。それは今日の学生に欠けている事は、本を読まないという事である。昔の学生は良く本を読み研究し熱心であった。全てに……。私の望みたものはこの事であつて学生というものは頭の中に入れて、それを良く理解してから行動に移す事が大事である。馬術の本

を読み研究し苦学して練馬自得して頂きたい。芸術というのは、私は全てそうであると思つている。それと、練習者に比べて少ない馬匹数で困つている学校があるならば「ほとんどの学校がそうであるが」、私は軽乗 (Light) と云う練習法を提案したい。この軽乗と云うのは一頭の馬で十五、六人が短時間に練習が出来る方法で騎坐も強くなり乎衝感覚も覚えやすいものである。先ず一頭の馬を調教し馬の上に鞍をのせ鐙をはずして、調馬サクをもつて馬を誘導し、障碍物を飛び越させたりするのである。この方法を持つてすればこの問題は解決するであろう。

とにかく、良く本を読み研究し苦学して練馬自得して頂きたい。

これからも今まで以上に進歩する事を望んでお祝いの言葉とかえさせて頂きます。

東西の馬術

城 戸 俊 三

洋の東西を問わず馬を人の運搬具として長距離を走る為だけのものとすれば、馬に大した調教もしないで足りるとしたが、古くから馬は戦場で縦横に、自在に乗り廻し太刀、槍を振りかざして相手を倒す乗手の分身としたかに見える。我国でも昔から馬に乗るのは士だけであつたではないか、よし其身分の上下はあ

つたにしても馬に乗つての錬磨は戦場で役立たせる為の手段であつた。

ヨーロッパ大陸でも同様で馬の利用は戦斗の為で、それを有利にするには馬の調教をよくし乗手の思うがまゝに動くようにするのにあるからここに馬の調教の必要が起つて来る。即ち馬を動かすわざ、言い換れば馬術を理論的に導かねばならぬこととなつたと考える。

古代ギリシャ Xenophon (BC 四

四五―三五二) が出た。哲学、史学、軍隊指揮官として其師の大哲学者ソクラテスの業績を継いだものとして名のある人であつたが、「馬術」と「騎兵指揮官」の二冊を著のした。これには乗馬の選定馬の管理、馬の使役、調教、騎乗法等について述べていて、現在のわれらの知る所と変らない立派な意見であるが、これが世界で最初の馬術書で中世紀を経るまでは原典とされていたと觀察する。

中世紀 (三九五―一四五三) の馬術は、馬上で武器を使つての仕合、二人での競馬や狼等を主としたので一冊の馬術書も出なかつた。其後実用的な馬術許りとなつて長年月を経たが十五、六世紀となつて文芸復興が伊太利に起ると共に馬術も又伊太利で復古の姿を見たのは興味深く感ずる。

それは十六世紀の半ばであるが伊太利のナポリに同地の人ビニヤテルクが馬術教習所を創設して *Methodo* の原典を基礎とし馬場馬術の正しい道を教示した。これは世界で初めての馬術学校である。

この人に続きクリゾーと云う同地の貴族が馬術学校を起し又「馬術の原則」(一五五〇年)を著して高等馬術の正しい指針を示した。

今やナポリは馬術のメッカとなりヨーロッパの各国から修業に沢山の人が集り右の先生達から教育を受け各々其国に帰つて伊大利式馬術を伝へたのであつた。それでヨーロッパ各国では右の両氏を馬術の始祖とさえ呼んでいる。

然し国民性や其国の産馬の特質、好み等の影響で伊大利式も少しずつ変化して其国の馬術となつて行つた様に見える。

先に特筆すべき事は十八世紀に入り仏國にグリニユールと云う傑物が生れた。

馬術の技倆は特に秀れ学識も又豊かな人であつたが一段と従來のやり方に改良を加へ一派の馬術流儀を起した。共著書に「騎馬術」(一七六八年)と云うのがあつて内容に馬学、衛生、管理、使役、馬具、調教、御術、高等馬術等に互つて詳論しこれが現在のフランス流馬術の新原則となつた。

仏國には乗馬を有す軍隊は無くなつたがこのフランス流馬術は失うまいとして昔からある陸軍騎兵学校(一八二四年創立)に馬術教官だけを残り伝統を維持しようとしていた。文化とはこんなものかと考えさせられる。

ウィーンの乗馬学校、白馬奪回作戦、其他映画で見るオーストリアのウィーンに現存する高等馬術の殿堂のシユパニツシユ・シエルレは其創設がカール六世(一

一七一―一七四〇年)時代で其帝王の馬術の先生は伊大利で修業したレグンタールであつた。現在の校長ボダイスキイ大佐はウィーン乗馬学校の馬の調教は前記グリニユール方式にならつていてと云つてゐる。ただ仏國流とこの学校の流儀では原則は同じとするも国民性と其用馬の質の違いから乗り様に差があるように觀察する。

独乙やスウエーデンの馬術家の馬術表現はウィーンの学校のものに似ているが独乙への高等馬術伝導は矢張り伊大利の学校修業者によつた。

然し面白いことは高等馬術の起源地伊大利に現在その香さえも見えず地上から全く姿を隠して仕舞つたことである。

馬術、高等馬術が本物であるべき処は何れの点に歸するののかと言へば、馬の自然を尊重し勢の良い歩き方を益々活発に歩かせ、前軀を起し後足の踏込を良くし後軀が下がり、馬の体に歪が無く真直で手綱の操作や体重と脚の操作に抵抗せず軟かに動く処にある。その結果を得る為には乗手は痲痺を起さず氣長に順序を追うて進歩を急がず、懲戒よりも褒め愛撫する方を多くするのがよいとされてゐる。馬は機械では無い意志を有つてゐる動物、可憐な大きな動物だとの念を忘れてはいけない。

英國には十六世紀半ばに伊大利人が数人招かれて高等馬術を広め、伊大判に九年も滞留して修業したニューキヤツスル侯等も帰國して伝導したが同国民に

は広まらず仕舞いだつた。これは同国人が *romanesco* を好み競馬が盛んであるのに圧迫されたのであろう。

さて最も興味あることは高等馬術を復古した伊大利に其姿が没した代りに発現を新たにしたのは伊大利式障害飛越である。創始者はカプリス大尉で、障害飛越の際馬の 態勢は頸を伸し竊く様に頭を下げ背を上にして起させるのが自然である。乗手は之を妨害してはいけない。今迄見る乗手の安全を保ちバランスを取る為め上体を後ろに反るのは不自然だ。早く走るのに乗手の重心が後ろにかゝるようではこれ又不自然だ。上体を前に傾けねばならぬと云うのが彼れの発見で其模範は伊大利馬術界が習う所となり、飛越の上達が著名で各地の国際競技会での成果の現れは各國保守派すら認める処となつたので飛越のやり方は皆伊大利式となつた現在の盛況を見るのである。二十世紀の初めになる。

我國古流の馬術は明治の初、軍隊がヨーロッパ風になつたので軍隊馬術は最初に後独乙のもの模倣し今日に至り在來の古式でも云うべき本邦固有の馬術の跡がたもなくなつた。

然しながら最も誇るに足るべきことは大坪道神が十五世紀の初に体系だつた馬術書を著したことであつて、其内容は前記グリニユールのものに似ているのであつて驚嘆すべきものである。又後其流をくんだ者は平和時代が永く続くに従つて互流、誤解、眞の馬術の根本を失う様にな

つたものもあるようだが、原則実施法等決して西洋のものに劣らぬものであることを断言して悼らない。

今日私達の馬の乗り方は陸軍の馬術教育の流れをくんでゐる。然らば我陸軍は何時其根源ともなるべき乗馬学校を起したのであろうか。

それは明治十一年(一八八八)で将校や下士官に馬術の教育を施しそれが軍隊に歸つて広めたものであつた。又後ヨーロッパの学校と同様騎兵実施学校となり騎兵学校と變つたが、騎兵本来の用具を教育するを主としたのだが中でも馬術を重要したものである。学生の馬術は今こそ仲々盛んになつたが大正の初から陸軍部隊の余暇を利用してもらつたのが始まりでこれが馬好きを沢山出す様になつたものと見てゐる。

ただ現在の処では各学校の乗馬部によい指導者があつたらどんなにが進歩するだろうと思ふ。本當にわかつた人に指導されることを望んでやまない次第で爲る。

馬術は単に馬を乗りこなすことは何人でも出来るだろうが馬を仕込む技倆を會得し始めて本當のものとなるものと信ずるので乗馬する人は宜しく調教の味いを得ようとして乗るようにして欲しい。

この雜稿を終るにあたりスポーツ馬術を楽しむ人々に希いたいのは馬は可憐の動物である。鞭の使い方に慮するようになせぬこと、馬の自然は活潑に歩くもの

だが弾力のない歩き方をさせぬ事、リズムが馬術に表現されねば価値の低いものになると鈍記されたいことである。

井上喜久子夫人

訪問記

今東京オリンピックを控え、お仕事に御家庭にお忙しいのにも拘らず毎日練習に余念なく励んでいらつしやる井上喜久子夫人にこの いなき の為になぞわざ時間をさいて頂き私達は中目黒のお宅へ伺った。午後七時頃でしたので丁度練習が終つてお風呂から上つたばかりとがですごくさわやかな感じがしました。憧れの方にお逢いしたので、心が落着かずワクワクするのを覚えました。

大正十三年十月三日東京三田で生まれ今のお家は三歳の時からいらつしやるとか。小学校から聖心で、その専門部の二学期（昭和十七年）の十二月に結婚をし男の子が生まれて間もなく御主人が亡くなってしまつたそう。その後昭和二十三年に再婚なさり、現在大学三年（早稲田）中学三年、小学校六年の男の子がいらつしやる（御子様達はスキーにこつていて馬はあまり興味がないとか。）

何時頃から馬に乗り出したのか？

両親が馬が好きだつたし家も割に広かつたため庭の片隅に馬二頭とロバ一頭、が居て幼時から自然に馬になじんでおりロバはその背に乗つたりして良き幼友達



だつた。そして正式に乗り始めたのは七歳の時からだとか。すぐ近くに東京馬術研究会があつたのでその久力先生に教えを頂き結婚まで熱心に続けた。鞍数は数えきれないが女学校時代夏休みには一日五鞍も乗つたことがあるとかで、自ら馬氣遣いと称していたそう。又その研究会が二十年の空襲で焼けたが、久力先生のお力で馬事公苑に行つたとか。戦後二十二年に乗り始め翌年の戦後初め、パレス東京大会に於いて乙で優勝した。時々パレスにも通つたが結局、二十七年までは練習にならなかつた。二十八年から本格的練習を始め三十五年まで、ユドラ号に騎乗した。そしてオリンピックで勝登号で出場すると決つてからすべて余裕のある練習をなさつているとか、

今迄の苦辛談は？

久力先生から、すべて馬から教われ、馬は楽しむものであり可変いもの、と教えられていたしこの長い馬歴で一度もこ

の原因で怪我をしたこともなく苦しかった事も無いが、今競技を控え精神的に一番苦しい時とか。

女子馬術に対する所感は？

昔は、女の子が馬に乗つたりすると子供ができない、脚が曲るといわれていただけ絶対的にそういふ事はないと実証しているし、全身運動なので健康的に良いけれど胃下垂になりがちであるが、これは病気ではないので何の支障もないからこれからも大いに女性には馬術をやつた方がよいとか。相手が生き物であるから他のスポーツにはない楽しみがあるし、神経反射作用が必要で馬の気持をつかむ事は人間のそれをするのと全く同じであるから殊に女性はやつた方がよいとのことでした。（意味深長・・・）

国際的観点に於て日本の馬術に対する意見

国際試合の経験はないが、今オリンピックに備えて昨年ドイツ・アーヘン国際馬術大会を見学に行つて全く失望してしまつた。何故ならドイツ・ワレンドルフ国立乗馬学校に一週間、その後フランスで五日間練習をしたがどちらの馬も唯の練習馬なのに水勒で歩、ビルエツトその他諸運動をやつてしまふという調教のよさだ。試合の時にだけ大勒を使用するのだそう。それにドイツ等諸外国では馬術家といへば一人が三頭位ずつ自馬

を持つているとか。技術的には日本の選手は外国選手諸選手に負けぬが、経済状態、馬費によつて現在雲泥め差がついてる状態なのだそう。

オリンピックに臨んで

馬に格段の相違がある為良い成績は期待できないが目的は日本の馬で全能力を発揮して如何に外国優秀馬に対抗するかにあるそう。今競技に騎乗する勝登号は山の天気のような気性で準備運動の時はずごく調子がよくてもいざ試合になると物を見たりしてガラリと變つてしまふが競技には精一杯乗りたいと強張なさつていた。又グループで批判すると効果があるとし、みるめ会 という外野的批判会が誕生し、会長井上さんで会員は東京乗馬の松平さんその他四、五人で組織されており東京乗馬の富永さんが写真係で試合がある度総動員され 激烈過酷なる批判を交換するとか。（遊佐さん等諸専門家からも好評を得ているという）井上さんも生れながらの才能ばかりでなく常にこつこつという細心努力をしていらつしやるめだなどという尊敬の気持で一杯になりました。

家庭に於ての立場

お手伝いのばあさんに家事のすべてをまかせており、朝は練習に、午後からは仕事に行かねばならないので子供の事はあまりかまう事ができなくて大変心苦しく思うけどなるべく家庭内の交流を計つたり、子供といふ時間を長くするよう努力しているし、周囲の人達が協力して

くれるのでこの状態が続けられるとか、
そばに二番日のお子様がいまして何やら
と内緒話をしてくれた。御主人、御子
達とはまるで友達のような関係で常に冗談
をいっ合ったり、スポーツ好きな明るい
雰囲気のお家庭であるとお見受けした。

これからも馬術を続けるかどうか
御自分は好きで続けたいが家庭、仕事があるし、やはり御主人、御子様達の為にも家庭を大切にしたい、しかし事情が許されれば続けたいとのことでした。

女子馬術家の大先輩として

学校を卒業してからもあらゆる困難を克服するが如く大いに乗って欲しい。その技術向上の為にコンスタントに、努力して乗らねば上達しない。

青山学院に対して

他の学校と比較してフアイトがあるし自分達で管理したり熱心である。悪い意味ではなく乗ろうという事に關して貪欲であるとかいうおほめの言葉を戴いた。又長靴をはかず手入れをするという様な無神経な事は決してしないよう。伝統的なフアイトがあるのでこれからもより一層頑張るように、しかし女らしい繊細さは忘れねように。乗る時は馬の性質を知っていた方が有義である。これは自分を知るといふ事に通じている。そして、フアイトがありすぎて小さな事に油断しないようにとの事でした。

インタビュアーをしている内に井上さんの飾り気のない優しいお人柄に触れ心暖まる気持ち一杯になりました。そしてい

るいろいろ話を伺う程、馬術に対する興味が湧き起つてくるのを感じました。インタビュアー後、昨年のドイツ遠征での試合練習風景、馬事公苑での強化練習の模様フィルムを見せて頂きとても勉強になりました。門の外までお子様とお見送り下さり、私達は頑張って下さいねとの励ましの言葉を戴いて、感激のいたりという思いでおいとましました。

(木所弘子)

祝詞

関東学生馬術協会

幹事長 岡部長忠

(学習院大学)

この度、貴校が創立九十周年記念を迎え、共に貴部が創立四十二周年を迎えました事は、大変喜ばしい事です。学生馬術部界にとりましても大変有意義な事だと思えます。

四十数年間もの長い間、貴部の先輩方が難障害を飛び越え飛び越えして作られた馬術を更に貴男女の手で又、後輩達の手で限り無いゴールに向って邁進されん事を望みます。

これからの学生馬術は、自馬競技に重点が置かれて行くと思えますが、最近の学生自馬競技を見ますと、出場選手だけ

の試合となつていている事が多く残念です。試合というものは、出場選手だけでなく馬の手入れをしなければならぬ下級生等一団となつて出場しなければたとえその勝負に勝つたとしても試合には負けたりに成ると思えます。真の学生スポーツという事を忘れずに我々は一丸となつて精進し学生馬術をさらに発展させて行くうではありませんか。

これからの貴部の益々の御発展を御祈りし、私の祝いの言葉と学生馬術界の抱負と致したいと思えます。

馬具の井川
最古の歴史・最新の技術・最上の品質

東京都文京区駒込蓬米町5番地

井川商会

TEL 駒込(821) 2568

馬術部の意義

主務
上野 圭一郎

大学運動部の一つとしての

我々馬術部の在り方

我馬術部も大学の体育会の一つとして存在する意義は原則として、学業の合間に皆で楽しむ運動団体である。・・・と云うのは或る多面の事実を表わした言葉であると思います。馬術部に学生生活をかけてあらゆるものを犠牲にして夢中になると云う事は一般的に言つて良い事ではない。学生としてもっとやるべき事があるはずである。

馬術がスポーツとして存在するならば健全な身体を作り、円満なる人間を作ると言つのも又事実である。しかし皆が言う様に「人格の高揚」や「人間形成」等即ち社会生活を円滑に行う為にこれをやると言つのは言い過ぎではないだろうか、いやむしろ「うそ」が表面化してはいないだろうか。

スポーツには、或る喜びがあり、そしてそれを感じながら在部していると言ふ事は決してまちがいではない。馬術は個人の技術がその中心であると言ふ事も又大きなまちがいではない。そして以上の事を認めた上積極的、活動的に参加する

事により一層自己を表現して行くと言ふ事は望ましい事である。ところが前述した様に団体としての喜びがあり、団体としての生活に意味があるのである。

故に、ここに規律が生じて来る。人により色々な目的と興味を持つて入部して来たとしても、いかに自的が違つたとしても部員として存在する以上、部の方針に従いその制約をやはり受けて行かねばならないのである。

（二）で云う制約も学生として決して離脱したものであつてはいけなはしいのは当然であるが、部活動に協力してこそ部と言ふ物が充実して行く事になるのである。

又、馬に乗るだけでなく我々もクラブを運営しなければならぬ。もしそうでないならば馬に乗るだけという乗馬倶楽部で楽しみだけを求めれば良いのである。しかしそれでは体育会としての馬術部の十分な意義がはたせないのである。即ちそれが目的であるとは決して言い切れないが結果として人間性も錬成と言ふ事が産物として残るのである。

部の本来の姿は部生活の自立的な管理、運営の推進力が要求されていてそこに我々の責任があり義務があると考へて

良いのである。実際問題として当番、行事、部員会、そして練習にさえも出て来ないと言ふ人が、いかなる時にも少しはいるものである。私はその様な人も現実の問題としてではなくとも觀念的には理解していると思ひます。

しかしながら団体の内では自己の利己主義は当然排除されてしかなるべきなのである。我々の目的は馬術の練習に有り、それをを通じて愛馬精神を養い部員相互間の理解と団結を得、結果として人間形成に到達することなのである。ですから練習に來ないと言ふ事は大きな誤りなのである。

技術的向上についてみてもやはり練習が本質をなすのである。とは言つても人により肉体的、あるいは精神的な限界と言ふものがあるので早く上達する人もあれば遅い人もある。しかしながら共通して言えることは単調に又冷静に馬をみつめていく態度が大切なのではないかと言ふ事です。

結び

私達は学生生活において、クラブ生活を考える場合、決して単順に、画的に考へる事は出来ないであらう。それを考へるには我々のかつての、あるいは現在の

環境と、又これからの事、即ち将来のことも加味されて考へなければ決して十分とは言えない。我々には現代への鋭い問題意識が、あるいは懐疑が放置されたままでいるのをひろい上げ、既成価値体系（多くの面で）を考へていかねばならないのである。日常の学生生活は……

我々は学院において不活発な、或いは不消化な人間が排泄していく現実を見ると決して一定不変の理念というものを要求しなくとも一歩一歩前進していく自分の位置を測定し、決定して作業が進められなくてはいけないと思ふのである。そこに我々の本分があると思ふのだが、馬糞を捨てること、その本分を捨てることは人格を持つ人間であることを捨てることに成るのではないかと。我々の学生生活をより豊かなものとし、社会人となつた時に悔をなさぬ様充実した部生活を送り、部の存在を価値あるものにしていきたいと思ひます。そして誇りを持つて網島の厩舎を去ることが出来る様に……先輩諸兄姉、及び現役の方々に、これから多大な御協力と御指導をお願い致しまして結びにしたいと思います。



障害に向って

女子主将

松本佑子

「馬に乗っております。と云えば、或人は何とノールで素晴らしい事でしょう」と云い、又お転婆な女の子だと思う人もあり、更に女が馬に乗るなんてと、顔をひそめる人もあります。でも彼等は本当の馬術部の女子をあまり知らないで、上辺だけつまり馬に乗るといふ事だけを取り上げて、勝手な臆測をするのではないかしら。私達の部は馬に乗り手入れをする事は同じでも、乗馬倶楽部とは大変に異なっています。それは青山学院大学体育会の中の一部だからです。そしてその部の部員には部生活があり、その事が最も重要で、私生活は部に忠実であればあるほど、度々儀性になります。

何故学生生活四年間「又は二年間」を部に入つて過ごすのかしらという問は、時々誰の頭の中にも浮び、何となく自分だけが周囲の友達（馬術部ではない人達）から、取り残されたような気になります。それも毎朝の練習で、女性としての嗜をするより、土方のような力仕事に時間をさき、授業中も疲れて眠っていたり少しでも意志が弱いと勉強を怠つたりで学生の自分を忘れかける事もあるからです。馬術家になるわけでもないのに、馬

で明け暮れ、それなのに部に対して何かを期待し求めても何もないのです。私個人に關しては、四年生になるまで何度そのような事で部に対して疑問を持ち、迷つたかわかりません。その度に上級生から、一つの事を続けて行けないようなら他の事も中途半端に終つてしまふ、というような忠告をされ、四年間続ける事だけを考え、これを目的としました。そして入部してから三年間と六ヶ月たった今日、あと六ヶ月を残しますが、やはり遂げたという満足感に浸つていますし、クラスメートより一つ多く異なつた経験をしたように感じるので。

自分自身の意志ではなく家庭からの、そして周囲からの圧迫で、部を続けていられなくなる事は、ほとんどの女子部員にはある事ですが、これを克服し、続ける時その人は自分に対して本当に責任を持ち、より強く歩んでいくのだと思えます。部を続けていくには体力的にも精神的にも楽ではなく、様々の障害があり、苦難の連続なのです。どんな先輩だつて一人として苦しみがなかつたという事は考えられません。私達此部に入つた以上自分自身の向上のために、その苦難を逃避してはならないのです。一つの障碍を飛んだ時の喜びと同じで、数々の苦難を越えて、学生生活を終えた時、後悔する事はないと思います。なかなか簡単にいくものではないかもしれませんが、やりかけた以上やってみる価値があるのでないかしら。綱鳥にはそれぞれ愛馬が待つている

事を忘れないで、挫けず練習に励むのです。私達女子部員の前には、各々に多くの障碍が横たわつていて、皆協力し団結し、誠意を持って体育会の部員として恥かしくないよう、常に努力し逃避をしないで、前方の障碍を真直ぐ見、飛んで行かなければなりません。真剣にやらねば落馬しかねないので

青春は美わし

女子主務

高橋和子

「しまった急がなければ」と、朝毛布の中から顔を出す、薄暗い空が窓を通して私の目にまず飛びこんで来る、「さあ・大変」と、洋服を着、髪をとかすのもそぞろに戸を開ける。さつと冷めた朝の誰も人の息づかいで汚れていない空気が顔を打つ、私は顔をしかめ、もくもくもくと足を早める。明日こそは早く起き様と思ひながら又々朝の馬拉ソンだ練習、手入れ、皆でわあわあと言ひながらそして学校へ、私の毎日がこの一歩で始まるのだ、こうして四年近くなる今日今頃一人間つて不思議だな。知らない内に友達になつて、又忘れてしまふんだな。」 「そうね」と、ふつと自問自答

している私、馬術部と云う世界に入つて先輩、同輩、後輩と多勢の人々と部を通して仲が良い時悪い時そして喧嘩している時とあらゆる時と場所、ほんの小さな世界での泣き笑いの学生生活を終わるうとしていて。その一つ一つが忘れていく様でいて思い出の中にそのままの姿で生きているのだと、「ハッセの詩に」

「青春のふるさと」の月と日は
もはや私の道を照らさない。

その喜びと悩みは、

今日では歌と伝統になつていゝ。

そのひびきは遠くがすかだが、

魅力に満ちた優美さで、

永遠に現石を保つていゝ。」

私は残り少ない日々を何事もなかつた様に太陽が登りその赤さで木々や家々が真黒になつていゝ中をもくもくと足を速める事を又繰り返すでしょう。私の青春め一ページをうめる為に、そして口ずさむでしょう。

「楽しさ時の命は美わし、

青春は美わし

それははや来たらず

されど重ねて言わん

青春の年々は美わし

青春は美わし

それははや来たらず。」

オリンピックの年に

緑鞍会係
稲熊武臣

青陽を思わせる日の光と熱は深くいっぱい大地を潤し、天が恵む最上のおせじの中でオリンピック近代五種競技は開始された。昨日行なわれた開会式の、目眩るめくような艶やかさはなく、又情熱的な期待と演出の行き届いた整然とした秩序が打ち出す興奮もない。日章旗を中央に、色彩やかな参加国の旗が浮んでいる。各国の選手たちは、秘かな緊張を見せてはいるが、どこかなくのんびりした安らぎも感じさせる。空には雲一つなく地上の緑と、恰も青磁の名器を見るような融け合いを見せている。こうした舞台装置の中で第一目の馬術断郊競技が行なわれた。私と篠原の二人は丁度三ヶ月前に、今日出場する馬匹の調教合宿に入った。

三人、我々の未熟を罵しり、時には謙しかりして、我々の自尊心をひきちぎり、又虚栄の盃に酔い迷わせる日々が始められた。日中の暑さを避けて八月いっぱい迄早朝練習が行なわれた。一人二頭乗りで、一鞍控えて手入れをする。飼付けは馬丁さんがしてくる。八王子牧場で約一ヶ月、残りは朝霞の競技会場である根建パークで過した。

外を向いてもいいから踵を下げる」「内方の手綱をゆるせ」等々……
大体このような配分で又注意で一鞍を終る。午後からは自由になる。八王子ではほとんど毎日といっていい程、プールへ通った。夜は旅館でテレビを見、麻雀をし、共に語る。二、三日も過ぎた頃には選手も学生も親しみ、自慢や愚痴も出始めた。朝霞へ移って間もなく、ジャ・ナリズムが我々を捕えた。「遅れる近代五種馬の調教」とか「間に合うかオリンピックまであと一日」更には「学生の超用が原因か」こうした事が書き立てられた。しかし翌日も又次の日も我々は今迄通りの運動をし、罵声の旋律にも狂いはなかつた。午後から、合宿所に当るトレーニングセンターで卓球や碁をすることにも変りはなかつた。

近代五種競技ほ一九一二年の大会から故クーベルタン男爵によつて提唱・復活された。曾つての古代五種競技に見られた軍事的な色彩は薄らぎこそすれ、今も尚その残り香を保つと言われている。あの輝かしいナポレオン時代に、或いは近く、バルカンの戦に、自国の勝利を意味するかもしれない通信文や命令を戦場で送達する義務を負う伝令や副官の職務に基づいてこの競技が生まれたと言われる。馬を駆り、敵を切り倒し、射ち伏せ、川を泳ぎ渡り、ひたすら走り続ける。こうして馬術「千五百米断郊」・フェンシング「エツペ総当り」・射撃「二一〇発二

十五米」・水泳「三百米自由形」・陸上「四千米クロスカントリー」の順で五日間に亘り競われる。三名の団体競技で、我が国は先回のローマ大会から参加した。
歴史も浅く選手も少ない。我々と共に合宿している選手の中にほ毎年行なわれる世界選手権に出場した人もいる。
三ヶ月の合宿は終わった。大会の翌日には「大成功」が報じられた。我々も大いに喜んだ。昨日の緊張も色取どりの国旗や皮膚や髪もなく、隠れていた草の緑が役目を果たした白いボールが、そして砂をかぶつた障壁、松や杉の林が我々の最後の騎乗振りを静かに、目を細めてながめている。教官を中心に輪乗りをした。静かに我々に礼を言い、前途を励ましてくれた。乗り終り荷物をまとめて、八王子迄馬を運んだ。ささやかな酒宴があり、労をねぎらい合った。なにとはなし名残り惜しく寂しさがこみ上げてきた。我々は解散した。
今はもうオリンピックも終り、学院も九十周年を迎えた。そして斯くの如く、いななきが特集編さんされた。これに従事した今年二年生の諸君に、その努力と協力の過程と成果に心から拍手を送りたいと思います。十月二十七日 稲熊武臣



苦しさを

乗り越えた時

協会幹事

那波広和

時として主将の変わりも勤めなければならない協会幹事の事は責任の重い仕事の一つだと思えます。試合場の下見、経路図の作製、障碍の配置、障碍物のかたづけ等、まことに苦しい忙しい仕事です。がそれだけにやりがいのある仕事です。

最初の幹事会に出席した時に感じた緊張感や肩の荷の重さから、はたして私にこの様な重大な役が勤まるかどうかと心配でしたが、無我夢中でやっているうちにもう十ヶ月近くも過ぎ様としています。今では各校の幹事連中ともち前の図々しさを発揮致している次第です。

馬で走れば数分しかかからないであろう所を両親からゆずり受けた二本のかぼそい足でテクテクと一時間以上も歩き続け、障碍物の点見等をすませ、試合が終了した時にはホツトし、試合が成功に終わったという事で我々の苦勞も楽しい思い出と変える事が出来ました。試合を成功に終らせるという所に我々の仕事の苦しさを、責任の重さ、又楽しさも含まれていると思えます。

又、協会幹事という仕事は各校の練習方法や馬匹、状況、馬匹管理方法、会計内容等の話題が一番耳に入りやすい立場なので、当青山学院大学馬術部の発展のために役に立つ事をこれらの話題の中から、どしどし進言して行きたいと思っています。「そしてその逆も成り立つでしょうし。」部員の皆様もこの様な立場にいる私を馬術部の為に有意義に利用して下さいれば幸いと思っております。

最近学生スポーツの真の在り方という事が問題に成っていますが、この学生スポーツの意義を尊び、我々青山学院大学馬術部の発展の為、又広く関東、全日本学生馬術界の為に微力ながらも力に成って行きたいと言う希望に燃えています。今夜東京砂漠に久しぶりの雨が降り始め、その雨だれの音を聞きながらこの原稿を書きました。あまり夜遅くまで起きていると翌日の練習にさしつかえるのでこの辺で筆を置かしていただきます。

借金を

會計

山田恵道

小生が會計という、ガラに合わない役を引か受けて「他人は小生の事を、人間のカタイ、出来た奴だと思つていたらしい？」から十ヶ月という月日がたちました。最初は借金、買掛金十数万円という赤字を背負いガク然としましたが、困難であればあるほど実によりがいのある仕事だと自覚し、発奮したものでした。目的は但一つ、借金を にしてやる

そして色々研究しました。部の最大の支出である馬糧費の節約、といつても馬糧を減らす訳にはいかず、十万円余の借金をしはられていた従来のT馬糧の値段とその他のK飼糧、M飼料店等、数軒の馬糧投店をあたり、部の内情にあつたM飼料店を選び、従来より、袋あたり三百円強安価な馬糧を入れる事に成功し、ようやく目的達成への道は豁然と見い出された感でした。

その他、部員の積極的なアルバイト(臨時アルバイト十万円余)や、OB諸氏の賛助を戴いたパーティー開催(二十六万円利益)等により、新馬も二頭入厩させる事が出来、部員一同、先輩の御協力

と、団結して困難にあたる尊さを知った次第です。

又、部員も非常に會計に協力してくれた事は有難いというより他になく滞納も無くなり、備品の節約、修理と小さな支出を大きな黒字に結びつける様にと部の會計状態をよく理解して行動してくれました。

しかし現在部の絶対支出と安定した収入との間にはまだまだ赤字になる要素を含んでおり慎重にあと数ヶ月の會計の仕事を次代には黒字にして、渡すべく努力し、すでに一歩一歩目的に近づきつつある事を御報告いたします。

尚詳しい會計報告、数字は追つてお知らせいたします。

四節の健康の為に
先ずうなごを召上れ

御用命は駿専門店

佐阿徳

地下鉄 明治神宮前
都電
TEL 青山(40)3819

修理 明け暮れて

施設
川島弥吉

施設の役に着いて、はや八ヶ月になりましたが、施設は役員の中では一見楽な仕事に見えるが、いざ初めてみると大変である。まず、やらなければならぬ事が

非常に多い。

そして今、つくづく施設とは縁の下の力持であり、大変な仕事だと痛切に感じている次第です。

今までの所であれば、馬房の破損や埒の壊れを見ても、誰かが直すだろう、と言う無関心さであった。

が、今ではそう言う訳にはいかない、自分が先頭になって直す立場にあるのだ。役に就いて以来一番目に付くのは、手入れ、掃除道具の後片付けの悪さである。又、色々な器具に対する無関心さ、どおしてもなければならぬ物を、何故大

切に扱わないのでしょうか？

現在では部員が自覚を持って来たので大変良くなって来ました。又、一ヶ月に一度部員を集めて、埒、馬房、その他の破損箇所の修理をしています。しかし、埒など老療物寸前でいくら修理してもすぐ壊れてしまう仕末なので、大学側に根本的に直して戴く様、お願いしています

が、なかなか事が運ばないので苦勞しております。

付近の住宅よりしばしば苦情の出ている。馬場の清潔はなかなかの難問題である。

この所は苦情が来ないので安心していても尚一層清潔を保つべく努力しています。

施設を良くし、網島の馬場を清潔に保つ為には、部員全体の協力が必要であり、それが馬の健康状態にもかかって来ますそれには部員一人一人が施設の備品を責任を持って使用する事である。

今後ともより一層の協力をお願いしたい。

現況報告

副務

中村 教雄

我々馬術部の今年の一月からの足跡を振り返ってみよう。

一月には毎年行なわれるはずの初乗会は馬事公苑その他の都合により取り止めになったのは残念であった。一月中旬に対学習大学定期戦を行い新入レギュラー戦共圧倒的勝利をおさめた。

二月も末になって例年の如く主将以下十名東京駅を女子部員、先輩に見送られて関西遠征に元気よく出発した。第一戦

は大阪府立大学に総喰いして大勝した。

第二戦は今年から定期戦を結んだ甲南大学である。この定期戦は甲南大の要望によって障碍の試合だけで行われたが、経路違反と馬場重のためか馬転さしてしまいい定期戦第一戦を飾れなかったのは残念であった。第三戦は関西学院大学との定期戦であったが百十四点の大差で敗れた。第四戦は神戸大学、神戸大は試験期間中であつたが我々の為に時間まで裂いて試

合して頂いた事は感謝すべきである。しかしこの試合も九十四点差で大敗した。

我々は関西を後に名古屋入りした。名古屋は、森林公園で行われクラブの馬を使った相手校も貸与馬であった。

第一戦は愛知大学、相手校に経路違反が出て危うく勝つ事が出来た。第二戦は名古屋市立大学で大差で勝つ、これが関西遠征最終戦を飾り三勝三敗で五分の成績にきまつた。男子関西遠征の間、女子部

員は男子部員の留守を守って網島合宿を行なう。雪が降つた為一日休んだが無事終了する。

三月に入つて五日には関西学院大学オーストラリア戦が網島で行なわれ二点差で勝つ、又昨年まで貸与馬で行なわれていた九大学争覇戦が今年から日本獣医科大学が加わり新たに東都学生自馬競技会として馬場、中障碍、大障碍と自馬で行われる事に成つた。

中障碍団体戦

青渚号 山田 二年 減点 三・五

雷神号 上野 三年 " 八

青潮号 本目 三年 失 権

一頭失格の為団体チームを組めず個人
の部で青渚が一位となった。

中障碍個人バルクール・ド・シャス

青渚号 大竹 三年 失 権

青潮号 藤原 二年 失 権

雷神号 加藤 一年 九位

青武号 那波 二年 十三位

青扇号 加藤 一年 十二位

雷神号 上野 三年 九位

三月二十二日には関東女子学生自馬競
技会が行なわれレギュラー戦で、松本（
三年）青渚号七位、高橋（三年）青潮号
青木（二年）雷神号三位の成績で団体で
準優勝した。新人部班は貸与馬で、岸基
子（第五位）豊田昭子、木所弘子、桜井
富美が出場した。
四月十日ほ雨中、関東新人戦が行なわ
れた。

第一試合 茨城大

第二試合 明治大

第三試合 農大（準々決勝）

この第三試合の農大に敗けた為準決勝に
は出場出来ず。

四月二十六日 国体都予選

複合馬術

青藤号 大竹 四年 失 権

雷神号 上野 四年 失 権

育潮号 本目 四年 失 権

中障碍 雷神号 上野 四年 失 権

青潮号 山田 三年 五位

六段飛越

青潮号 本目 四年 失 権

青渚号 山田 三年 五位

サン・クワルジュ賞

青武号 那波 三年 十二位

青扇号 加藤 二年 十一位

四月十五日 関東選手代表第一次予選（
鑑上げ）

山田 三年 通過

那波 三年 失 権

藤原 三年 "

五月四日には当馬術部主催のパーテイ
ーが産経会館ホールにて行なわれOBの
協力により大成功に終わった。
五月五日 東京都乗馬大会
中障碍 青渚号 山田 三年 失 権
雷神号 上野 四年 "

サン・ジョルジュ賞

青武号 高橋 四年 十位

雷神号 青木 三年 十一位

五月十五日 関東学生選手第二次予選障
碍の部第一次予選（鑑上げ）通過の山田
が会場、錦蘭号で満点で帰ったが緑柳号
に反抗され失権し第三次予選（馬場）の
出場権を失った。

六月上旬に先月のパーテイーにより得
られた利益で馬を二頭購入する事が出来

た。一頭は東京農業大学め緑穂号（現在
"青疾号"と改名）他方は岩手県水沢産
の新馬で現在の青潮号の妹である青駿号。
この二頭の新馬により部全体が活気に満
ちてきたのである。

六月十八日、対甲南大学オープン戦が綱
島で行われ障碍、馬場共大敗した。馬場
は総合で、中村、那波が出場しそれぞれ
二位、四位の成績であった。

六月三十日には関東女子学生選手権予選
（馬場）がパレスクラブに於て行なわれ、
高橋和子（四年）青木紀久江（三年）が
出場し、それぞれ十位、七位の成績に止
った。この結果七位の青木が通過し、障
碍の部の出場権を得た。

七月一日よりの大学前期試験を控えた
我々は二部トーナメントの為綱島合宿に
入ったが試合三日前になって、学生連盟
の手違いと馬事公苑の都合により、試合
が延期になった時大いに憤慨したのであ
った。結局トーナメントは十二月中旬と
いう事になった。夏休みに入つて七月十
三日綱島馬場に於て第三回部内純馬術大
会が行なわれた。一位本目（青疾）、二
位山田（青渚）、三位加藤（青疾）、四
位中村（青疾）、五位上野（雷神）。

七月下旬一週間にわたつて男子合宿が昨
年と同じ、秋田県角館に於いて行われた。
十名という小数为つたが、大成功を納
める事が出来た。

八月六日、大阪府立大学とのオープン
戦が当馬場で行われ関西遠征と同様大差
で勝った。

八月九日関西女子学生選抜チームとの試
合が馬場で行われた。健闘したのにも
拘わらず、青木（三年、青渚）、第一位、
泉（二年、雷神）、七位、高松（二年、
青武）、八位、豊田（二年、青武）、九
位、秋元（二年、青疾）、十位で、第一
位青木を除いて自馬でありながら、第二
位、第六位まで関西勢が入賞し、おそま
つな試合であった。

八月二十四日から九月に行われる学生自
馬対の試合に備える為と、乾草作りの為
の合宿に入った。しかし天候の不順の為
に乾草は全く作れずに終わった。

八月下旬より九月上旬に渡つて、伊東に
おいて女子合宿が行われた。女子合宿は
部員を半分に分けて、二回に渡つて行わ
れたが、特に一年生の上達が目立った。

九月の自馬対の為の馬の調教は順調に進
み、これならという気で試合に臨んだが、
結果は不手擦が続出して全頭三種目通過
せず惨敗に終わった。

馬場馬術（氏名）（減点）
青渚号 山田（三年）七五点
青潮号 中村（三年）失 権
青武号 本目（四年）七九二五点
雷神号 上野（四年）八二二五点

広地椅乗

青渚号 五七点

青潮号（オープン） 失 権

青武号 " "

雷神号 二十点

余力審査中障碍

青渚号 最終障碍前場外失権
雷神号 経路違反 失権

以上により青渚号、雷神号〔補欠〕が全日本自馬対に参加権を得る。

自馬対が終つてから、平木コーチの提案により三週間毎日障碍講習会が開かれ、全部員徹底的に障碍姿勢、随伴姿勢、はみ受けを直され最後の日に初心者用障碍小障碍、中障碍に分けて部内審査会を開き練習の成果を競い合つた。その結果初心者用障碍、越智〔一年〕、小障碍、張〔二年〕、中障碍の部、山田〔三年〕がそれぞれ優勝した。

九月二十日には関東女子学生選手権障碍の部が行なわれ、馬術部門を通過した青木〔三年〕が出場し、健闘したが八位に止つた。

引き続き、二週間に渡つて馬場馬術講習会が開かれ、日増しに下級生が上達してくるのが目に見え、それが上級生としても楽しみな事です。

〔副務 中村教雄〕



対公式戦短評

関西遠征

大阪府立大戦

二月二十四日

於大阪府立大馬場

大阪府大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
小川	37.25	安芸浪	本目	24.00
松田	160.00	秀浪	上野	24.00
田中	63.00	鷹浪	大竹	8.00
前田	8.00	夕浪	那波	0.
平田	226.00	安芸浪	山田	20.00
その差 409.25 をもって本学の勝ち				

本学の前段トップの那波は比較的試合慣れしていない新馬夕浪号に騎乗し満点で帰つて来たが、新馬という事を考へて踏み切り、誘導に氣をせいもう少し落ちつかせて飛ばせるべきであつた。

難馬安芸浪に騎乗した本目、山田はこの馬の反抗癖を良くおさえ勝利の因と成つた。上野の秀浪は氣迫のこもつた騎乗ぶりであつた。大竹の鷹浪は勝利が決定的に成つた後だけにのんびりとした騎乗ぶりであつた。

対甲南大戦

二月二十五日

於甲南大馬場

甲風に騎乗した篠原、大竹は満点馬に良くついていったがよくを言えは誘導をもう少し丁寧にしてもらいたい。難馬甲和に騎乗した本目は前段の失敗を見て、良く研究し氣迫のある乗り方で喰つた。甲騎乗の上野は中途経路違反があり、技

術以前の問題で最高の注意をはらい落ちつく必要がある。山田は最初鷹甲に騎乗であつたが氣負いすぎスタート前に人馬転倒し、代馬甲に點減点を背あつた。このような事には最つと留意し事故のない様に努むべきだ。

甲南大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
桜井	4.00	甲	上野	130.00
大久保	0	甲風	篠原	0.00
菅	170.00	甲和	本目	154.00
渡辺	3.00	甲風	大竹	0.
伊藤	3.00	甲	山田	23.00
その差 127 をもって本学の負け				

対神戸大戦

二月二十六日

於神戸大馬場

本目は長年の希望の松頼に騎乗し大差をつけ満足していた。山田、大竹のダリウスは安全な満点馬とはいえないが、山田、今少し誘導にもつていかれ氣味だつた。臯加藤は安定していたが篠原は馬の

質を見抜くのが遅く、馬まかせにした為前半にミスを重ねた。貸与馬戦に於てこの点をよく理解し、のみ込まねはならない。上野、桂は拳の安定を確保出来ず、脚の推しが足りず拒止が多かった。

神戸大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
肥塚	30.00	松籟	本目	3.00
中沢	3.00	ダリウス	山田	10.00
沼田	4.00	皐	篠原	68.00
及川	4.00	皐	加藤	3.00
坂根	19.25	桂	上野	94.00
塚本	3.00	ダリウス	大竹	0
その差 114.75 をもって本学の負け				

関西学院大戦

二月二十六日

於神戸大馬場

月輪騎乗加藤は満点ではあったが実不安定で速度についていけない感があるもっともっと試合慣れする必要あり、月下山田は前段の乗りに対し鞭をよく使

ゴールさせたが最終前の逃否にもっと根強く飛ばす様にすべきである。上野月友は最終の鞍にもかかわらず馬の理解が足りず、もっと馬を伸ばしてやるべきで一度の拒止にあわてすぎて敗因を作ってしまった。本目大竹の少差はやはり馬についていけずに落下したケースが多く、開学戦に於て実に我が部員にスピードにのる練習が不足していると感じる。

関西学院大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
森	0	月輪	加藤	0.00
志賀	114.00	月下	山田	7.00
奥平	4.00	月友	上野	214.00
近藤	7.00	月友	本目	14.00
上方	0.00	月輪	大竹	4.00
その差 114 をもって本学の負け				

対愛知大戦

二月二十七日

於森林公園

愛知大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
大竹	8.00	勝誉	那波	0.00
村川	154.00	孝王	山田	4.00
瀬尾	0.00	隼風	上野	0
菊田	7.00	金竜	本目	58.00
宮坂	0.00	孝力	大竹	81.00
坂崎	0	豊光	加藤	3.00
その差 46 をもって本学の勝ち				

那波は昨年乗った勝誉に安心して乗っており、自信の程と結果をみせた。山田は孝王で難馬をうまく御し、一反抗後の処理がよかった。但し随伴はもっと考える様に。相手は中途落馬後経路違反上野は隼風で、満点にもなり失格にもなる馬だが、調子よく飛んでいた。推進良好。稲熊は、満点馬金竜に乗ったが、興奮して脚と拍車が流れたまきいていず上だけ暴れている感じがする。普段から心掛けるよう望む。大竹は孝力で拳の安

対名古屋市大戦

二月二十七日

於森林公園

定を直せば、もっと飛ばせられると感ず。加藤は前試合に比べやや安定していたが随伴に一考を要し落下を防ぐように。那波、山田、加藤は愛大戦に騎乗した直後で安心して飛べた。篠原は、稲熊の失敗をよく見て騎乗しており良かった。上野の孝力は実に気迫のあるよい乗り方をしてしたが、今少し落ちつく必要があるのではないが。

名古屋市大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
坂植	10.00	勝誉	那波	0.00
小林	4.00	孝王	山田	0.00
猪飼	4.00	隼風	大竹	6.00
舟羽	0.00	金竜	篠原	0.00
植松	98.00	孝力	上野	26.25
井上	0	豊光	加藤	3.00
その差 80.75 をもって本学の勝ち				

関東学生新人戦

四月九日

於 馬手公苑

一回戦

加藤のラッキーセカンドは、完全に出不しすぎて、落下一であったのが不思議な位だ。川島の慶月は、喰うには喰ったが大きな身体を利用して、もう少しフアイトを持って騎乗してもらいたい。稲熊のケーフェアは、フアイトが有りすぎて少々見ぐるしかった。落馬は技術以前の問題である。中村の清月は馬に完全にまかせたのが良かったのである。

新人戦の第一回戦に勝ち、これからの試合に意気揚々というところである。

二回戦

加藤の東荒は、落ちついて良く騎乗していた。稲熊の法勝は、新人戦の障碍の高さであったならば、当然満点で帰ってくるのが当然であったのに一拒止されためは慎重に乗らなかつた訳である。石原の桜冠は、公式戦初出場にしては良く馬についていた。これからの活躍を期待したい。川島の城青は、喰うには喰えたが体力をもっと活用して乗るように進歩が望まれる。やれば出来る人である。

少差で勝ち、ついに準々決勝に進出

三回戦

中村の桜冠は、完全に出し過ぎた上が落ち着く事が肝心。加藤の桜祥は、まだ良く馬の癖を研究していなかつた事が、失敗の原因である。川島の聖王は、前述と同じ事である。稲熊の栄専、経路違反という事は、技術以前の何ものでもない馬の癖をもっと研究して騎乗してもらいたい。

一回線

茨城大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
	18.00	ラッキー	加藤	7.00
	204.00	慶月	川島	180.00
	112.00	ケーフェア	稲熊	124.00
	184.00	清月	中村	164.25
その差 80.75 をもって本学の勝ち				

三回線

農大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
野口	4.00	栄専	稲熊	140.00
田沢	180.00	聖王	川島	184.00
佐藤	6.00	桜冠	中村	3.00
清野	180.00	桜祥	加藤	180.00
その差 137 点をもって本学の負け				

二回線

明治大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
	0	東荒	加藤	0.00
	3.00	伝勝	稲熊	4.00
	0	桜冠	石原	0.00
	182.00	城青	川島	180.00
その差 1 点をもって本学の勝ち				

<p>開店</p> 	<p>コーヒー ワイン 軽食</p> <p>青山学院記念会館前 TEL (408) 0049</p>	<p>Restaurant</p> <p>藤</p> <p>青山学院前 TEL (401) 2855</p>
---	--	---

その他の試合

オープン戦 対関西学院大

於 網島馬場

関西学院大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
志賀	4.00	青潮	篠原	8.00
森	0	青渚	加藤	11.00
近藤	4.00	雷神	稲熊	4.00
上方	0	青渚	大竹	0.
奥平	160.00	青藤	山田	143.00

関西学院減点一六八、本学減点一六六
でその差二点をもって本学の勝ち

オープン戦 対大阪府大

八月六日
於 網島馬場

大阪府大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
前田	8.00	青潮	中村	34.75
小谷	184.00	青渚	山田	8.00
平田	10.00	青渚	川島	0
香東	35.50	青疾	石原	17.00
戸田	90.00	雷神	宮島	144.000

大阪府大減点三二七、本学減点一
七三・七五でその差一五三点の差
をもって本学の勝ち

定期戦 対甲南大

八月十八日
於 網島馬場

甲南大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
	24.00	青渚	稲熊	10.00
	34.00	青潮	山田	8.00
	15.00	青渚	川島	164.00
	24.00	青潮	篠原	0.

甲南減点九七、本学減点一八二でその
差八五点をもって本学の勝ち

祝 青山学院大学体育会馬術部
創立42周年記念

電気工事一式

東邦電業株式会社

川崎市上平間 293
TEL 川崎(52)449110

女子定期戦

対学習院大定期戦

新人戦

レギュラー戦

学習院大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
馬場	10.00	墨桜	青木	0.00
鈴木	60.00	八重桜	高橋(和)	20.50
中川	0.00	藤桜	豊田	7.00
その差42.5点をもって本学の勝ち				

学習院大		本学		
選手名	減点	馬名	選手名	減点
前川	0.00	藤桜	巴	11.00
斉藤	16.50	幸桜	高橋(八)	27.75
登内	155.00	墨桜	松本	34.75
岡	50.50	八重桜	岸(裕)	13.25
その差42.5点をもって本学の勝ち				

祝青山学院大学体育会馬術部 創立42周年記念

★ 第一ホテルチエーン

- ・ 第一ホテル新橋駅前 - (501)4411
 宿泊 1,300 ~ 1,650
 ◎ 1,000 食べ放題 (白楽天・オリスピア)
 ◎ 1,200 毎水曜食べ放題 (ローストビーフ)

- ・ 第一ホテルハイヤー (新橋第一ホテル前)・(501)3500
- ・ 東京ボウリングセンター(青山外苑内) (401)1121
- ・ 横浜シーサイドボウル (お宮の松上)・熱海(8)2020
- ・ 熱海第一ホテル (お宮の松上)・熱海(8)2020
- ・ 宝塚第一ホテル (武庫川沿)・宝塚(6)3151
- ・ 高松国際ホテル (屋島街道沿)・高松(3)1511
- ・ 高松国際ホテル ()
- ・ 高松ホテルボウル ()

座談会

昨日・今日・明日

出席者

四年	本目 晋	一年	山路 裕子
三年	山田 恵道	一年	蒲原 洋子
二年	中村 教雄	一年	池田 典子
二年	石原 弘行	一年	湯沢 真弓
一年	波木 井陽樹	一年	大竹 重子
	張 義准		
	越 智 量		
	田 中 明彦		
	野 中 寿恵		

司会者
二年 井戸 公近

井戸 朝の馬装や寝ワラ作業はどう？
 波木井 大変ですね。急ぐですよ。
 井戸 でもこの合宿では、朝一時間もあるじゃないか。
 波木井 ひき馬が多いんです。朝から三十分位、何も食っていないのに。
 高妻 馬も時々食わないけど。(笑) 今日なんて行ったらまだ食ってるんだ。
 中村 (弁解して) いや、原稿書かされてね。寝れなかったんだよ。

井戸 草沢山刈れました？
 本目 出来ない。
 井戸 天候の加減ですか？
 本目 天候、それと人員ね。
 井戸 一年生は、この合宿で上手になりましたか？
 高妻 (不服そうに) 殆んど乗れないんです。
 中村 乗ったじゃないか。今日までは。
 本目 四十分も乗せたよ。
 高妻 (驚いたように) 四十分ですか。短かく感じたな。
 井戸 横歩やってるんだって？出来る。

田中 思ったより出来ないですね。今までに横歩の号令はなかったけど。
 一寸不吉な合宿
 井戸 湯沢さんはまだ合宿してないの？大室だろう？
 湯沢 まだです。後半の方なんです。
 井戸 池田さんは？
 池田 まだです。私も後半です。
 井戸 楽しめたらう。合宿に入るまでは楽しいよ。入ってみるとつらいと思うけど。
 池田 楽しみじゃないわよね。
 (湯沢の方にあいづちを打つ)
 湯沢 楽しみじゃないわ。一寸不安だわ。
 井戸 角館の合宿はどうだった？
 張 俺は、そんなにつらいとは思わなかったな。
 井戸 練習がガラッと変わったろう。
 波木井 一鞍がたつぶり一時問あるし、いつもだったら二、三十分でしょう。もっと乗りたいなと思っただけど、秋田では、下りればその日はもう乗りたいくないと思っただし、午後に全然乗りたくなかった。正直な話。
 高妻 乗りたくなかった？そりゃ、ただ下で注意してくれるならいいけど、みんなムチャ棒を持つたりして立っているんですよ。飾りでなくて、皆振ってくるでしょう。下りるとホツとして終ったなという感じでした。

井戸 そういう事に関して何か感じる？
 波木井 あれぐらいの事というより、あれで普通でしょうね。
 張 そうだよな。
 リボピタンロに通って
 井戸 トレーニングは？
 田中 殆んど水泳でした。
 井戸 あるとしても川をはさんで発声練習ぐらいだろう？
 高妻 発声練習は一日やっただけでした。
 波木井 橋が流れちゃったから大雨で。
 井戸 (驚いて) え！あそこ流れちゃったの。町に出られなかった？
 中村 町なんか全然行かれなかったよ。
 越智 俺達行きましたよ。
 中村 一年生だけだよ。薬屋へ毎日通ってね。
 井戸 栄養剤がなんか買ったの
 高妻 リボピタンロ。
 山田 だいたい薬を二千円ばかり買ったからね。
 井戸 去年みたいに恋が芽ばえたって？
 張 (上級生をチラッと見て) 何んか上級生がうまくやってたな。
 越智 恵道さんなんかは、わざわざ合宿まで逢いに来る人がいいるからな。

経路違反が続出して
 井戸 今年もステイブルやっただんですか。
 中村 やったよ。今年は距離が長かったし、危険な所が多かったな。
 田中 去年は障害を置いたらしいけど、今年もやりたかったですね。
 中村 橋が流れちゃったから運ばなかったんだよ。
 田中 川なんか走ったら面白かったろうな。
 波木井 まあ普通ステイブルというところ、タイムを争うのがほんとうでしょう。あめ場合、常歩、速歩とちゃんと経路が決まっています。
 井戸 駆歩なんかするなつていうんだらう。
 波木井 一個所駆歩もありました、
 高妻 駆歩が多かったな。
 張 実際、試合の形式にしてタイムで争ったら、もっと面白かったな。ただ経路を踏んで帰ってくるだけだからな。
 井戸 期待が大きすぎたのかな。
 中村 障碍はなかったんだけど皆経路違反ばかり。
 波木井 俺はちゃんといつて来

ましたよ。
張 俺は途中で飛び出しちゃった。

越智 張なんか、俺より後に走ったのに、いつの間にか前を走ってたよ。

高妻 俺も飛び出しちゃった。
井戸 経路指示出したんでしょ。

中村 出したよ。それでもわからないんだよ。頭がいいからね。

井戸 練習後、馬へ乗って川へ入るだろう。
中村 波木井は入らなかつたらう。

波木井 僕入りましたよ。
山田 大きな収穫は波木井が2.5m泳げるようになった事だよ。

井戸 「びっくりして」2.5m！
波木井 本当に泳いだんですよ。一呼吸でね。

山田 なにしろ、波木井はシャワーの中で息が出来ないっていうんだから。

あつちさききのり……
井戸 例年の合宿に比べて今年の合宿はどうですか。

中村 型破りの事が多かったよ。
井戸 型破りってどんな事ですか。

山田 今まで酒は飲まさなかつたが、今年はガバチヨ飲んじやつ

たしね。
中村 皆飲んでも品行方正だからいいよな。張君。

張 いやー。
山田 それから。長靴みがく時間も作つた。試合前に、リポビクソノを飲んだ。

中村 トレーニングの変わりにスリーチャンスや校歌の練習もした。
井戸 今年も三浦先生いらつしやいましたか。

山田 三浦先生来てね。「ツヤク引け、ツヤク引け」。「アツチサ巻乗り、コツチサ巻乗り。」

〔笑〕
馬にまでよけられて
井戸 石原、二年生として合宿どうだった。

石原 よかつたよ、秋田おぼこもいたし。
井戸 でも橋が流れちゃつたんだらう。

石原 あー、あれは残念だったよ。なにしろ、いこいの場所だったから。まあ、小じんまりしていたな。

井戸 俺達が一番印象に残ったのが角館だったらう。
石原 今年もそうだと思うよ。

一年生もそうじゃないかな。初めての障碍もやつたし、ステイブルもやつたし、まあ、色々な面で

楽しかつたし、印象に残つたんじゃないかな。
高妻 でも石原さんのは痛かつたな。石原さんの前へ行くとき、さつと馬がよけちゃうもんね。

石原 よけるんじゃない。お前が逃げて行つちやうんじゃないか。

井戸 去年みたいに、ひどい落馬をしたのいた？
石原 いないな。去年より蹬上げは少なかつたし、張と高妻が落ちた位だ。

井戸 中村さん、マネージャーとしてどうでしたか。
中村 角館の下見はつらかつたね。試験の前だったから、一人で行つたんだよ。

井戸 一人ですか。
中村 試験の二日前に行つて帰つて来たのは試験の日の朝だもの。それでも、向うの人は親切だからすぐ決まった。

網島にて
井戸 この合宿ではどうですか。

中村 この合宿では、一度めしが悪いと言つて学校へとなり込んで行つたよ。
石原 でも、それから、ずいぶん飯が良くなつたな。

波木井 待遇良くなつても、こつちへ回る量は同じなんです。

石原 うそつけ！〔笑〕
甘いこと言われて！
井戸 馬をどう思う？

越智 まあ憎らしい時もあるんですよ。一生懸命可愛がつている時に咬みついたり蹴飛ばしたり。

井戸 だけど、自分の馬匹の馬ですね、可愛いと思います。
石原 ほんとはそんなことじゃいけないと思いますけど。

井戸 そうだろうな、いつも可愛がつていると。湯沢さん、入部して以来今までどんな感じを受けてる？
湯沢 馬術部ってこんなに忙しい部だとは思いませんでした。

井戸 なんか甘い事言われて入つたけど。
湯沢 暇もあるとか。遺棄りに行つてないでしょう。一度行つてみた大竹 ああ、行きたいわ。

波木井 秋に行く予定なんです。
蒲原 すごく楽しいと開いてるから是非行つてみたい。

馬の臭いが滲み込んで
井戸 一番いやな事って何？
山路 手入れすると髪の毛なんかすごく汚れちゃうでしょう。気になるけど。

井戸 女の子だなア。最初馬房に来たとき臭かつた。

山路 仕事出来ないんですね。息がつまっちゃつて。
蒲原 特に雨の日なんかネ。

大竹 一鞍目乗つて満員電車にギューギュー詰めされるでしょう。すると暑さで体から二オイが立ち昇ってくるんです。何んか回りの人に悪くつて。

野中 そうそう。教室へ行つても友達から馬臭いつて言われるの。
井戸 まだ行つてないのか。

女性としてね……
池田 でも馬術部に入つていとうことで優越感を感じるというのか。ちよつといい時ももあるんじゃない。

井戸 そういうことは励みになるだらうな。
野中 それはあるのね。でも友達とのお付合が離れてくるのはさみしいわ。

井戸 でも皆な四年間続きそうだな。頼もしいよ。



×部班を組む場合、号令者はどういうところを注意しなければいけないのですか。

馬場の練習が障害の練習か、は上級生が決めるからね。次に、馬術部の部員なら当然馬の状態、例えば青潮は心臓が弱いとか、青駿が新馬で使えないとかは知っていなければならぬ。その他天候とか。だから馬匹との連絡、又一人一人の自覚が必要なのよ。それから騎手の練習状態によって今日は常歩だけとか、駆歩運動、遠歩二蹄跡運動とかは主将若しくはその代わりが指示している筈よね。従って種々の条件のもとに今日は駐歩をやりたいと思つた時に思いきりやればよい。それだから一鞍の内にこれとこれをやらなければいけないという基本は無く、駆歩だつたら五分以上は無理だし、速歩だつたら十分程やつたら必ず休ませるといふ事ね。

×今平木さんの号令で最初に軽速歩をやらせる場合と、常歩から初める場合とありますがどちらが理想的ですか。

理想から言えば、常歩を充分やつてそれから速歩に移る方がいいのだが、部の練習時間が短いからすぐに軽速歩で馬を伸ばしておく。そのかわり、うちでは練習後に充分引き馬による常歩をたっぷり入れている事にしてるのよ。

馬に負担をかけないで騎乗者をしほる方法としほるといふより技術だから、人を疲れさすといふだけならラチかドラムかに鞍を置いて何かやればよい訳で、馬術は術なのだから、いくら汗をかいたって何にもなっていない時もあるれば五分間の常歩でも指導の仕方でも効果のある時もあるし。

るし。

馬場姿勢の練習にも水勒の時と大勒の時があります。目的・操作はどのように異なりますか。

水勒の場合は、大勒と違って二蹄跡運動は出来ないが、大勒ばかり使っていると馬が固くなるばかりでなく運動が出来なくなり、あえては反抗心を起こし、使い物にならなくなるから、それは程度問題で全然やらなければ人が覚えないうし、それはかりやつていけば、馬が悪くなるし。

駆歩運動について

駆歩というのは、全部員常歩。速歩でろくな巻乗り、半巻も出来ないなら、当然駆歩運動に移るべきではないし、速歩で出来ない者は、駆歩で出来る筈がない。それは号令者の判断で勝手にやつていいわけよ。号令者は、そこに頭を使わなければいけない所ね。一年生など未だ上でがたがたしている時に、速歩・駆歩をやれば、馬は悪くなるし、上も固くなるから、常歩で出来たら速歩、速歩で出来たら駆歩へと移っていけばいいわけよ。

それは一鞍の中でするんですか。

一日の練習時間三十分以内に常歩・速歩・駆歩全部やるうというのが間違えよ。今日は常歩、明日は速歩と順番に次の段階へと充分その運動を覚えさすという事が必要なのよ。五人、六人も一諸に見る時、例えば一週間に一日か二日来ていて者と毎日練習している者が居れば、それこそ臨機応変に、次の運動に移り、乗ってない者が出来なくても仕方ないわけよ。きちんと出て来なければ正しいって号令もかけられないという事ね。号令

かける方も「昨日、この人どの程度までやつていたのかしら」でかけたのでは、駄目な訳よ。結局皆が毎日練習に出て来るといふ事ね。

障害姿勢で飛越しないで練習するには…

もちろん試合の前なら出場する者は、鞍数を充分重ねているという前提で、二・三日前なら、今さら誘導の練習とか、いきなり高い障害を飛ぶ必要はない訳よ。そうねえ、基本的な事。フォームや随伴の姿勢を飛越する事無しでも「腰を上げ」の練習が出来ると、上でバランスが取れていれば、新馬ばかりであろうとも、もう大丈夫な訳よ。

障害飛越運動における時の注意

障害の練習では、まず随伴がポイントね。まずうちの馬で又うちの馬場なら飛ぶのがあたりまえで、飛ばないのが可笑しい。時々反抗したり、拒止したりするが、必ず原因がある筈。例えば、皆の随伴が好い加減で一寸でも衝が口に当れば、鋭敏な馬や新馬はすぐ嫌うから、騎乗者は絶対邪魔しないということよ。随伴だけは遅れないというなら、学校において止まるという事はあり得ないで絶対飛ぶはずよ。だからね、うちの場合、練習に出て来ない者も居るから、飛越しなくてもいいから、腰を上げてバランスを取るといふ事、すなわち、それこそ横木一本でいい訳だ。又横木一本を跨げば、上のバランスが取れているかないかは一目瞭然で、徹底的に直してから、飛ばせばいいので、随伴が好い加減なら、好い加減でいいから、すぐ障害の高さを減じるとか基本を教え直すとか。ただそれだけよ。あとはただ馬をいやがらせない事。すなわち随伴の良し悪しが一番大

切な訳よ。

■随伴が一応大丈夫となったあとは・・・

あとは馬が疲れているのに無理矢理高いのや、数多く飛ばせるとか、雨で下がぬかってすべるのにガンガン飛ばす事。わざとそでない障碍をやつて馬が逃げる様にするとか、腹を痛めていたとか。だからそういういろいろな原因を取り除いて号令をかければそれこそ一週間で十日もたてば、どの馬でも飛ぶ様になるし、馬が荒れてきたら改めて考えればいい訳で、中障碍位どの馬でも飛ぶし、ましてうちの馬は中障碍以上の能力を持っているでしょう。何ていうかな「馬は騎手の過ちを告げている」というから馬が拒否したら原因を追求する必要があるわ。上が随伴できないのに飛ばせたか、下がぬかっていたか、疲れてハアハアいつていたかも知れない。そでが足りなかつたのか肢を痛めてはいなかつたかとかね。立ち上るのは疲れているのに高いのを飛ばせたからでしょうし例えはうちのドンなどはあまりにも随伴がいい加減すぎた様ね。心臓が弱いのに無理矢理高いのを飛ばせたかそでをつけてないかどれかに当てはまるわけよ。うちの馬で一時的にイカレたことがあつたでしょう。あれは使はずぎね。

■そういう時はすぐ休ませるのですか。

疲れた時は休ませるとして、その他の場合は原因をみきわめて随伴ならばそれも徹底的に基本をやること、低いのをネ。その原因を取り除けば部員だけでも満点馬は出来ると思うわ。それも自分から喜んで飛んでいく馬がね。

■試合の準備運動での号令はどの様にかけたら良いですか。

どうせそういう時は十分か十五分でしよう。先づ相手校が乗つたあと、馬が興奮していたら沈静させる事が重要、それから左右の回転を充分にやる事。うちの馬場だつたら少々かたくても飛ぶけど、特に他所へ行つた時之は重要なわけ。停止、後退がスムーズに出来ればまづ大丈夫ね。停止し後退出来ないというのは何処へ行つても難馬でひつかけるか止まるかという馬だから、例えば五分しかいけない常歩だけという様な時は後退を充分やつておく事。どんな場合も静かにね。

×一回の練習に飛越させてよい回数について

低いのは数多く飛ばせてもいいけど、まあ高いのは良く飛んだら一回だけでいいからすぐ低くした方が良くわ。蹄跡で飛んでも中で飛ばないという事はないから充分だと思ふ。まあ最も新馬とが新しい障碍ならものを見ない様になるまで数回飛ばせる必要はあるけど、高い障碍だと馬は神経をつかつて一生懸命飛ぶ。その時ちよつと口にあたるという事は踏切りも飛越もいい時でもよくある事で、次に飛ばせると止まるといふ事があるのよ。こんな時は直ぐよすかそれとも低くして飛ばせておくの。馬は高いのはさほどいやがるものではないから、一、二度馬をならす程度にしておけばいいし、低いのでついでにいければ高くても大丈夫だから、でもそうそう高いのは必要ないなア。高倉君達の時には一頭も飛ばなくつて、真剣になつて彼達は考えて乗せなかつたり、前傾の常歩だけというのもざらだつたりして。まあうちでは飛ぶ様になつた訳だけ。それからそういう事がな

くなつて馬は飛ぶものだと考える様になり、だんだん無茶するようになってきたのよ。そして又いけないうのではなく、自然にそうなるのだけれど今すこしそうなりかかっているし、なんというかそういう神経がにぶくなつていいる様ね。だからもう一度考える必要があると思ふ。高倉君達の時代には最後には一年生が乗つても一メートルや一メートル二〇位は飛ぶようになったのは、一つにそういう事に神経を使つていただけなのよ。

■各個乗りについて

人によるわねエ。全部員が馬に夢中になつて毎日来ている。それこそ優秀な人間ばかりだつたらいいけど、玉石混合している時には優秀なのほ一人で各個乗りでやりたい事が一杯あるだろうし、乗つていないものは各個乗りにしても何やつていいのかわからないし、ガタガタして自分の鞍数の少ないのを棚にあけて、馬が動かないといつて無茶をするといふのは困るしね。乗つていいるものだったらそれこそ何をやつてもかまわないわけよ。乗つていれは悪くなつた所も解るし、自分で失敗して初めて目覚し、人馬共によくなるから自分でやりたいといふ事をやつていい事ねある程度は。

■馬場について

馬場に於いては学生がサンジョルジを踏むのは不可能であるから総合の馬場程度までね。一生懸命やつてきた上級生が行えばそれ位調教できるでしょう。総合の馬場といつても巻乗り、反巻とかだけで要は大勲に慣らせれば良い訳よ。

■下級生に馬場を教える場合、部班よりも各個

乗りの方が上達する可能性があるのですか。
それは見る人によりけりで、優秀な人なら良いけれど、分らないで教えるというのが一番困る。反巻して横歩する位は部班で見ても何んて事はないでしょうね。それ以上の程度に入る場合、その下級生にやる気が有って伸びそうだという事が分れば各個乗りでしぼつても良いでしょうね。

■その場合何を基本として見ていくのですか。

馬場馬術の基本というのは馬を徹底的に収縮させる事が第一で、大勒を補助的に使つて「時には大いに使わなければならぬ時もあるが」脚を使いトモとマエをつめていく。そうすると馬が重心下に乗るから、横歩等、むずかしい運動も自由自在に出来るようになるのだけれど、しかし、横歩といつてもただ馬が横に歩けるという物ではないからね。馬をつめるといつても大勒をやたら引っぱつても馬はつまらないし、脚とこぶしの関連だからね。

■常歩でもかまわないから、つめる事を覚えさせれば良いのですか。

それはそうだけれど、しかし余り行つと青武め様に側対歩になる、青渚は反抗する、青潮は衝をはずすというように馬がいかれて来るので、程度問題ね。

■それでは最後に、普段の練習において障害と馬場の練習日の配分について。

一週間の中、何日かを障害、何日かを馬場というのはいいと思う。馬場はいつでも出来るけど、障害というのほそれが馬をこわすかどうかにかか

つてくるからある程度はやつて置かなくてはね。余り練習に出て来ないものには障害の練習を多くした方がいいでしょう。



編集後記

青山学院創立九十周年を迎えるに当つて、我が馬術部も数多くの先輩方が歩んで来た道を振り返り、ここにその記録を活字として残そうという声が高まつてきた。この機運熱した時に、我々が着手し得た事は感激のいたりである。と同時に喜びに耐えないものがある。原稿を初め、写真、資料等々、すべて提供して下さいました諸先輩方々及び我々を常に指導し、助言して下さいました植松先輩に対して深く感謝致します。

特集号という事で原稿が集まり易いと思つていたのが、め切り間際になつても仲々集まりが悪く焦りを感じた事もあつた。だが、先輩に違つてこの発行の意義を説かれ、励まされ、大いに奮起した事もある。

ズブの素人ばかりの編集会議で結局、重要な事は何も決まらなかつた等という様な事もあつたが何らか雑誌の型になつたのは編集委員諸君の努力に外ならない。こうして出来た、いななき に満足して預けましたら嬉しく思います。

最後にこの部誌発行に当つて多大なる御後援を頂きました広告主である各社には、厚く御礼申し上げます。又、御寄付戴きました青木、手塚、河島、渡辺諸先輩及び餅田馬糧店、小川軒に対して慎んで感謝の意を表したいと思います。

尚、写真人物の不明な点、及び紙面の関係上原稿の一部を割愛致しました事を深くお詫び致します。

青 兔 号



ヒン馬。中半血。栗毛。27年7月人厩。29年出厩。購入地は御殿場。咬、蹠癬等で新人生を困らせた。

青 姫 号



ヒン馬。中半血。栗毛。27年7月人厩。33年出厩。購入地は御殿場。珍しい四白で、6年間もの長い間部員に可愛がられた。

青 峯 号



セン馬。中半血。栗毛。26年人厩。30年出厩。購入地は御殿場。この馬は初代自馬でこれを得た当時の部員の感激は並大抵なものではなかった。

馬 匹 紹 介

青 嵐 号



セン馬。中半血。栗毛。31年人厩。33年出厩。馬場馬でパッサージュを得意とした。

青 波 号



ヒン馬。アラブ。栗毛。30年人厩。35年出厩。購入地は秩父。この馬の存在価値は阿部先生によって作られた。当時としては珍しく乙馬場を踏むことが出来た。

青 翠 号

ヒン馬。アラブ系。鹿毛。29年人厩。30年出厩。購入地は福島。この馬は馴みが薄くご記憶の方は少ないかと思えます。

青葉号



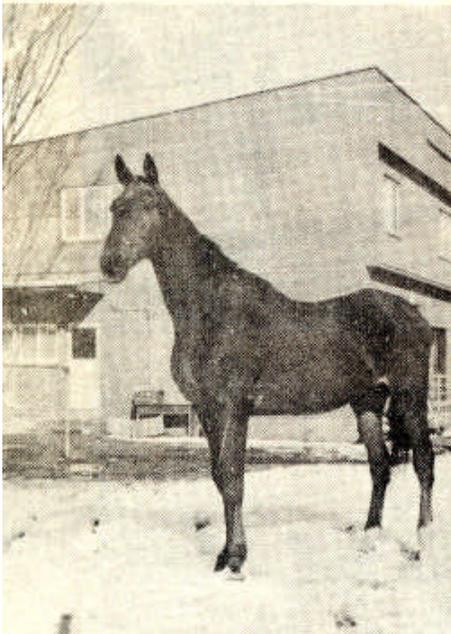
セン馬。アラ系。栗毛。32年入厩。
35年出厩。パッサージュ、ピアッ
ヒ工等高馬術が出来た馬である

青影号



セン馬。中半血。鹿毛 31年入厩。
34年出厩。阿部先生の調教により
横歩迄踏めるようになった。

青菊号



セン馬。中半血。栗毛 33年入厩。
34年出厩。先輩より寄贈され奈良
より運ばれた。すでに老いていた為
に一年足らずで出厩。愛称ギク。

青幸号



セン馬。アングロアラブ。栗毛。32
年入厩。33年死去。対中央戦の時の
ケガで破傷風となり薬殺された。



青麗号

ヒン馬。アングロアラブ。栗毛。34
年から36年。現在も横浜乗馬倶楽部
において活躍しております。

青 渚 号

セン馬。中半血。栗毛。35年6月より現在にいたる。購入地水沢。国体出場、その他障害：六段飛越で数多く優勝。愛称ナギ。



月 雪 号

セン馬。中半血。尾花栗毛。35年5月より38年8月。関西学際大より購入。咬、蹴癖がひどい。東京大会婦人障害優勝。愛称ユキ。



青 剣 号

セン馬。中半血。鹿毛。34年より36年。購入地水沢。期待され乍らもフィラリヤで死亡。愛称剣坊。



セン馬。重半血。鹿毛。34年より37年1月。水沢より購入。愛称トタ。



青 光 号

青 武 号



雄馬。アングロアラブ。鹿毛。36年より項在に到る。阪神競馬場より購入。アバロン大会、東京大会にて中障害、サンジョルジュ優勝。愛称タケ。

青扇号



ヒン馬。アングロアラブ。栗毛。37年11月より39年6月。宮城県より購入。アバロン大会婦人サンジュールジュニ優勝。愛称チビ。現在青藤と共に宮城県牧場に余世を送っている。

青藤号



セン馬。重半血。鹿毛。37年11月より39年6月。産地宮城県。寄贈。アバロン大会婦人サンジュールジュニ2位。愛称ドン

青替号



ヒン馬。アングロアラブ。鹿毛。36年11月より37年11月。阪神競馬場より購入。アバロン大会の婦人障害で優勝。愛称スイ。

雷神号



雄馬。中半血種。柄栗毛。37年11月より現在に至る。宮城県より購入。東京大会婦人サンジュールジュニ2位。神奈川大会中障時優勝。愛称

青潮号



セン馬。中半血種。黒鹿毛。37年11月より現在に至る。水沢にて購入。青駿と異父兄妹。愛杯クロ。

青 駝 号



ヒン馬。中半血。鹿毛。39年6月より現在に到る。水沢より購入

青 疾 号



セン馬。中半血。鹿毛。39年6月より現在。農大より購入。愛称ヒット。

PLASTIC COSMETIC
SURGERY
JUJIN HOSPITAL

美容整形 (眼・鼻耳・
皮フ・歯科...)

新橋駅前
(銀座口)
TEL (571) 2111

十仁病院

院長 梅沢 文雄

総務部長 医学博士 羽坂 勇司 (昭13中) (昭16中)